

日本に送られる品物を入れた澤山の箱の一つが突然口が開いて輸出禁止品目のリストに載つてゐる金屬が出たことなどがあつたからである。

數ヶ月後、別の日本海軍練習艦がカワイ島の隣島にあるポート・アレンに儀禮的訪問を行つた時には、軍艦側では又「例の事件」の二の舞ひを演じないやうにと萬端の注意を拂つた。日系米人、歸化せざる者、二重國籍者、日本から國籍離脱した市民等大約三千人が同艦の「アフト・ホーム」の催しに出席し、贈物を捧げた。日本系に外の住民は歩哨から「外國人」はお断りだといよく追ひ返された。上流の白人に對する艦長名入りの正式の招待状は祝ひの翌日になつて郵送で送り届けられた。これは露骨な社交的侮辱である。數ヶ月前の不祥事件に對する日本人ならしいデリケートな復讐の表現だ。と、とられたのは無論のことである。

ハワイにおける信用失墮の徴候が顯著になつて來るのに頭を痛めてゐたところへ、一九四〇年二月に日本政府は大陸の日本占領地區の人的資源補充のため、ハワイ及び合衆國西岸から日本人を送らうとの動議が日本の議會に提出されたのを知つて、日本人社會の指導者は痛く當惑した。ハワイの日本字新聞は同島の日本人の利害關係からいつても忠誠の念からいつてもアメリカ人であることを強調して、右の案を嘲笑した。その時「布哇報知」は實際的に考慮して見るとかかる措置は到底推賞出來ぬと指摘した。「かつてはハワイの日本人をして滿洲國及び支那における日

本統治に歸した新地域の開發に關心を懷かせやうとする努力もあつた。占領地下で機會を探す目的で旅行團が組織された。日本人は親しく自分の眼でそれを見出さうとハワイを立つた——ところが彼等は結局ハワイの住みよきを今更のやうに強く肝に銘じて歸布したのである。」それは確かに現實的な論法であつた。

その少し前、合衆國は日本との通商協定更新を望まずと華府が聲明した時には、ハワイにおける反響はおしなべて悲觀的であつた。日本字新聞のみならず英字新聞までが日本商品に對する輸入制裁の不當なるを強張した。そしてハワイの對外買付けの三分の一は日本で行はれるのであるから、かかる措置はアメリカ中でハワイに一等早く且つ深刻な影響を與へるだらうと強調した。無論、本國內に起りかけてゐた對日禁輸運動に對しても新聞は強硬に反對したのである。

日本人社會がハワイにおける禁輸事件の論議を、それがハワイの立場を「動搖させる」だらうとの理由で先手をうつて遮らうと決意した事實は、一九四〇年三月三日ホノルルのケー・デー・ユー局からの「アメリカの空中町會」といふ放送をめぐる特別な事情に徴しても明らかだと思へる。合衆國は日本に對し禁輸を斷行すべきか、或は最近廢棄された通商條約を復活すべきであるかの論題が、前亞細亞艦隊司令官ハリイ・イー・ヤーネルに退役海軍少將、元駐日大使で國務次官ウイリアム・アール・キャスル、及び永らく支那のミツション病院院長たりしドクトル・ウォ

ルター・ジャッドの三人によつて論議された。ケー・ヂー・ユー局と特殊關係にあるホノルル・アドヴァタイザー紙に反復廣告された。放送時間になると、聴取者の驚いたことには、ヒリッピン問題の放送が聞えて来た。局名を放送するためプログラムの途中で放送が一寸とぎれたとき、アナウンサーは禁輸論争の録音が放送の間に合はなかつたこと、及び既にサン・フランシスコからクリッパー機で積み出したのであるが、悪天候に禍されてハワイに向け離陸出来なかつたことを報告した。しかしその間にもケー・ヂー・ユー局には聴取者からの電話が殺到し、同局がラジオ廣告者たる日本商人の鼻息をうかがつたことを非難した。ヒリッピン問題が終ると對日禁輸論争録音レコードが「発見され」引續いて放送された。同局はこの事件の詳細を發表しなかつたけれども白人はすぐさま、これは地方の日本人がケー・ヂー・ユー局に壓力を加へやうとした企てに相違ないといつた。討論の一般的調子が決定的に親支那的であつたので、キャツスル氏（五大財閥の一つキャツスル・アンド・クツク株式會社の大株主）も日本のために辯護の餘地を發見するに苦しむ程で、確かに録音板の何處かに檢閲が行はれたに相違ないやうであつた。

ハワイの日本人に關する限り、彼等にアメリカの放送檢閲が、反日的であることを指摘してゐる。既に數ヶ月前、ホノルル放送局は陸軍の承認の下に、外國語によるニュース放送を禁止してゐた。同島の日本人はこの措置は他の國にも影響はするであらうが、主として日本の官立通信社

たる同盟ニュース（その息のかかつた通信は日布時事に現はれる）の放送に向けられたものと公言した。けれども間もなく、日本政府は一九四〇年五月二十三日この事態の對抗手段を取り、ホノルルの日本總領事を通じて「ハワイ及びアメリカで聞かれる海外定時放送に、毎日ハワイ向け放送を加へる旨を聲明した。日本放送協會東京のジェー・ズイー・ケーから毎晩送るハワイ向け特別放送は三月三十一日から始まり、そのプログラムの紹介は、ハワイ生れの青年によつて日英兩國語で行はれてゐる。彼はホノルルのマツケンレイ・ハイ・スクールとハワイ大學で教育を受け、最近増加の傾向にある教育を完成する目的で渡日した青年で、日本で重寶がられてゐる一人である。

毎日の海外放送は、午後六時三十分から同八時まで續くので、本島のラジオ・ファンは、日布時事が指摘したやうに「毎晩東京からの二時間半に亘るプログラムの御馳走になつてゐる」のである。聴取者は同盟ニュースや、日本の政策に關する政府の解説の外に、ハワイの友人や親戚に挨拶を送る前ハワイ在住者を中心とするプログラムを楽しんでゐる。ハワイからの旅行者も祖國の印象を放送し、故國の觀迎振りを長々と語つてゐる。ハワイの日本人にとつては空中電波が最も有效な——そして最も安價な——日本との接觸手段であることがかわつたのである。

ハワイの日本人は、既述の如く、種々の方法で新しい日本といふものを知らされる一方、又

ハワイの事業にも抜目なく全力を傾注したのである。即ちその驚嘆すべき節約の傳統を事業擴張成功の基礎なりとして一九四〇年度にも持ち越し、地方取引に積極的に乗り出し、新事業をも起したのである。ハワイの日本人社會の指導者達が、地方商店や土地に日増しに大きい額の投資を行ふことを知ると、白人達は一體何處からそんな金が入つて來るのかといふ疑問を發した。ただ節約だけでこのやうに莫大な金が残るのであらうか？ それとも日本の個人や會社の投資者、あるひは日本政府が事實ハワイに關心をもつて來たのであらうか？

日本がハワイに投資してゐるのは隠れもない事實であるが、その額に至つては諸説紛々としてゐる。投資の殆んどすべては日本人の會社にのみ限定されてゐる。これらの會社はハワイの日本人が經營するもので、彼等は又地方の日本人社會に限つて資金の融通を行つてゐる。かかる資金は必ずしも東京の大銀行大會社のハワイ支店を通る必要はなくまた他の知名な代理店の手を経ない。ハワイが日本からの資本の流入の経路を注視し得ないといふことは、ハワイの官吏のつらいところである。

彼等が遭遇した一例をあげるとこんなことがある。數年前地方の日本人が彼らが所有し、彼らで操作する漁船を碇泊せしむる入江に面した、相當地域の土地所有權を獲得しようとして縣政府に願ひ出た。彼等はその土地を美化して永久的な公園とし、日本風の庭園を構築するために五萬弗か

けるといつた。この計劃は最初は好評で、世話役は社會の贊辭の的となつた。その後になつてその事業の資金は日本から來ることがはつきりした。世話役は最初の頃は地方の日本人がこの計畫の金を出すとほめかけたけれども、ここにおいて金は日本にゐる日系アメリカ市民によつて、彼等のハワイに對する報恩の意味で據出される筈だと確言した。けれどもハワイ縣政府が外國から資本を仰いでゐる團體に、土地を賣らうとしてゐることに對して公衆の神經がたかまつて來たので、この計畫は抛棄されるより他はなかつた。

クレス商會や、シーヤス・ローバック商會等の如くホノルルに大規模な支店を持つてゐたり、或は正にそれが完成されやうとしてゐるアメリカ本土の大會社に負けないやうにと、世界最大のデパートの一である東京の三越は一九四〇年に、ハワイ在住日本人の需要に應ずるために、五十萬弗を投じてホノルル支店を建築することを發表した。三月一日に地鎮祭が行はれ、これには、慣例の佛式の儀式が行はれ、日本の領事が臨席した。その後間もなく日本式の販賣法習得のために、店員達がハワイから東京の三越に派遣され、また東京本店員十數名が新事業監督のためにホノルルに到着した。

これと軌を一にして、色んな新事業が設立されたが、中で特筆すべきは新しい日本劇場の建築であつて、これは建築費十二萬弗、國際娛樂會社の經營になるもので、公表されたところによる

と、三越の場合と同様、ハワイに對すの投資者の援助によつて着工されたのである。ハワイの業界全體が、緊縮經濟の下に四苦八苦してゐる最中に起されたこれらの事業の尨大さは、ハワイの日本人の經濟的實力は遂にここまで來たかの感を抱かせる最も確實な證左であらう。

その上、彼等の商業上の勢力の急潮は、彼等の日本とのつながりが益々強化されたことの争ふべからざる例證と共に、アメリカの對日關係が全然冷却した。或は將にそうならんとする瀬戸際にやつて來たのである。又、一九四〇年の四月、ワシントンに於ける上院海軍委員會において發言された現役のアメリカ海軍高官のセンセーショナルな反日的證言も、對日關係の改善に禍ひこそすれ決して役立ちはしなかつたのである。

海軍とハワイ

海軍とハワイ

日本はいよいよ假面を捨てて世界制覇に踏み出した。すでに第一步を支那に進め、やがては比島、佛領印度支那及び蘭領東印度にまでその手を伸ばすであらう。無論、ハワイ及び合衆國西海岸をも覗つてゐる。つまり合衆國はどうしても日本との一戦を避けることは出来ないのである。アメリカ民衆はこの事實を悟ること早ければ早いほど救はれるのである。

近年ほとんど定期的に、アメリカ海軍は右のやうな意見を無遠慮に發表しては、メイン州より加州に至る全米評論記者に、海軍の意圖及びそれから起る問題に對する忌憚なき諷示の種を供給してゐる。

一九四〇年四月に、ジョーゼフ・ケー・タウンシグ少將が上院海軍委員會の席上、對日戦争は「不可避」である、日本は、先づ合衆國を粉砕した後「世界制覇を遂げる計畫を樹ててゐる」といつた時には、彼はそのためにどんな反響を惹起するか、多少は覺悟してゐたに相違ない。何れ

にせよ彼は一夜の中に記録破りの激しい非難を浴びせられた。新聞は殆んど筆を揃へて彼の言説は不合理だ、いや狂氣の沙汰だと書き立てた。紐育選出下院議員ハミルトン・フィッシュ・ジュニアは、提督の言説は「現代海軍當局者中、誰の言よりも一番挑発的、煽動的で危険な證言である」といきまいた。また上院議員ベネット・チャムプ・クラークは「海軍軍人は常に何物かを欲してゐる。如何に多くの軍艦をもつてゐても、それで足れりとしなない。彼等に戦艦を興へよ、さすれば彼等は補助艦を要求する。彼等に補助艦を興へよ、さすれば彼等は海軍は均衡を失つたから更に戦艦が必要だといふ」とこぼして、「少將を軍法會議に處せよ」と要請した。

タウシグ事件は、その當時にあつては議會を動かして、全西半球を防衛するに足る超大海軍の建設を承認せしめようとの驅け引きだにとられたのであるが、この事件は國務長官コーデル・ハルが日本に對し、蘭領東印度に手を伸ばすなと率直に言明してから一週間もたたないうちに起きたことであり、また同時にハワイ水面において演習中のアメリカ艦隊が、海軍始まつて以來、最も大規模の、且つ最もはげしい大演習を行つてゐた時であつたのである。

海軍省はタウシグ提督の個人的意見に對し何等責任を取らなかつたけれども、といつて、日本がアメリカの太平洋における理論的敵國であるといふこと、及びそこを守ることが日本の攻撃よりアメリカを護ることであるといふ事實については、何等の釋明をも試みなかつた。この目的

のためにハワイ及びその周邊の海軍活動は、最近未曾有の水準に登つて來た。けれども第十四海軍區（オアフ島眞珠灣）の中心的使命を把握するためには、太平洋における海軍の戦略として、一般に認められてゐる簡易な要素の具體的知識を先づ必要とする。

吾人はオアフ島を太平洋防衛の據點として世界中最も強力なる海の要塞に造り上げた。これは敵即ち假想的日本が、アメリカ西海岸に攻撃を加へて成功し得る唯一の地點であるからである。太平洋の地圖（その全域を示す如何なる地圖も太平洋の廣漠さの眞の印象を興へないが）を一見すれば、オアフ島はサン・フランシスコを去る約二千マイル、ロス・アンゼルスからはそれより少々遠い地點にあることがわかる。アメリカ西海岸に到達するためには日本は、先づ太平洋戦争最大の障碍、即ち距離を克服しなければならぬのである。

海軍權威筋の推測によると、日本艦隊の行動半徑——出動して交戦したのち歸つて來られる距離——は二千五百マイル以下である。オアフは、もしそれを使ふことが出來るとすれば、日本の供給基地としては絶好の役を果すであらう。しかしオアフは使へない——そして有效距離内の他のどの島も使へないのである。何故ならば、メキシコ海岸や更にカナダ海岸に強力なる供給基地を設け得るといふ「人騒がせな」斷言にもかかはらず、われわれがそれと氣づかないうちに、戦艦隊を支へるに必要な尨大な施設を持つことも、また持たせることも出來ないからである。

シアトルの北西、一千七百マイルに位置するアリユーン群島のダッチ・ハアバーは恐らくハワイに次ぐ最好の根據地であるが、右の目的には適しないであらう。海軍は同島の防備を改善してはゐるが、同基地を艦隊活動の目的に適當ならしめるが如き擴張はなんら考慮に入れてゐない。そのうへ海軍は、かりにアメリカ艦隊が他で交戦してゐる間に、日本艦隊が日本から二千五百マイルを航行してダッチ・ハアバーを占取しても、さほどの困難なく同島を奪還し得ると確信してゐる。それにもかかはらず、わが西海岸に對する北方からの襲撃に對する防備を一層固めるために、海軍ではオレゴン州のタンブ岬、アラスカのシトカ及びコディアックの基地を擴張してゐるのである。

過去數ヶ年間、海軍は太平洋におけるあらゆる可能的緊急事態に備へるために努力して來た。吾人は今一つを大西洋に、一つを太平洋にと、二つの殆んど同等の威力をもつ艦隊から成りたつ兩洋艦隊を建造中であるとは言へ、その完成までには四年乃至六年を要する。かくてなほ當分の間は、海軍は敵が南米あるひはカリブ海に侵入するのを撃退するためには、現在の艦隊を或は少くともその一部を、太平洋から大西洋に移動しなければならぬといふ必要に直面してゐるのである。このことは、オアフの海軍による防備を、甚しく減じたままに放置することになる。オアフの陸軍はかかる危機のために備へてあるとはいへ、陸海軍ともに、若し敵が如何なる基地にも

せよ、十分なる軍艦と大砲と飛行機とを集中する意志を有し、また集中し得さへすれば結局、オアフを占領し得るといふ想定の下に防備計畫を進めてゐる。とすれば、若し日本が本當にオアフ奪取に成功したらどうなるであらう？

かかる行動は明白にわが西海岸を危殆に瀕せしめるであらう。同時に日本艦隊がオアフを基地としてゐる以上、わが太平洋の貿易は一掃されるであらう。錫、ゴム、タングステンその他の礦物等、必要缺くべからざる輸入は斷たれる。又ある種の藥品、ロープ用纖維、絹、茶等の輸入も杜絶される。規則的にフリッピン及びハワイから供給されてゐたアメリカ砂糖消費量の三分の一も阻止される。そのうへ極東及びハワイに於けるわが權益は悉く失はれるであらう。

かかる損失以上に破壊的なのは、西海岸一帯の空爆と、日本の軍隊を上陸せしめようとする試みをさへも甘受しなければならぬ地域における生活の不安であらう。氣質的に傳統的に攻撃に慣れ受身の防禦に不慣れなアメリカの防衛者達の士氣に、このことが如何なる影響を及ぼすかは何人も言明することは出来ない。わが艦隊が太平洋上にありさへすれば、勿論、かかる事態は殆んど惹起しさうにもない。けれども、兩洋艦隊がまだ實現しないのであるから、海軍省としては主力艦隊が大西洋にある場合にも西海岸を防衛出来るやう最善をつくして來たのである。眞珠灣にわが海軍の重巡洋艦の半數、新型驅逐艦の三分の一、航空母艦一隻、戦闘艦隊付水雷敷設艇、

新型爆撃機と偵察機數十臺及び潜水艦——その兵員として一萬七千名以上の強力なる攻撃力が常置されてゐる。彼等の任務は日本艦隊を捜索し、アメリカ艦隊の援軍がパナマ運河を通り四千七百マイルを航行してハワイ水面に来るまで、執拗な艦隊行動を繰返して、日本艦隊をハワイの西方に引きつけて、そこへ制扼しておくことである。

ハワイ派遣艦隊が單獨で戦ふ場合でも、或は残部の艦隊が集まつて来て全艦隊の力で戦ふ場合でも、どちらの場合にも適應したアメリカの防衛計畫は樹てられてゐる。而してその何れの場合にも、結局は強力なる攻撃的突進を基礎としてゐるのである。西海岸のコディアックからカラバゴス諸島及びパナマ運河に至る間、延々と一千マイル幅の防衛水域が擴がつてゐる。日本艦隊はオアフを占領するか、ハワイ派遣艦隊を戦闘不能に陥れるか（あるひは他の艦隊をも、もしそれが太平洋に出動してゐれば）しない限り、この防衛區まで前進し得ないのである。

それより遙か西方、コディアックから南ヘダッチ・ハーバーを通りミッド・ウエイ島、ジョンストン、及びバルミラ諸島を通つて描かれる巨大な弧線の中に主防衛區の外邊があり、眞珠灣がその焦點となつてゐる。オアフ西部をふちどつてゐる島々には——その島々の中ではミッド・ウエイ、ジョンストン及びバルミラが最も重要なものであるが——海軍の前衛要港があり、これは狀況如何により柔軟性のある防衛線ともなれば攻撃線ともなる。そこでは熱狂的な海軍活動が進

められてゐる。即ちこれらの島々は飛行用及び燃料補給用前哨地點として役立つやうに築かれてをり、ここから海軍の「眼」がオアフ及び東太平洋への敵の接近を見渡し得るやうにしてゐるのだ。そしてこれら諸島間及びオアフの水面ではハワイ派遣艦隊の定期演習のみならず、全艦隊の複雑な演習が頻々として行はれてゐる。

更にそれから張り出してゐる第三域は外部防衛區がある。これはミッドウエイ、ジョンストン及びバルミラから、日本の委任統治諸島の點綴せる區域を眞直ぐに通つて、グアムのアメリカ海軍要港に至るまで伸びてゐる。グアム防衛について議會の支持を得ようとする海軍側の努力は未だ成功せず、また日本は、グアム島防衛をもつて直接的な脅迫及び挑戦と見なすだらうとの警告を發して強硬に反對してゐる。成る程、それは脅威であり挑戦であるだらう。何故ならば、もしグアムが飛行用、潜水艦用の大基地となり、十分な守備兵を備へ、日本が同島を征服或は占領することに大變な苦勞となると、アメリカの海軍の攻撃力は日本の内海及び主防衛區の中心まで擴げられるからである。海軍がグアムに關し如何なる見解を持してゐるかは、一九四〇年四月、海軍作戰部長ハロルド・アール・スタアク提督が上院の海軍委員會で、グアムの基地擴充は西太平洋における海軍作戰の遂行に對してもたらさるべき最も有利なる條件を確約するものであると述べたことで明かとなつた。また他の海軍専門家達も、グアムは日本の貿易を破壊し得る基地とし

て使用し得ると證言してゐる。

けれども記憶すべき最も重要なことは、主防衛區並びにそこに張り出してゐる外部防衛區におけるアメリカ艦隊の活動は眞珠灣把握に絶對的に依存してゐるといふことであつて、眞珠灣は數年間を費して海軍の一石炭積込要港から、建艦以外は軍艦の一切の用を達し得る工業的基地に變へられてゐる。同灣はわが最大の巨艦を入れる乾船渠をもち、燃料補給も修繕も乗組員の補充もできる。その指狀の三つの入江の中に、今日ではわが全艦隊が安々と碇泊出来るのだ。

アメリカ防衛計畫の性質から見ても、もし海軍が戦ふとなれば、ハワイの西部、できれば百八十八度子午線を越えた日本の水面で戦はうとするだらうことは明瞭である。アメリカが北太平洋のアリューシアン列島を通つて攻撃するにはダッチ・ハアバーに巨艦用の船渠が必要だが、そんな設備は同地にはない。同時に戦闘艦隊の兵員十五萬人分の食料と軍需品を同基地に供給する必要が生じてくる。これが全部出来たとしても、北日本へ進撃しただけでは、戦争勃發後もまだ存在してゐる日本の供給線を断つことにはならないであらう。

ところが、ハワイを通つて、もつと南のルートから進撃するとは話は別である。この進撃路における行動の一部分は明瞭であるが、現在のところ未だ主として推測の範圍を出ない。それはフレッチャー・ブラットが、その著「海軍力と今日の戦争」の中で指摘してゐる如く、軍隊と食糧の

絶えざる流れを、西海岸を去る二千百マイルのハワイを経て、ハワイから更に西方の食糧及び燃料補給の主要基地として使へるといふ島まででも、維持することを含むであらう。「それは軍隊と食糧を、信じがたいほど長いルートに於いて、飛行機と潜水艦の攻撃から守ることを意味するのである。それは日本軍に對し潜水艦の碇泊所或ひは飛行機の着陸場を提供し得るあらゆる小島を各個に征服することを意味する。それは又、一步々が戦闘を意味するだらう。何故ならば日本人はアメリカ人の攻撃に於けるが如く、防衛には賞讃に値するものがあるからである。最後にそれは、日本の生命線である海外貿易を断ち、日本の封鎖に成功することを意味するであらう。いつ方日本はどう出るであらうか？ 日本の爆撃機、潜水艦、巡洋艦及び驅逐艦は、アメリカの供給線切斷を目指して城塞化された日本委任統治諸島の基地から飛び出して来るであらう。自國の領海、従つて勝手知つたる水面で作戦するのであるから、日本はアメリカと戦つて目覺しい戦果を収めるであらう。恐らくは日本はハワイ以西にあるアメリカの基地を占領することも可能である。よしその後、數において優越せるわが海軍のために、その島々から撤退させられるかも知れないとしても、一時は右のやうな状況を呈することはうなづかれる。近接戦における日本艦隊の實力は未知數に屬するが、その速いスピード（アメリカ艦隊の縦列は、主として重い装甲と重砲のため、その點では一番遅い）は日本をして、太平洋制覇のために堂々と戦ふべき時と場所

を選ぶことを許すであらう。但しその戦争が起きれば、それは日本の海軍力の破滅を意味するだらう」とアメリカ海軍は確信してゐる。

海軍はその太平洋諸基地の内外で絶えず計畫し、構築し、演習を行ひつつ、一見如何に氣狂ひじみてゐようと、また不合理的であらうと、如何なる緊急事態に對しても備へるためにあらゆる努力を傾倒してゐる。この活動の尨大な全貌の一端は、時としてアメリカの民衆に傳へられるが普通それは人事とかあまり重大でない陸上作業についての情報の形をとつてゐる。海軍のもつ重要な活動は、鋼鐵張りの秘密の中に閉ぢ込められてゐて、それが一般に知られたのは前大戦の場合の如く、ただ實戦が行はれた時である。しかし既に詳述した太平洋の諸要因、特にアメリカの防衛區及び海軍の廣範圍の構築計畫（一九四〇年の六月十三日から八月十五日間に、總額四千七百萬弗に及ぶ海軍の請負事業がハワイ周圍の防衛計畫事業に與へられた）を考慮に入れるならば、ハワイがアメリカの戦争計畫中で演ずべき役割を察知するには何等の炯眼をも要しないところである。

國民はそれを理解しないかも知れない——海軍活動に永らく慣れつこになつてゐるオアフ島の多數の住民さへも理解しないかも知れない——だが今日オアフは全國中の何處も比肩し得ない、集中的な實戦そのままの演習舞臺なのである。將校も水兵も戦時體制で働いてゐる。數ヶ月間彼

等は砲撃及び水雷訓練に、高空爆撃に、野外演習に、加ふるに檢閲網の強化まで行つて、戦時行動を基調にしてゐる。第二次歐洲大戦が始まつた時、既に急速調であつた歩調は即座に高められた。眞珠灣は大統領宣言の結果、商船を入港せしめないことにした。一派遣艦隊が眞珠灣に常備さるべくサン・ディエゴから送られ、同地の海軍力を増大し、現在のハワイ派遣艦隊がもつ恐るべき攻撃力を同基地に與へた。眞珠灣中のフォード島にある海軍航空隊の偉力を増大するために追加された。哨戒爆撃機が西海岸から急送された。港灣建設は火の出るやうな速度で急がれてゐる。約言すれば海軍はその指揮下にある一切の施設をもつて一旦緩急ある場合のために準備をとのへたのである。

ホノルル港から海岸を七マイル上ると眞珠灣に通ずる、わかりやすい比較的狭い水道がある。外洋から見るとそれは大したものには見えない。事實、これはもともと、オールで漕ぐ小舟が辛うじて出入できる程度より少し大きい通路に過ぎなかつた。しかし一千六百萬弗以上の巨費を投じて擴げたり、眞直にしたり、深めたりして、今では最大の巨艦でも自由に出入できるやうになつた。長さ三マイルと四マイルの二つの入江に沿うて、何百といふ碇泊装置、直線距離一萬五千呎以上の錨揚げ用設備がある。しかし最も著しい變化を遂げたのはこの入江と入江との間の陸地である。曾つては荒蕪地に過ぎなかつたものが、今や一變して異常な工業基地と變化した。ここ

には艦隊用に必要なあらゆる設備の他に素晴らしい兵舎、貯蔵庫、鐵道、彈藥庫、潜水艦基地、艦隊空軍基地、無電局、水路測量所、病院等全部で約百七十五の建物がある。このやうな設備には莫大な金を要したと思へるが、實際には合衆國政府は同基地建設のために僅かに二億五千萬弗を費したに過ぎない。これは海軍の諸經費に關する限り相當の額ではあるが、決して莫大な額ではないのである。

近年、眞珠灣は屢々ニュースに現はれるので、現在オアフをかくも重要ならしめたところの海軍活動を除外してはオアフを考へることは出來ないやうになつた。ところが實際には、ハワイと海軍との因縁は眞珠灣の開發も始まらない約一世紀前——現在の緻密な科學で造られる戰艦の時代などは夢想だに出來なかつた。「木の船と鐵人間」の英雄的な時代にまで溯るのである。

最初のアメリカ軍艦がハワイ水面に現はれたのは一八一二年の戦争の末期であつた。その軍艦とは「サア・アンドリウ・ハモンド號」で、恐らくハワイを訪問した各國軍艦中最初のものであらう。十二の大砲を搭載した英國商船ハモンド號は、命知らずのアメリカ人の一團のために南洋で拿捕された。アメリカ人は捕虜にした乗組員を同船に乗せ、合衆國海兵團のジョン・ギヤムブル大尉に指揮させたのであつた。一八一四年三月二十三日、よろめくやうにホノルル灣に入つて來たハモンド號は哀れはかない姿であつた。同船は航海中乗組員の反亂に遭つたり、錨は失ひ、

水夫を甲板から洗はれたり、船具全部を使へないまでにした恐ろしい嵐と戦つたのであつた。その上船員の多くは食ふものを食はないで永らく海上にゐたので、まるで骸骨となつてゐた。

三週間たらず修繕のため碇泊したハモンド號は、食糧を補充し、ハワイ人數名を船員に加へ、アメリカ本國に向け出帆した。皮肉にもその二日後、同船は英艦「ケルビム號」に拿捕されて、船員は捕虜となつた。そしてこの不敵な一團が再びアメリカの土を踏んだのはやつと一八一五年八月末のことであつた。

當時はただサンドウィッチ群島としてのみ知られてゐたハワイに、次のアメリカ軍艦が到着したのは十二年後のことであつた。一八二六年一月十四日、アメリカの武装スクーター、戰艦用スルーブ、さてはフリゲートまでが、危険な南アメリカの南端を迂回して南及び中央太平洋の波靜かな水面にやつて來たのである。更に多くのアメリカ軍艦が一八二九年から一八四六年の間にホノルルを訪れたが、その中にはわが國海軍年艦中の無上の誇りである軍艦の名前があつた。——即ちヴァインセンス、エンタープライズ、ボトマック、コロムビア、ジョン・アダムス、フライング、フイツシュ、ボーボイス、セント・ルイス、ヨーク・タウン、オレゴン、ユナイテッド・ステート、ボストン、コンステレーション及びコンステチューションの諸艦でそれらは寧ろ「昔の鋼鐵張り」として有名なものである。かかる有名な古への木造軍艦の艦名は、今やすらかに眞珠

灣に碇泊してゐるわが海軍の力強い航空母艦、戦闘艦、驅逐艦等によつて繼承され、その名を不朽ならしめてゐる。

同世紀の後半には、さらに多くのアメリカ軍艦がホノルル港に入つた。といふのは同島の迅速なる發展と共に他の諸國民、特に英、佛及び日本はハワイの有望なるを認め、自由民を保護するためばかりでなく、この島に自國の旗を翻へす可能性を探るために軍艦を派遣したからである。

この成行に油断怠りない合衆國陸軍省は、かかる不測の出來事を避けるため、一時ホノルルに軍艦を駐屯せしめることを目指し、時にはかなりの期間碇泊せしめた。その結果、ハワイの住民達はポーツマウス、ラツカワンナ、ヴァンダリア、ブルックリン、イロクオイス、モヒカン、ハートフォード、ジュアニタ、オマハ、チャールストン及びアライアンス等の諸艦の碇泊によつて現状維持を助長しようとするアメリカの政策をよく諒解するやうになつてきた。

一八七四年から一八九一年に至るカラカウア五世の治世には、アメリカ海軍將校たちはハワイの諸事件に積極的に参加するやうになつた。彼等は事業上、紛擾の調停者になり、取引契約を商議し、王朝と合衆國間の通商を促進せしめ、更に進んでは分遣隊によつて法律秩序の維持を助けたのであつた。かかる活動に關しては、合衆國海軍は他の諸國の國民の反對を押しきつて大膽に所信を斷行した。外國人はハワイにおける合衆國の役割が日増しに増大するのを憤つた。これは

特に日本人の場合に甚だしかつた。日本人はアメリカ海軍がアメリカ國民の權利を如何に強く後援してゐるかを認め、同じやうに日本國民のために軍艦を送つた。しかし、それは大抵、その目的を達し得なかつた。その原因の一つは、日本人に對しては國籍を問はず白人が團結して共同の反抗をする習慣性によるのであつた。

その上、社交的並びに個人的因縁が、海軍と島の住民との間にできて來た。それはやがて公式の、そしてより儀禮的な紙帶と同じやうに、密接に且つそれはそれなりに重要なことがわかつて來た。島を訪れたアメリカ將校達のために數限りない念入りな社交的お祭り騒ぎが催された。イオラニ王宮は燦然たる舞踏會や晚餐會の場面となり、それにはアメリカ軍艦の主腦部が貴賓として出席した。このお返しに、ハワイの貴顯紳士達は艦上の音楽會や親善の催し物等で歡待されたが、それは彼等を喜ばせると共に、アメリカの親善的意志を確信させたものであつた。それは後年非常に大きくひろがつた交際の一過程であつた。何故ならば、海軍がハワイに諸施設を設けるや、多くの將校や水兵が續々とやつて來て、ホノルルといふものを知り、そのうち多くの者が結婚して島の家庭に入りこんだり、隠退した後ハワイを彼等の家庭としたからであつた。

合衆國が眞珠灣の有望なことを逸早く認めたといふことは、正に記録に價する事である。一八四五年ハワイの外務大臣ドクトル・ジャッドが、合衆國陸戰隊のアイ・ダブリウ・カーチス大尉

に、同島を外敵の侵入から衛るために防備を施すべき方法を示唆して呉れと頼んだ時、この青年將校は「眞珠灣の大きな重要性とその完璧な安全性」について長々と述べたものである。けれども一九〇八年までは、眞珠灣の海軍要港の作業は実際には開始されなかつた。同年にたまたま大統領セオドール・ルーズヴェルトが、世界一周航海に派遣した十六隻の第一級軍艦よりなるグレート・ホワイト艦隊のハワイを訪問した事が、偶然にもこれに拍車をかけたのであつた。

その時以來、同艦隊は定期的に寄港し、その度毎に眞珠灣の諸施設に大きな改善が施されてゐるのを發見したが、その諸施設は、遂に最近十年間には同基地をして世界の海軍城砦中、第一流の地位に飛躍せしめてしまつた。それでもまだほんの端緒が作られただけである。何故かといふに第十四海軍區の工務部長ロード・エス・デレット大佐は一九四〇年の初頭に、海岸建設に對する要求に應ずるため、同基地の諸施設は三倍上増加されるだらうと洩らしてゐるからである。彼は言ふ「アメリカ國家の首が二千マイルも外に出てゐる地點にあたるホノルルで、今日まで市民が防衛の必要を理解しないであるとすれば、今さら予が如何に言葉を盡しても彼等を昏睡から呼び起すことは出来まい……一九三九年度の豫算は一千七百五十萬弗であり、港の浚渫、繫留設備の増加、海軍兵舎、冷蔵庫及び乾燥食糧品倉庫等の擴張、新發電所及び配電裝置及び三ヶの新乾船渠——その中の一つは世界最大である——等を含んでゐる。船渠設備の莫大な増加で大約現

在の設備の三倍に達するだらう。そしてこの數字は眞珠灣の全海岸建設のために計畫されてゐる全體的増加を表はすものといつてよろしからう。これまでにパナマ運河を通過した最大の海上運送荷物である新船渠の一つはニュー・オルレアンズから眞珠灣に引かれて來たものである。一方他の二船渠は現在同基地で建造中で、實費に割増金を加へるといふ契約を與へることによつて、その建造期間は三分の一を短縮してゐる。

一方に眞珠灣の海岸擴張が急速に進んでゐる時、ここに常備されてゐる艦隊は絶えず、秘密な作戰のためにひそかに出港してゐる。艦隊に關係する海軍の作戰課題は勿論、決して公表されない。けれどもその一つとして、彼等が、絶えず歐洲戦争で起きた特別な海戦上の課題と取組んで努力をしてゐることはわかるのである。歐洲で一つの海戦があると、それはハワイ派遣艦隊の慎重なる考慮を受けてゐると想像しても間違ひあるまい。——ある場合、例へばグラフィフ・シュベイ號と英國軍艦との追撃戦、北海及び地中海の遭遇戦等の場合に、かかる戦鬪の演習を行ふことは誰知らぬ者なき慣例となつてゐる。しかし中部太平洋では、どこの海軍も自國を離れて廣い洋上に出て戦を交へたことがないため條件が非常に異つてゐるから、彼等は彼等独自の作戰課題を編み出してゐる。海軍専門家の見る如く、太平洋戦は、一方に於いて、歐羅巴水面に於けると同様、商船の攻撃及び保護を含むと同時に、歐羅巴の狭い水面ではとてもあり得ないほど大きい、

永い商船隊の護送艦隊の間に行はれるであらう。そのうへ敷設水雷作戦の機會は尠いだらう（島の基地附近以外では）また驅逐艦戦も少いし、飛行機も攻撃の武器として使はれることは少なく、偵察及び哨戒用として、多く使はれるだらう。太平洋での戦争は巡洋艦隊あるひは大巡洋潜水艦が護送艦を攻撃して來るのを同じく巡洋艦隊で護るといふことになるだらう。

このことを確信して、ハワイ海軍はその空軍を偵察及び哨戒用に集中してゐる。それは同島海軍の最も目覺しい機能であり、市民にとつて最も見慣れたものであらう。毎日、二十四時間勤務制で双發の哨戒爆撃機がオアフの周圍で轟音をあげてゐる。時には二機で飛び、一見どんなに意味のない船でも船となると全部その接近を見張つてゐる。フォード島の海軍航空部では、擴張工事の竣工を急いでゐる。この擴張によつて同航空部は眞に強力な哨戒本部となるであらう。既に同地には壓倒的多數のコンソリデイト型哨戒爆撃機隊があり、更に續々到着する筈である。海軍ではこれらの飛行機の偉大な性能を誇つてゐる。それも無理はないのである。一九三四年以來その數十機は最少の困難と無事故で、アメリカ西海岸からハワイまで空輸された。彼等はミッドウェイ、ウエーク、グアムを経由してフィリッピンに編隊飛行を行つた。そして今も絶えず眞珠灣と、ミッドウェイ、ジョンストン、パルミラ諸島に建造中の基地との間を織るやうに往來してゐる。時には彼等は陸軍爆撃機に参加し「敵」の侵入を阻むために遠く海上に飛翔する。ハワイの

空中防衛計畫では、陸軍爆撃機のために敵の所在を發見するのが哨戒爆撃機の第一の任務となつてゐる。陸軍爆撃機は、海軍の大型機より少くとも一時間百哩は速いし、また爆撃彈搭載量もはるかに大きい。一度哨戒機が敵の位置を報告すると、それから陸軍の爆撃機隊は侵入する軍艦に飛びかかつて行くのである。

哨戒任務が致命的に重要視されたので、數年前海軍はオアフ島ホノルル港の反対側にあるカネオヘ灣が、かなりの廣さの美しく護られた天然の基地を形作つてゐるところへ、もつと大きい飛行場を建設することを進言した。海軍が、太平洋作戦計畫に於けるカネオヘへの卓越せる價値を繰返し強調したことは正當に認められて一九三九年、議會はその開發のために五百八十萬弗——その後殆んど倍加された——の支出を承認した。現在、同所を眞の大航空基地たらしめるために必要な擴張準備——油槽船が灣内に入れるやうにするための水路の浚渫、離着陸廣場の開拓、船荷移送臺、波止場、艇庫、修繕工場、格納庫、事務所、營舎、貯藏庫、發電所、送受信所等、換言すれば、曾つて「田舎」でありヨット乗りの避難所であつたところのものを、素晴らしい防衛基地に變形せしめるに必要なあらゆる作業が急速度で進められてゐるのである。（建設は計畫より六ヶ月も進んでゐる）

けれどもハワイ最大の海軍航空基地——眞珠灣に近い二千七百英町の廣さの土地——はやつと

工事が進行し始めたばかりだ。フォード島の諸施設を補強し、航空母艦の飛行機の要を充たす計畫になつてゐるこの新基地の費用は、最近右の目的のために割當てられた資金六百五十萬弗の中から支拂はれてゐる。カネオへ基地や近くのマウイ島及びモロカイ島の補助基地、あるひは他の海軍擴張計畫の場合の如く、必要な土地はハワイの大地主と個々の所有者から收用手續によつて獲得したのである。

ハワイに於ける海軍航空隊の活動は決して現在及び計畫中の哨戒部隊のみによつて盡されてゐるものではない。その他に、航空母艦も同水域の海軍戦略上に重要な役割を演じてゐる。海軍作戦上の新着想の一つは航空母艦の攻撃力である。これには航空母艦一隻と、一隻乃至それ以上の大型巡洋艦とが半獨立の小艦隊に編成される必要がある。艦隊作戦の場合、敵艦隊の側面を包圍し、敵航空母艦を砲弾と爆弾で攻撃するのがこの小艦隊の任務である。それ故に眞珠灣の海軍力の基本的な單位は、同灣に碇泊してゐる何れかの航空母艦である。「エンタープライズ」も、「レキシントン」もハワイでの配備任務をすませた。殆んど百臺の飛行機を積載することが、でき、また驚くべきスピードをもつ（レキシントンは異常な記録をもつてゐる——サン・フランシスコ・ホノルル間の平均三十一ノット弱）航空母艦はハワイ派遣隊の演習にはきまつて参加してゐる。一九三九年眞珠灣に赴く途中エンタープライズ號は防備隊——及び市民——に、敵を攻撃

するのは一體どんな光景のものであるかを味はせた。遙かの沖を航行中の同母艦より殆んど全艦載機が飛び出し、ホノルル上空をオアフ島のルク飛行場に向つて全速力で飛んだ。この演習は他の飛行場に着陸することをも含めて、爾來恒例となつた。艦隊演習のついでに、航空母艦の艦上機は、眞珠灣の南西に當る制限水域で爆撃や機銃掃射を一實彈で演習するのである。そこでは艦上機は高空から標的を爆破したり、舞ひおりて「敵」を機銃の一齊射撃で掃射するのである。

このやうな色々な活動も、聯合艦隊がホノルルに集合して行ふ大演習に比較すると物の數ではない。一九四〇年度の演習は、敵が太平洋を横断して攻撃することを想定した「課題第二十一號」であつた。これには百三十隻の艦、三百五十臺の飛行機及び四萬三千人近い兵を動員したのであつた。燈火管制や放送中斷までもあつて、戦時状態に起り得るすべての状態が認められた。新聞記者や寫真班は、従來は時々艦隊に従軍を許されたが、この場合は禁止された。公衆は演習開始に先立つて「演習は近接せる亞細亞及び歐羅巴における戦争を背景に秘密裡に行はれる」との情報を受けたに過ぎなかつた。

艦隊は演習中、最も重要な問題の研究に九日間を費やした後、(この間に司令長官ゼームス・リチャードソン提督は、彼の旗艦ペンシルヴァニア號は、旗艦演習中自分の乗つたどの艦よりも多くの距離)を走つたと後になつて報告してゐる)眞珠灣に向つた。夜、ホノルルを一縦列になつ

て通過する時、ワイキキ沖で集團的サーチライトのレヴェューを演じて見せた。これは歴史上最大の海上の見物の一つであつた。緩やかに且つ正確に動きながら四百近いサーチライトが調子を合せて大空を一斉照射し、海岸に集まつた數萬の見物人に想像もできない奇麗な光線を與へたのであつた。

眞珠灣の哨戒爆撃機がジョンストン島及びフレンチ・フリゲート・ショールを前進基地として索敵行動をしつつある間に、主力艦隊はハワイ南西數百哩を演習しながら航行したのであつたことが後になつてわかつた。興味深い點は、ハワイ群島は何れの島も敵の攻撃を蒙りはしなかつたが、艦隊演習はその防禦策として明かに長期攻勢の體勢をとつたといふ公報である。ハワイを去る二千マイル以上のアラスカの基地はこの演習に何等關係がないと考へられるかも知れないが、司令長官はアリユーション群島からの哨戒爆撃機及びアラスカ基地から海上補助艦艇と潜水艦の参加が想定されてゐたことを洩らしてゐる。

一九四〇年度の演習は、ペンシルヴァニア艦上に海軍長官チャールス・エチソンを迎へて更にその意義を増したのであつた。同長官は西海岸出發前に、全世界の非常時事態は太平洋防備の一層の擴大を必要ならしめ、同時に眞珠灣を基地として大々的攻撃勢力を常備するを必要ならしめると強調したのであつた。(その後五ヶ月もたない間に彼の後任フランク・ノックスも第十四

海軍區を視察して同様の所感を述べてゐる)。

眞珠灣に艦隊が碇泊してゐるといふことは、その碇泊中はハワイの百パーセント防護のため緊急特別命令を受けてゐる徴である。艦隊演習の主要な問題が、一とまづ解決後、水兵は隔日上陸を許されたけれども、航空母艦は依然としてひそかに海上に出動し、哨戒任務を果すため艦上機を飛ばしてゐた。これらは海軍の飛行艇によるオフの二重の哨戒活動を更に補強するものであつた。又、驅逐艦による哨戒も眞珠灣からダイアモンド・ヘッドに至るまでの海岸の至るところで続けられてゐた。日も夜もホルル上空とその周囲では、空中偵察任務についてゐる飛行機が爆音をたててゐた。特別警戒のために、水雷艇よけの防材が眞珠灣水路を横切つて設置され、基地内外では陸上海上のすべての行動が嚴格に制限された。戦時状態を假定して、増員された海兵團、陸上警備隊と、灣内の警戒が艦隊碇泊中つづけられた。

つまり海軍當局者が、敵が——理論的には矢張り日本であるが——戰略的に最も攻撃し易い場合でも、灣の施設や軍艦を破壊し得る唯一つのチャンスとさへ與へまいとしてゐたのである。この基地は「防衛海面」と宣言されてゐるので、哨戒艦は眞珠灣水路の南方三マイル平方の水域内に侵入して來る船舶全部を止める権限を附與されてゐた。たえまない捜査は數回日本人漁船の發見となつた。彼等は直ちに海軍當局に引き立てられ、罰金を課せられるか防衛水域に近寄らぬや

う訓戒された。

ハワイの「日本人漁船の状態」は特別の記述に價する。何故なら、海軍は絶えず日本人漁夫に疑懼の念を懐いてゐるからである。ケワロ灣のホノルル港の入口に近い蔽はれた入江の中に、色とりどりの日本人漁船隊がある。日本式及び西洋式の構造を取り入れたこれらの漁船は、長さ八十呎、ディゼル・エンジンが据ゑ付けられ驚くべく凌波性がある。大きいものになると五百マイル以上の巡回半径をもち鮪の群を追つて中部太平洋水域ぐらゐまで巡航する。鮪は日本人經營の土地の罐詰製造者に賣られる。漁夫の大部分は日本の山口縣大島出身のもので、そこは内海中の島で數世紀に亙り有能、勇敢な漁夫のゐるところとして名高いところである。彼等の殆ど全部が日本生れの歸化してゐない連中だから、故國に忠誠を誓つてゐる者達だと海軍は想像してゐる。過去に於いて、日本人漁船は頻々として海軍演習水域附近に出没した。あまり度々のことなので、ホノルルの市民社會でおきまりの冗談口にする位になつた。尤も彼等の多くは、日本人漁船の乗組員は一般に無害だと考へてゐたのである。しかし、このやうにうるつき廻られる事を快く思つてゐない海軍にとつては、彼等の出現は一向に面白いものとは思へなかつた。尤も反則者の大部分は、疑ひもなく正直銘の漁夫であつたけれども、中には日本海軍當局と連絡があると疑はれる者もあつた。一朝事ある場合には日本人漁船隊は、第一次世界大戰時代の北海に於ける英

國のトロール漁船に類似の立場に立つたらう。トロール船はある意味では英國海軍の目として働きて、獨軍の海上の行動を報告したのであつた。日本人漁船隊の中にはハワイの「第五列」活動を助長したともいはれた。即ち漁船は遠海で日本船と會ひ、米國籍をもたない日本人、恐らく日本陸海軍の代表者を移乗せしめ、誰にも氣づかれぬやうハワイに上陸せしめたといふのである。合衆國海軍機がハワイを中心に島嶼や淺瀬を嚴重に哨戒する今一つの理由である。

以前からハワイ海軍は、日本人には少くとも微温的なスパイ活動の罪はあるといふ理論を進めて、同島の日本人仲間の或る者に對しては公然と疑ひをもつてゐたことは重要視すべきである。この見解は、日本は合衆國の假想敵であるとの海軍の確信に不可避的に伴ふものであつた。戦時にはこの小艦隊をケワロ灣に閉ぢこめることによつて、日本人漁船隊の脅威を止めることは比較的簡單であらう。だが平時にはかかる非常手段は實行できない。そこで海軍はせい一杯のところ漁船の活動を撃つし、彼等にたえず目をつけてゐるのである。

日本人漁船の見張りといふ點では、海軍は憂ひを同じくする市民達から助けられて來た。尤も彼等の報告は時には、條件つきで受けつけられねばならぬ例もある。ダイアモンド・ヘッドの麓の氣のきいた居住地に住むある油斷のない老婦人は、漁船が、彼女の家のうしろに雄大に聳えてゐる自然の城砦を爆破しようと計畫してゐるに相違ないと思つた。彼女はその筋に、日本人漁船

が夜、岸邊のすぐ近くへやつて来たのを見たが、彼等はいつも何かを測量してゐるやうだつた、おまけに時には、ひつきりなしに叩く音や孔をあける音がきこえたと言つた。日本人は彼女の家のすぐ前でこの入江を爆破しようとしてゐるのであつたか？

彼女の懸念は受け入れられた。何故なら彼女の家の附近の地域全體は城砦が林立してゐる海軍軍用地であつたからである。ところが、實際は「測量」は灣を横切つて漁網や網を張つてゐるだけで何等不正のものではなく、一方「孔をあける音」は彼女の家のうしろの丘で、陸軍が夜業をやつてゐるところから聞えて來るのだといふことがハッキリしたのである。

それは日本人漁船物語りの風變りな諷刺ともいふべきものであつた。（漁船の連中は「日本海軍の高級將校」であつたとの斷言が執拗に何回も傳はつた）だがこれは日本人に關する限り寛大な美德ではないと考へてゐる多くの居住民の心理状態を典型化したものであつた。

海軍防衛區を限定したことは、この島をスパイ行爲から守らうとする海軍の努力の一面に過ぎない。一九四〇年、艦隊が眞珠灣に到着する二日前に、認可なくして寫眞を撮影したり地圖を製作することを禁ずる行政命令が一齊に實施された。その禁止項目は繪畫、スケッチ、本、描寫、地圖或は海岸線又は陸軍の配置の地理的表現等と、特に廣汎に互つてをり、相當の罰金、禁固或はその兩方の罰を課することになつてゐた。（因みに、外國の代理機關に寫眞情報が達する機會

減をすするため、艦隊乗組員の寫眞機所有をも、その直後に禁じてしまつた。）

恰かもスパイの脅威を強調するかのやうに、海軍將校達が、眞珠灣の貯油タンクを爆破せんとする陰謀を暴露したことが公表された。陰謀の首謀者は逃亡してしまつたが、彼等がどの「外國勢力」のために行動したかのヒントは明かだつた。だがこの暴露は、海軍の見地からすれば完全に時宜を得たものであつた。といふのは僅々二週間前にベン・モリール海軍少將は上院海軍豫算小委員會に於いて、石油タンクが空爆され、火災を起しても臨海地全體の火事とならぬやう防止する意圖の下に、海軍は防火用の堤防を築くために建設費六十萬弗必要であると語つたのであつた。同時に少將は、貴重な貯油の少くとも一部分を、地下の對空防護設備（眞珠灣に必要な油全部を入れるものを作る時は二千萬弗を必要とする）の中に貯蔵することが出来るだけの豫算を絶對に必要とすると述べた。その後六ヶ月以内にこの目的のために七百四十一萬弗が與へられ、地下タンクの建造は着々進捗中である。

ハワイのやうな所では海軍演習は何等珍らしいことではない。しかし、一九四〇年、アメリカ聯合艦隊は豫告された滞在期間も終りに近づいた時、更に追加演習のため不定期間殘留するであらうと云ふ事が發表された時ほどハワイの市民社會を驚かしたことは珍らしかつた。ハワイ水面の猛烈な海軍演習のために、住民は少しも迷惑させられてはゐなかつたし、急に滞在延期の決定

は眞に重大な非常時態のための當然の歸結であつた。日本海軍のスポークスマンは東京で「大して關心をもつてゐない」といひ、又「吾人はアメリカ將校及び水兵諸君が氣の毒である、何となればハワイの炎暑では軍艦生活はとても不快だらうから」といつたけれども、ハワイの日本總領事郡司氏はもつと率直に述べた。曰く、「もしアメリカ海軍のハワイ長期駐屯の決定が合衆國と日本との間の確執を武器の示威によつて解決するやうにと意圖されたものであるならば、或は日本にとつて不利と考へられる新通商條約の受諾を強要しようと思圖されたものであれば、かかる措置は賢明ではないと思ふ」と。

總領事の語句の選擇は、ハワイの最も深い親日家をさへも驚かしたのである。といふのは、彼が政府の訓令でさういふステートメントを發表したかどうかは別として、あの際かかる語句でその意見を發表する必要はないと思はれたからである。事實、彼の言はハワイをして日米關係の現實の状態をいやでも察知させたものであつた。普通人にとつても、殆んど過去二十年近く太平洋に於けるアメリカの極東政策と、海軍の戰略との間に本質的な矛盾があつたことは、明かであつたに違ひない。一方に於いては、アメリカは絶えずアジアから退却してゐた。一九二二年に週れば、ワシントンの軍縮會議では、われわれは日本に對し豫定以上に我が海軍力に接近せる海軍力を與へることを許容し、又グアム、フィリッピン及びアリューシアン群島にアメリカ海軍基地を

構築せざることに同意したのである。後年、合衆國はヒリッピンに獨立を與へる手配をしたが、日本の委任統治領に於ける活動ぶりには一指も染めなかつた。そして東京政府がアジア海岸の殆んど全門戸を鎖すのを許したのであつた。ところが他方では世界大戰以後、われわれは色んな名目の下に、太平洋にわが戰艦隊を配置し、特に最近は十年以上もわが偵察艦隊を置いたのである。吾人は一九二〇年の初頭以來、僅かの例外はあつたが、毎年太平洋で海軍大演習を行つて來た。吾人はわが太平洋岸、アラスカ及びハワイ以西の諸島に空軍基地を開設し、且つ太平洋の諸港に便利なネバードに龐大な火藥集積所を設けたのである。

ところが一九四〇年一月の日米通商條約廢棄、對日軍需品禁輸に對する眞々たる輿論、國務長官コーデル・ハルの蘭領東印度の安全保障に關する對日警告等によつて、國務省がアメリカの極東政策を、少くとも太平洋における海軍の傳統的政策に接近せしめるやうにと決意したことが分明となつた。

この二つの政策が一致の傾向を執るに決したことは、一九四〇年初頭より、侵略は欲するものを獲得すればするほど擴大されるといふ事實がアメリカ人に了解されるやうになつて以來、益々促進されたのであるが、永年日本に對して強硬態度を執るべしと主張して來た海軍にとつては快き音楽であつた。従つて艦隊のハワイ滞在延期の決定、グアム島の警戒は云ふまでもなく、ハワ

イ以西の海軍基地防備擴張の要をこの大演習前數ヶ月に互つて公表されてをつたことと相俟つて太平洋に於けるアメリカ海軍政策は、單なる防衛どころか必然的に攻勢的であることをハワイに痛感させた。多くの人々にとつてはこれは新たな且つ人騒がせな皮肉であつた。傳統的にハワイの住民は世界の騒ぎを外にして、平和と安全感を楽しんでゐた。恐らくは、その愛すべき環境と地方問題は彼等自身の處理すべき問題であつて、國家的問題とは全然無關係だといふ印象によつて外界より絶縁されてゐたためであらう。彼等は、ハワイ海軍の任務は明かに太平洋岸に對する防衛一方であるとのみ考へてゐたのである。同地に於ける盛んな海軍活動にも拘らず、米本土西部への攻撃演習にハワイが巻き込まれるだらうなどは、從來眞面目に考へられなかつたのだ。従つてハワイの海軍施設の増強となつて現はれて來た西太平洋に於けるアメリカの戦争の見通しは、同島に於ける軍部の勢力増大の可能性を嫌といふほど明かにしたのであつた。確かにハワイの指導者達は、この可能性を逸早く感づき、海軍によつて市民の権限が侵略されてゐると覺しきものに對しては片端から手痛く、抗議して來た。しかしこの點についての彼等の疑懼は、近年に至つては、聯邦政府の資金支拂その他同地の海運建設の支出に關するサンタクロース的役廻りによつて著しく緩和されて來た。例へば一九四〇年には政府は優に七千萬弗以上の金を島におとしたのであつた。國家的支出の天文學的數字から考へると、これは決して莫大な額ではないが、そ

れにしても僅かに四十二萬二千の人口を有するに過ぎない社會に落す金額としては目を瞠らしめるに足るものである。何故ならばそれは全國平均より百六十六パーセント高い比率で聯邦政府が使つたことになるからである。その上この額の半分は資金乃至俸給支拂に當てられたのである。又、この數字は、完成までに一年半から三年を要する多くの軍事的計畫事業や、形式上同地方のものではない防衛計畫に割り當てられた額は含んでゐない。ついでながら第二回國防法案及び一九四一年の海軍豫算案の條項によると、一千七百萬弗以上が一九四一年度のオアフ島の防衛増強及び海岸建築物に費されることになつてゐる。

ハワイ海軍の存在が、同地の商業にとつては何を意味するかといふこと概念は、年に二千萬弗以上に上る海軍の支拂數字によつて窺はれるであらう。その大部分はこの島で消費されるのである。四分の一は海軍計畫事業に働く市民労働者に渡される。資金支拂のほかに、數百萬弗の金が食糧品その他の必需品の購買を通じて土地の商業筋へ放出される。その大部分は完全に五大財閥の手を通るので。(ハワイ海軍は一日の食糧に一萬二千弗以上を支拂ふ)

艦隊が定期に且つ長期滞在をした場合には右のほかにどれだけの収入がこの土地に入るかは誰人にも想像がつかないであらう。一九四〇年五月、艦隊がハワイに不定期駐屯を命ぜられたことを聞くと、年二千萬弗に價する商賣を失つたのに氣がついた西部海岸の商人達は、長い間不平を

こぼしたものである。ハワイに於ける艦隊滞在の最初の二週間に水兵は約百萬費を使った。このお大盡さわざは引き続く週間も續くとは豫期できなかつたが、ホノルル商人が水兵の買物の浪費ぶりに熱心な眼をむけ始めたのは事實だつた。

にもかかはらず、ハワイに於ける海軍の支出が現在ほど多くなつた以前に、市民の指導者達は、ハワイ行政の最後の權威が何處にあるかに就いては、海軍側の強硬な態度には頗る不安であつた。何故ならば海軍は終始一貫ハワイの眞の意義と價值は軍略的な海軍基地及び陸軍用地にあると論じたからであつた。その上海軍は、住民の大多數が東洋人や東洋人の子孫から成つてゐるのであるから、太平洋におけるこの最も重要なアメリカの前哨地に自治政府をおくことは、國家の安全に對し眞當の脅威であると考へたのである。過去において海軍は、ハワイのためには陸海軍將校を首腦とする委員會組織の政府を希望してゐる事を主張して來た。軍人なら如何なる事態をも迅速且つ有効に處理し得るからといふのであつた。この見解に關するステートメントでは一九三二年に眞珠灣要塞司令官が發表したものが一等明瞭である。

エーツ・スターリング・ジュニア海軍少將は、當時ハワイに於ける司法制度の調査を行つてゐた合衆國次席検事總長リチャードソンに宛てて、ハワイ在住の日本人に對する疑懼を赤裸々に表明せる長文の覺書きを提出した。文中スターリング提督は次の如く述べてゐる。如何なる人民の

集團の權利も、かかる權利の行使が、重要な戰略上の軍事的地點の上に持たなければならぬ政府の支配力を決して弱めないためには、これを國家的利益に従屬せしめなければならぬといふことが第一の問題ではあるまいか？……地方民中、敵性分子による戦前或は戦争中のサポータージュ又は反アメリカ的行動の大きな脅威は、この島の防衛を、平時には殆んど豫測もつかない程に弱めるであらうといふ危険である。……ハワイに於ける大多數の外國人はわが國政府にとつて重大な關心事である。然して民間及び陸海軍權威者の長年月研究の結果、東洋の強國と戦ふ場合彼等の合衆國に對する忠誠については到底絶對の信頼はかけられないとの結論に到達した。東洋語新聞、寺院、東洋語學校、種々なる目的の東洋的機關、佛教の存在は、それによつてこの島で生れた東洋人が、第一に彼等の民族的國家に對して忠順であるべきことを教育されてゐる證左である。そのうへ東洋民族間には、民族的感情が強烈である。然して所謂優越なる白人種といふものが、實際にはこれら民族のすべてから衷心嫌惡されてゐることに疑ふ餘地がない。戦時に際してはかかる嫌惡の火花を煽つて活潑な民族的嫌惡に變形せしめるには何等大きい攪拌行爲を要しないだらう——。

「ハワイで暮らした人々の間には、ハワイ島の合衆國にとつての主なる重要性は、太平洋上の一前哨地としての立場にあつて、決してその農業上乃至産業上の富にあるのではないといふことを

忘れる傾向が見受けられる。合衆國にとつて商港としてのハワイの價値は一にその安全感にかひつてゐる。ある者は彼等の市民としての個人的權利が國家の安危に從屬せしめられるべきではないと思つてゐる。軍民不和の今一つの要素は、不幸なことであるが、陸海軍は邪魔物であつて、その經濟的援助以外は、どうしても島から追ひ拂はなければならぬといふ相當多くの人民間にある漠然とした信念である。

「吾人がハワイ諸島の合衆國に對する根本的價値を十分理解した場合、合理的に思へる唯一の善後策は、吾人がさうあることを望むが如き状態ではなく、現實に存在する状態に適合するやうな、統治形式をもつ政府にあるやうに思へる。ハワイの地位は世界獨特のもので、従つてわが民主國民にとつては異常な形態ではあるが、現状の下に於いては恐らく唯一の解決策と考へられる解決を必要としてゐる……」

「現在の政府は先づ白色人種で、政府各部の最も樞要なる地位に特に選任された者、この島の特別な傳統あるひは家族關係による優越等の觀念にあまり深く沁み込んでゐない人物、ハワイが異人種融合の坩堝としての價値ありとか、その點に成功せりなどといふ先入觀念をもたぬ人物によらなければならぬ。」

「各種狀況の必要がどうしても聯邦政府によるある程度の制限を伴つた制限選舉制でなければな

らぬといふことになる。かかる政府の構成は……特に選任されたる合衆國陸海軍將校各一名を含まなければならぬ……何故ならば、これらの軍人の助言は民間並びに軍事に關係ある重大問題を決定するに價値があるからである……」

これほど計畫的に、ハワイ全土の憤懣をおこすやうなステートメントを作ることとも困難であらう。いろんな事があつた中に、これは日本人のみならず、全島の他の民族に對しても打撃を與へた。それは明瞭な語句で彼等は劣等にして頼りにならぬ上、疑はしい民族だと述べてゐるからである。又ハワイに民主主義政府を樹立するなどのことは悲しむべき誤謬だとほめかしてゐる。その上に、何れの點もこの島の運命に對する責任をもつてゐると自認してゐる海軍と五大會社との本質的矛盾を強調してゐるのである。

市民社會の憤慨は未曾有のものであつた。大衆的憤激の波にあふられて、この憤りは唯一の可能な方法で表現された。即ち海軍に對する消極的反抗の開始であつた。社交的には本國の駐屯地でさうする習慣であつたごとく、市民社會と求めて交際しようとした將校やその夫人連は、いつも一種の敬遠をもつて遇せられてゐるのに氣がついて、困惑したり、憤慨したりせねばならなかつた。(これは現在もさうである)市民の見解からすれば、双方の關係は結局次のやうな理由に基づいてゐたのである。「われわれは喜んで貴方がたと取引きをやりませう。そして貴方がたは非常

事態に際してはわれわれの協力をあてにされてよいでせう——だがさうでないふだんは、貴方がたは勝手にあなたの道をお進み下さい、われわれはわれわれの道を進みませう」事實、この態度もまた島の傳統的な感情の延長に過ぎないのであつて、海軍軍人の二年間の交替勤務の如く短期間ハワイにゐる者は、誰だつて、最後まで、ハワイにとつては第三者以上には出られないといふのである。

かかる事態は明かに不健全であり且つ危険でさへもある。何故ならば、島の防衛には、平時も戦時同様に、民間の人々の積極的協力を要するといふことは、海軍の必要條件であつたからである。かかる状態の中に眞珠灣の要塞司令官スターリング提督の後任にハリー・ヤーネル提督がやつて来た。彼はハワイに委任統治の政府を作るといふやうなことには口を出さず、靜かに政治的手段で海軍と市民との龜裂を繕はうと努力した。その努力の甲斐あつて、あたかも海軍は、本當は一頃ほど島務に關するその機能について、從來のやうに干渉しなくなつたやうに見え始めた。より良き感情とより正常な交渉の促進を繼續しながら、彼は全ハワイの人々に親しまれるやうになつた。後に彼がアジア艦隊の司令官となつて極東に赴任した（そこで彼は更に偉大な才能を發揮し、引退に際しては合衆國議會名譽章を授けられたのであつた）のも、立派に責務を果した功勞に對する國民一般の認識の現はれであつた。

かもし出された好感情の直接結果として、市民は海軍のハワイ防備案に對し一層協調的態度を保持し、その解決に自發的援助をした。この具體的例證は、海軍豫備將校訓練隊に入隊した島の若い商人の數が増加したことも明かである。一九二五年の議會法案によつて創立され、一九三八年に再組織されたこの豫備將校訓練隊の目的は、戦時に際し迅速に軍務に應召し、海軍活動の處理と指揮を助け得る相當數の將校を得るといふにあつた。豫備訓練の主なる組の一つは供給部隊で、これは全海軍用の貯藏品及び軍需品の購買、貯藏、發行、運搬、支拂及び勘定を行ふものである。ハワイの如き重要な海軍區においては、土地の實業問題に洽く通曉せる有能なる豫備將校隊をもつことが、保安維持上重要な助けをなすことは明かである。海軍情報將校と土地の實業家との協議に刺戟されて、ハワイの豫備將校の數は増加して行つた。海軍少尉の地位を得た事務所、銀行、その他商店等の青年達は、海軍事務の運び方を學んだ。老人達は——中にはそれぞれ商賣や職業で相當の名聲を博してゐる人達も屢々ゐるが——特殊な部門におかれ、やがてより高い等級に適する能力や身分に相應する地位につけられた。これはつまり、海軍は勞せずして民間社會に對するより大きい監督を行ひ得ると共に、あてにし得る民間支持の程度を、かなり正確にはかることが出来るやうになつたことを意味するのである。

海軍とハワイの一般社會との間に、從來以上に健全な關係が見られるやうになつても——日本

が東洋において侵略の度を高めて以來益々さうなつたが——海軍は本島の日本人に對し看視の眼をゆるめる意志をもたないことは明かである。これらの住民が、どれほど忠誠なアメリカ人と見えやうとも、海軍にとつては何の意味をも與へないのである。このことの典型的例證は、海軍が眞珠灣の建設事業に日系市民労働者を使ふことを執拗に拒んでゐることである。請負業者と海軍當局者間の労働協定により、日本人の血を引く求職者は、アメリカ生れで従つてアメリカ市民である場合でも除外されてゐるのである。日本人社會は、勿論この差別待遇を非アメリカ的であるとして強硬に抗議した——しかし無駄であつた。この論争は爾來一種の政治的フットボールとなり、時々縣議會に抗議的決議をもたしたのである。白人及び白人社會の指導者にとつては、アメリカ生れの日本人代表によつてかかる決議案が頻々と提出されることは、實に迷惑な、また困つたことであつた。といふのはこれについては施す術がなかつたからである。これに關して執られる慣例的な措置の好い例は一九四〇年四月に縣共和黨大會で示された。この大會は、共和黨の大統領選舉會議に派遣する代表者を選擧するに催されたものであつた。アメリカ主義及び州制獲得に對するハワイの權利に關する運動演説の最中、一日本人代表が起つて、日系アメリカ市民に對する海軍の差別待遇の是正を迫つた。また共和黨は第十四海軍區の司令官及び海軍長官に公式抗議を提出すべしと勸説し、同時に事件を費府の全國大會に持ち込むべしと説いたのである。そ

んな事をすれば全米代表の前に、ハワイに於ける日本人問題を認めさせることになると思つた。地方大會の参加者は思はず溜息をついた。そして素氣なく即座にこの提案は握り潰された。

日本人の見地からすれば、海軍は永い間そのやり方が終始一貫してゐなかつたのである。海軍は日系の男性市民には何事をするのも拒んだ。しかし何百といふ日本婦人には、歸化してゐない者にも、基地内の海軍將校や彼等の家族のために働くことを許したのである。明かに海軍では、男性は女性よりも有害だと考へたのであらう。それはさうとして、ある海軍の家族が公式の客を饗應してゐる時、ていどいショックにぶつつかつたのである。その晩も、よくあるやうに、會話が日本人問題に轉じ、どの程度まで日本人は信賴できるかといふことになつた。その結果一致した意見は、日本人を褒めたものだとは義理にもいへないものだつた。そして話題がとぎれた時、女主人公は派手な着物を着た若い日本人の女中に向つて訊ねた。「トヨ、もしアメリカが日本と戦争するやうになるとお前はどうするつもり？」

矢つぎばやに返事が飛び出した。「貴方がたみんなを毒殺します」

トヨはすぐさま解雇された——しかし彼女の返答はいつまでも聞いた人々の耳に残つた。島の社交界一帯をめぐり、語り傳へられるごとに尾ひれがついた。それはなくもがなの残酷なほんの一寸した事件に過ぎなかつた。けれどもそれが受けた注目は、日本人についてあちこちで行はれ

てゐた賭けを表徴するものであつた。そしてその注目が日本人問題を食後の好話題たらしめたのである。

けれども海軍の情報將校にとつては、事件は暇つぶしお喋り以上のものであつた。彼等はここ数年のうちに、ハワイにゐる日本人が、東京の外務省と連絡をとつてハワイの地勢や建設物を詳細に通報したといふ確かな證據を探し出したといふのであつた。ある將校はそれをこのやうにいつてゐる。「日本人は生來詮索すきだ。われわれは、彼等は苟くも日本人が働いたことのあるあらゆる仕事の完全な圖解をもつてゐると推定してゐる——尤もその圖解なるものが防衛計畫に關する限り大して役に立つかどうかは疑問である」他の將校は皮肉にかう附け加へてゐる。「四十年以上の間に、彼等はわれわれに關する材料を完全に揃へたに相違ない。だが、それを繼ぎ足して総合的ハワイ防備圖を造り上げて見た所で、全然不正確なものになるかも知れない。とにかくそんなものはしまつて置いて何の役にも立たないだらう」更に他の將校は、その問題を本土から訪ねて來た文士と論じたが、彼のすべての質問について、恐らく彼はこの島に關し東京で知られてゐる十分の一も知り得なかつたらう、といつてゐる。

海軍では、日本が眞珠灣の防備についてこれまでに知つてゐるといふことには、あまり心配してはゐないが、中部太平洋水域における海軍活動の現状が漏洩するのを防ぐためには、少しも油

断してゐない。一九三九年末、日本の練習艦隊がホノルルを訪れた時、同艦隊司令官はその旗艦に眞珠灣の高級將校連の公式訪問を受けた。(この旗艦は日露戦争に従つた舊式の重巡洋艦であつた)司令官は儀禮を謝した上、アメリカの提督の旗艦を訪れて禮を返したいと申出でた。この言葉は眞珠灣中に擴がつて、腹黒いクスクス笑ひの種となつた。何故ならば、その時アメリカの旗艦は偶然にも新型の航空母艦「エンタープライズ」であつたからだ。海軍に關する限り、日本人は一人も、特に一人の日本海軍將校もその近所へさへも行くことを許されさうになかつた。

従つて日本の提督が返禮の訪問に來た時には、アメリカの提督旗は一巡洋艦に移されてゐた。この巡洋艦は、アメリカ側の説明によると、日本の提督に餘計な疲れを感じしめぬために、わざとわざ岸に近く碇泊してゐたのであつた。

活動ぶりを嚴重に監督しても、又ハワイの日本人社會の指導者達が二心なきを言明しても、さらに島の各方面の民間通報者の緻密な組織の助けをかりてさへも、海軍の情報將校は時々眞珠灣の境界内ですら好もしくらぬ事態の發展を見出すことがあつた。例へば一九四〇年の春、何かの理由で、普通の除外政策にも拘らず、一名の日系市民労働者が、眞珠灣基地内の建築工事に働くことを許されてゐたのが判明した。そのうへ一緒に働いてゐた仲間の労働者が、彼がルアルアレイ彈藥貯藏所を撮影したことを非難したことも明るみに出て來た。事件全體が、主として非組合

員を捲添へにしようとする労働紛擾であつたかどうかは最後まで明かにされなかつたけれども、それは忽ちスパイ恐慌を起させた。そして建設計畫に關する海軍の超神經質ぶりを示すものであつた。

けれども基地以外の活動では、海軍情報將校達は、合衆國探偵局のホノルル派遣員の助力をうけ、陸軍と同様、密偵に協力してゐる。同探偵局が一切ならず計畫的サボタージュの、のつびきならぬ證據をあげたホノルル埠頭ばかりでなく、隠れたる煽動者に對して、チー・メンは不斷の注意を拂つてゐる。ハワイにおける合衆國探偵局の役割のいくつかは、一九四〇年に司法省がバナバ地帯の地方役人を廢して、この地區は陸軍用地であるゆゑ同地に於ける陸軍の情報活動は市民司法權の掣肘によつて妨げられるべきではないと、言明したのでもわかる。けれども、司法部は、ハワイでは軍部の直接活動では手の届かないスパイ行爲の機會が與へられてゐると言明してゐる。ハワイに於ける合衆國探偵局の活動が「非常に價値がある」ことがわかつたので、同組織は従前通りその機能が続けるだらうといふことが言明された。その活動は非常に靜かに且つ能率的に完成されるので、ハワイ市民の壓倒的多數はその存在を知らないし、またこれを知つてゐる者も海軍及び探偵局が獨特の細心さを以て、島の生活の隅々にまで拂つてゐる小心すぎる程の注意の意味を十分に了解できないのである。

情報將校が海軍の訓令に従ふやう市民の協力を求める場合とか、又これらの將校が海軍問題に關し時々説明をする場合を除けば、一般民衆はまだまだ驚くほど海軍と無關係である。商店主や五大財閥は、有力な經濟的要素としての海軍を知つてゐるし、また島の主婦達は若干の海軍將校やその夫人達を歡待することもある。けれども大概の場合、海軍と市民とはめいめい別の道を歩き續けてゐる。これはかなり憤慨的となつてゐる。彼等の殆んど總てにとつては、ハワイ勤務は退屈を意味する。何故ならば、なす事は多くないし、又行く場所もないからである。オアフは水兵一人一村もの飽きあきする娘達がつきまといふ傳説的な熱帯の島ではなくて、相手になる娘は全然ゐないのである。白人の家庭では、娘が水兵と（この點では陸軍の兵隊も）友達になるのを嫌がる。そのくせ女島人は一般に水兵達の訓練とか行儀の良さを褒めるのだが、娘の行動を同じく嚴重に監督してゐる。他の諸民族系の親達も大抵は白人と同じ考へをもつてゐるのである。實際には市民の人口に對してすら十分の娘はゐない。人口は壓倒的に男が多く、これは砂糖産業が何萬といふ男の労働者を移入して以來ずっとさうなのである。その結果、水兵達は一般に女友達なしにやつてゆかねばならない。尤もホノルルの下町には職業ダンサーを置くダンス・ホールもあれば、女のゐるバーもあり、大規模な紅燈の巷もある。けれども、そんなものは彼等が本國でやつて來たやうに、白人の娘と友達關係になりたいといふ熱望を満足させては呉れないので

ある。

社會の指導者達は、このことを察してはゐる、がどうにもならないことを知つてゐる。彼等のある者はそんなことよりも、途方もない大軍隊の流入のために發生した、ホノルルの最も緊急な物質的問題の解決に頭を悩ましてゐるのである。といふのは連れ廻る娘が足りないのと同じやうに、低廉な家が市民の需要を充たすだけもないのである。市は現在相當の建物景氣を現出してゐる。けれども地主達は結局軍關係の人々は本土に引揚げるのだし、さうなると賃貸價值が下落することを恐れて、現在の需要を満たさうとはしないのである。

住宅問題及びそれについての海軍と市民の態度は、この兩グループ間の關係の一面を示す立派な指標である。ハワイの海軍軍人の家族は、家賃は法外だし、家具は間にあはないとこぼしてゐる。ある將校の夫人は。夫と子供のために家を見つけることの困難さを訴へて、民衆的抗議を起さうとホノルルのスター・プレティン紙に手紙を寄せた。その文中で彼女は家主に家賃値上や、その他海軍軍人の家族に對する差別待遇に對して小言を言つてゐる。彼女は言ふ。「海軍の人達はハワイで本土よりも高い家賃を拂ふのは意に介してゐません。その覺悟はしてゐます。しかし到着して、これから住まねばならぬ丸太小屋を見た時はゾツとするのです。——「上流の地域ではわたし達が「海軍」だといふことを見てとると、宿の主人は目の前で扉をボタンと閉めるか、

あるひはもう家賃のことを話す元氣もなくなるほど家賃をせり上げるつてことも附け加へておかなければならぬでせう」

かかる抗議に對し、市民社會は色々に答へてゐる。家主達は海軍の家族が家具をいためるのは定評があるし。勤務交替が突然いつ變るか知れないし、そんな場合には短期間借用の支拂を保證する家賃を拂ふだけで、後の借り手の世話もしない。時にはそれさへ拂はないと主張する。一方市民の借り手は、海軍は一般的にどこでも家賃を高くした責任がある。——何故なら軍人の家族は階級に従つて住宅手當として家賃が割當てられてゐる——この金は島の中流の家族達が支拂ひ得る金額より時には多いからだといつてゐる。

もしこの地方風景が、單に海軍の存在によつてのみ複雑化されてゐるのだとすれば、市民社會のかかる物質的問題は恐らく容易に克服され得るものであらう。しかし、これらの諸問題を益々複雑化していよいよ解決を困難ならしめるものは、ハワイ防衛に關する一つの要素である。即ち合衆國陸軍のハワイ駐屯軍である。

ハ
ワ
イ
の
陸
軍

ハワイの陸軍

毎週、時計の針のやうな正確さを以て、純白のスマートな巨船がホノルル埠頭に横付けにされる。一年の間には、熱帯の魅惑的な噂に魅せられた二萬五千餘のアメリカ観光客がレイ（生花、色紙、ビーズ等で作つて首にかけるハワイ獨特の飾り物）に頭を埋めては上陸するのである。

それほど繁くはないが、より規則正しく、商業埠頭よりやや離れた棧橋に横付けされるのは、旅客船より少し型は小さいが赤、白、青の煙突を持った船である。彼等にとつては、埠頭の歓迎は観光客に対する馬鹿騒ぎとは非常に違つてゐる。そこには、彼等を待つカーキ色のトラックの密集隊が整然と並び、々々要所の町角には、颯爽と憲兵が立つて通行の整理をする。路面の混雑もなければ、用もないのにそこいらを漫歩する者もない、何もかも完全な統制の下に在る。これが合衆國陸軍である。そして、これらの船舶は陸軍軍用船で、兵隊と大砲と、飛行機とその他軍需品とをハワイ駐屯軍のために運んでくるのである。

兵士達が、ダツフェル袋をかついたままギャング・ブランクを危ない足取りで下船する様を見入つてゐることは、軍事上の據點としてのオアフ島の重要性を象徴する一大スペクタクルを助けることとなる。

眞珠灣の海軍根據地が、世界一の堅固な要塞であるといふことは、決して漠然たる一般論ではない。實は、陸軍がそのやうに造り上げたのである。その過程に於いて、陸軍は殆んど五億弗以上を費した——これはハワイに於ける海軍の一弗消費に對して、陸軍二弗の割を意味する。攻撃軍が如何に高價な値をも拂ふ決意があり、且つ事實上さういふ價を拂ふことができるなら、不落の場所は無いといふ軍事上の理論に對して、合衆國陸軍は次のやうに答へる。「吾等は眞珠灣奪略の價を全く不可能なほど高價にしたので、如何なる敵もそれを支拂つてまでもとは思はないであらう」と。オアフ島駐屯軍正規兵は二萬五千に及び、これは合衆國內に於いて、最大の永久的陸軍駐屯地である。全兵員の三分の二はスコップフィールド兵營に集中して居るが、これは米國一の兵營都市で、他は島内に散在する六要塞地と飛行場とに分散してゐる。多數の飛行場の中で、ヒツカム飛行場はすでに合衆國最大であるが、やがて完成の暁には合衆國で最善の設備を有つ飛行場となるであらう。今度の世界戦争勃發以來、ハワイ駐屯陸軍は戦争状態の下に置かれ、一時間以内に行動を開始し得るやう準備が成つてゐる。アメリカ軍中、最大の快速性と最強の火力を

有する駐屯軍は非常時状態の下に在つて、演習にも眞物の火薬を使用しつつあるので、命令一下晝夜いつでも戦闘部署につくことが出来る。將校、兵士がいつでも用意をしてゐるかどうかを確かめるために、度々非常召集の演習が行はれる、これは軍隊をある地點に集合せしめて、オアフ島のあらゆる場所の防備配置につかせる速度を試すために用ひられる演習である。非常呼集の命令は時々眞夜中に下されて、全管區の將兵が武装を整へて直ちに戦闘部署につかせられることもある。さういふ演習はあらゆる防禦法を包含するものである。それは、陸軍は海岸地帯、丘陵、山嶽地帯、都市と港灣、海軍要塞地、工業區域、郊外に於ける工業地帯、公益機關、道路、橋梁、給水設備等すべてを防護せねばならぬからである。

どういふ理由で、それほど多くの軍隊がオアフ島だけに集中させられねばならぬか。それは、この島は如何なる犠牲を拂つても維持されねばならぬからである。敵がハワイ群島中の或る島に上陸を試みるならば、それはわが陸軍の爆撃機や追撃機によつて、未だ洋上に在るうちに阻止せられ、恐らくは粉碎されるであらう。陸軍は勿論、ハワイ島、マウイ島、カワイ島その他の島々を固守する覺悟で、それぞれ飛行基地を有し、また軍隊を空輸してゐる。もし假想敵が他島に上陸することができず、ひそかにオアフ島を攻撃せんとしても、それは到底わがオアフ防備軍に比肩し得べき程のものではあり得ないであらう。かりに敵がオアフに攻め寄せたとしても、わが陸

軍は容易に眞珠灣防備軍を二倍にすることができし、その場合、全ハワイに割當てらるべき防備力の殆んどすべてをオアフ島に集中せられた意義が、益々明白に證明せられるであらう。

誰の眼にも、少し見る力があれば眞珠灣の戰術的價値は直ぐに納得できるが、陸軍當局の眼に映じたオアフ島の地形上の有利な點は、それほど素人には明かではない。海岸線に沿つて、北東及び南西に向つて二つの山脈が並行に走つてゐる。一般にこれはワイヤエ山脈及びコーラウ山脈として知られた所で、高さは二千呎、三千呎、四千呎位で、その海岸に面した部分は殆ど垂直の斷崖である。その上、これは陸軍の手により、乃至はその許可を受けて造られた通路以外に山脈を越える路はない。外面は多く海岸から屹立して絶壁の障害物を造り、その高さは到底海岸より攻撃することはできない。しかし内面は比較的緩やかに傾斜して肥沃な耕地となり、甘蔗畑や鳳梨畑が數哩も連なつてゐる。地形上、天然に兩側を防禦された眞中の溪谷にスコップフィールド兵營が位置してゐる。

北西及び南東海岸にはさういふ自然の障害物がないので、陸軍はこの方面即ちオアフ島として敵の上陸作戰に開放された部分の防備に全力を盡してゐる。兩山脈の海に面した部分に敵が上陸を企てるならば、恰かもガリポリに於ける英軍の如く、その地點に釘付けにされるであらう。しかし普通の場合として、自然の地勢が開放された廻廊にあたる部分より攻撃してくれば、成功の

機會は前よりも多いわけである。しかしながら南東よりの接近は殆んど不可能である。ダイヤモンド・ヘッドよりパーバース・ポイントの兩岬を結ぶ海岸線の要所には、堅固な海岸防備隊の要塞があつて、南東海岸の全域を支配し、ホノルル及び眞珠灣を守る鐵壁の陣が在る。これらの要塞の内部にはオアフ防備のマンモスの軍備があつて——即ち十六吋、十四吋、十二吋（その數は絶對秘密とされてゐる）——その他多數の小口徑砲が準備されてゐる。この地點に敵前上陸を敢行しようとする敵は、先づこの大破壊機關を破らねばならぬ。

これらの砲臺背後の丘陵には、コンクリートと鋼鐵で固めた觀測所と射撃指揮塔が在り、海岸に沿つては鐵路と道路とが有り、その上を巨砲は列車砲乃至自動牽引車によつて迅速に任意の地點に運ばれる。その周圍到る所に、高射砲、探照燈、聽音器が林のやうに備へられてゐる。

休火山の噴火口に當るダイヤモンド・ヘッドそれ自體は、ヂブラルターを少し縮めたやうなもので、觀光客の遊歩場として知られたワイキキ海濱に突として聳え立つてゐる。火口壁を切り開いて迷路のやうな道路が縦横に走り、その或る所は自由にトラックの通行ができるし、それより小さい廻廊式通路、觀測所、兵營、兵員食堂、事務所等——また火口の頂上にあたる海岸寄りの最尖端の直下には精巧に裝備された全要塞の司令塔、射撃指揮塔、防火所がある。この地點より注意深く眺める時は、精確な望遠鏡の力を借りれば、數海里先の船舶さへも單にその姿ばかりで

なく、詳細な點まで手に取るやうに観測することができる。海岸からは、この司令塔は見えないやうになつてゐて、ただ小さい狭い岩の裂目のやうである。しかし砲臺の眼として、その距離測定器は自働的に敵艦の距離と進路とを示し、ボタンを一つ押せばそれは同様に自働發射装置を持つ近くの砲臺に連結されてゐる。

ダイヤモンド・ヘッドはハワイに於いて一番多く撮影される場所の一つであるが、——尤もそれは遠距離からで——その防備状況は空から肉眼では見ることが出来ない（オアフ島の空中撮影は縣法律によつて嚴禁されてゐる）。數年前までは火口原には數多の野獸が棲んでゐた。今日そこには、少許の半野犬と、猫と、支那種の雉が樹の上に棲息するだけである。頂邊からばかり通ふことのできる南西に面した高所には、原始ハワイ土人の死體埋葬場が残つてゐる。

ダイヤモンド・ヘッドの側傾斜面背後の麓にはルーガー要塞が在る。これは海岸防備砲隊の一枝隊で、その司令部は岩を配置した庭園、花に覆はれた樹林、灌木等で美化されてゐる。しかしここにも巨砲とトラック用廣場があつて、それはハワイ中で最も整備された軍事上據點として知られてゐる。

この世期の初めには、この地方は全く顧みられない砂漠地であつた。この地方を軍用地として買ひ上げる案が提出された時、時の縣知事サンフォード・ビー・ドール氏は、ワイキキ附近で大

砲發射の音を立てることは望ましくないといふ理由で、この案に反對したものである。知事の抗議は合衆國聯邦政府の力で覆へされた。稀にホノルル古老中には、一九〇九年にこの要塞が設立された時には、要塞内を通ずる道路建設の費用が計上されてなかつたので、ホノルル市は完成の後はその道路を使用していいといふ交換條件の下に勞働を提供しては、砲兵隊のすばらしい催しを見せて貰つて悦んだ時代のことを記憶してゐる者がある。

ダイヤモンド・ヘッドよりホノルル市下町へ向つて約一哩、ワイキキ海濱傳ひに、贅澤なホテルの立ち並ぶ所に今一つの海岸防備砲兵隊根據地、デラッシイ要塞がある。椰子樹に取り圍まれた林の真ん中に——それは悠々と砂濱に寝そべる漫遊客の遊び場所より數百ヤードしか離れてゐない——は一五五ミリの巨砲が冷然と海を睨んでゐる。この世紀の初めの十年間には、陸軍はデラッシイ要塞からダイヤモンド・ヘッドに至る、海に面した濱邊を悉く軍用地とする噂もあつた——さうなつたならば「世界最良の海濱」と知られたワイキキの濱も、僅少の軍部關係者以外には全く知られないものとなつたであらう。

或る意味に於いて、デラッシイ要塞はハワイ駐屯軍の見せ場でもある。それは五ヶ聯隊と獨立の司令官を有するハワイ獨立沿岸防備砲兵旅團司令部であつて、その廣大な練兵場には屢々閱兵式が舉行され、常に附近のホテルに滞在中の観光客もこれに招待される。特に夜間、探照燈訓練

演習で壯麗な光りの海を現出する時には一層壯んである。しかしデラツシイ要塞は決してさういふ見世物的存在ばかりでないことは、附近の居住者は、屢々砲臺の實彈演習によつて、家庭用の瀬戸物や硝子器が躍り出したり壊れたりするので十分知りぬいてゐる。

それから更に海岸傳ひに數哩、ホノルル港入口にまた要塞と軍需品補給基地が在る。それは港口から手の届くやうな近距離で、アームストロング要塞である。更に港口を渡つて數哩行くと、シヤフタア要塞が在つて、此處にはハワイ駐屯軍總司令部の他に、アメリカ最古最大の高射砲聯隊第六十四沿岸防備砲兵隊が在る。これは「ジブシイ聯隊」として知られてゐるもので、それはこの聯隊が、一年中つねに移動しつつ、他の沿岸防備砲兵隊の何れの聯隊よりも多くの射撃演習を行つてゐるためにつけられた綽名である。

これらの要塞は、みな人口稠密なホノルル地域に位置してゐるので、もし敵軍の爆撃や砲撃に曝された時には、數萬の市民にとつては非常な痛手である。しかし居住者はいふ危険な環境に住んでゐることには殆んど氣がついてゐない。實はそれほどこれらの要塞地帯は、住民にとつては親しい、また彼等を安心させる保護者としての目標となつてゐるのである。

ホノルル地域がこのやうに堅固に防備されて居るといつても、その七哩先きにある眞珠灣軍港に對する沿岸防備砲兵隊の防備に比べると、物の數ではない。軍港の入口には、カメハメハ要塞

——「王の要塞」として知られてゐる——が在り、これはハワイ沿岸要塞中最大のものである。

これは更に二つの要塞を支配し、一つは本要塞より港口對岸の眞向うに當るウィーヴア要塞で、今一つはそれよりパーパス・ポイントに至る沿岸に位置するバレット要塞である。全域は想像される通り、合衆國中最も強固に裝備せられた要塞地帯で、これは眞珠灣軍港防禦の重要性を考へ合せば誰にでも首肯されるところである。軍用道路、軍用鐵道の間を縫つて、本要塞には二ヶ中隊より成るハワイ列車砲隊を備へ、これに屬する大砲、機關車、客車、トラックその他の必需品一切を動かしてゐる。

約四十年前ホノルルより眞珠灣を廻り、更に北方三十哩程の海岸線に沿つて建設された商業用のこの鐵道が、今や決定的に軍用價値をもつやうになつたとは、實に興味あることである。狹軌式で、人と荷物——正確にいへば、北及び西オアフ耕地よりホノルルへ送る砂糖と鳳梨——を運ぶために敷設されたものであつたが、戦時には所要地點に兵員と物資を急送するために重要な役割を受持つであらう。

眞珠灣防備にとつて、同様に重要なものはカメハメハ要塞所屬の、非常に迅速な移動能力と効果を有するトラクタア牽引中口径砲隊がある。なほその他の備砲——高射砲、一五五ミリ砲、森や甘蔗畑で巧みに隠蔽された十六吋巨砲等——を一見した人は、眞珠灣地域に迫つて來る敵機や

敵艦が如何に強力な砲火に曝されるかを十分に感得できるであらう。

兩側を越すことのできぬ山脈に圍まれ、一方を要塞線によつて護られたオアフ島は、北東、南東、及び南西の面は大體十分の防備を施されてゐる。

しかし北西の海岸はまた別問題である。といふのは廻廊のワイアルヤの端には、良好な上陸適地があり、攻撃者に危険な暗礁もなければ、山脈の絶壁もない——その上、沿岸防備隊の要塞もない。それは敵にとつて一番論理的攻撃點になるので、陸軍は海軍と協力の上、度々上陸軍撃退演習を繰返してゐる。この地域に對する陸軍防備案は、オアフ島防禦の主要戰術即ち移動性戰術を象徴するものである。十年ばかり前に、或る將校達はオアフ海岸を廻らすにマジノ線やジグフリード線の如き防禦壁建造を考へた。しかし、その計畫は弾力性防禦案のために採用せられなかつた。即ち海岸線に沿つて薄い環狀防禦線を廻すより、陸軍の攻撃力を中心——スコップフィールド兵營——に集中する計畫が樹立せられたのである。

もし敵がワイアルヤ海岸に上陸を企つるならば、直ぐにその非を悟らされるであらう。敵艦隊及び上陸軍は、わが砲兵隊が時を移さず、かねて甘蔗畑に隠されてあつた陣地に移動して、砲火の雨を注ぐのに直面するであらう。もしまた若干の端艇が砲火を逃れて岸に到達したとしても、海岸一杯に構築された機關銃座からの掃射を免れることはできないであらう。その間に背後のワ

イアナエ山脈の要所々々に配置された大口徑野戰砲と飛行機とは、上陸軍を運んで來た沖の母艦船を爆沈せしむるであらう。極端に防禦軍に不利な場合が起つたとして、かりに防禦砲兵陣地は沈黙せしめられ、敵は上陸に成功しても、さういふ敵に對する猛訓練を経たわが歩兵隊の果敢な攻撃によつて再び海中へ追ひ込まれるであらう。

かう云ふ計畫は、もしハワイ駐屯軍司令部がその麾下全部隊を機械化し、すばらしい道路組織を完成して、兵員、大砲を走らせる最も能率的移動性を發達せしめなかつたなら、悉く無に歸するであらう。縦二十哩、横三十哩の島上に、二百五十哩以上の鋪裝道路が建設され、その中六十哩以上は全く軍用道路である。普通人を通さぬこの軍用道路の一部は、從來人馬の通ることを許さなかつた絶壁を穿つたもので、その建設技術は驚嘆に値ひするものがある。砲床を高所に築造してあるために防備の價値は測り知るべからざる強度を加へ、戰略的に有利な地點に設けられた觀測所と射撃指揮塔の助けによつて、ボタン一つで各砲臺は素人には無駄と思へるやうな、島を越えた數海里の洋上に在る敵船艦に向つて巨彈を發射することができるのである。かういふ砲臺の位置は、ただ軍部の人にはかり知られてゐること、市民請負師は陸軍建造物の請負工事は許されるが、砲臺築造は陸軍省の命によつて禁ぜられてゐる。或る時代にはこの禁制はホノルル商業會議所によつて強く抗議せられたが、勿論、效はなかつた。

今日では、ハワイをわが太平洋の要塞なりとする考へが餘り一般的になつてしまつたので、そうさせるためにあらゆる力を入れた陸軍の成功については忘れてゐる者が多い。しかしながらハワイに於ける軍事的發展には相當の時がかかつてゐる。

一八九八年六月一日、二千五百人の兵隊を乗せた三隻の軍用船がホノルルに入港した。彼等は心から歓迎されたが、ただ石炭補給の間だけ碇泊した。當時合衆國はスペインと戦争中で、この兵隊はヒリッピンへの途中であつた。ハワイは未だ獨立の共和國であつた。従つて花のレイに飾られて上陸したアメリカ兵は、實は外國の地を踏んだのであつた。

しかしその状態はさう長くは續かなかつた。合衆國議會は、この戦争の必要によつてハワイの戰術的價値を十分に利用するために併合の交渉を急ぎ、ために八月十二日には星條旗が翻つた。それから四日後に陸軍が入港したのである。

八月十六日、第一に到着したのは紐育義勇歩兵第一聯隊と、第三大隊、第二合衆國義勇工兵聯隊であつた。彼等は埠頭から數哩の郊外、現在は人口稠密のワイキキ地域まで行軍して、そこにキャンプすることとなつた。かくて當時の大統領の名にあやかるとマツキンレー・キャンプの設立と共にハワイに於ける合衆國陸軍の歴史が開始された。

初めは軍隊の主要なる義務は、オアフ島を測量して軍の中樞地點を決定することであつた。も

つとも、この目的に關する決定的行動はなほ數年の間とられなかつた、それは軍部の注意が要塞を築造すべき用地を獲得することに集中されてゐたからである。それは長年月に亘つた過程で在來の居住者や、土地財産管理者は陸軍買上げの地價が安過ぎると見たので、時には彼等の悪感さへも挑發した。にも拘らず、合衆國政府は徐々に土地を買ひ續けた——それは今日もなほ繼續されつつある過程である。

そのうちにマツキンレー・キャンプには更に多數の増員と物資も補給せられて來たので、兵員は沼澤を埋めたり、衛生設備を改善したり、無數の蚊軍と闘ひながら作業を開始した。この過程に於いて、彼等は屢々市民の地主と問題を起しては法廷に起訴された。

一九〇三年の秋、陸軍長官の命により、加州駐屯軍司令部は、ホノルルに於いて將校會議を召集して、軍事中心地用敷地の決定を諮つた。當時軍部は既にオアフ島の中央に廣大な土地を購入して居たが、この時の將校會議では該土地は給水不足のため、豫定の兵營建設には不適當であるとした。しかし、間もなく必要の水が同地域に運ばれるやうになると、これはオアフ隨一の適地と化した。その結果、將校會議の決議は再び覆されて、一九〇八年には假兵營の建築が開始された。これが今日のスコップフィールド兵營建設の出發であつた。

それから後は、進歩は極めて迅速で、數年間に亘つて建設事業は進められ、同時に他の十二地

域にも同様の工事が進められた。陸軍の建築計畫は餘程當時の人々を驚かしたと見えて、當時ホノルル発行のパンフィック・コムマアシャル・アドヴァタイザ紙はこれをもつて、途方もない無謀な計畫だと批評してゐる。即ち一九〇八年九月七日の同紙上に曰く。「誰か知らん——近き將來、オアフに二萬の兵隊駐屯せんなどは！」と。當時としては尖端的批評であつたが、豫言は四分の半世紀を出でぬの的中した。

第一次世界大戦にアメリカが参戦すると同時に、數多の兵營や軍用地の衛兵は増加され、全駐屯軍は緊張した——同じ現象は一九三九年秋及び一九四〇年に於いても不思議なほど似通つた状態で繰返されてゐる。しかし第一次世界大戦の時には、ハワイは参戦熱に浮かされた者にとつては沈滞した兵營であつた。若干の中隊が先づ米本土に移動して、更にフランス戦線へ送られ、その後には土地で募集された豫備軍が警護の役をした。實際に、最も刺戟的事件はアメリカ参戦直前に起つた。太平洋を荒し廻つたドイツ軍艦ガイヤー號がホノルルに逃げ込み、港外には追ひ込んだ二隻の日本帝國軍艦が監視することとなつた。出港して日本軍艦にやられるか、港に残つてアメリカ官憲に武裝解除を受けるか、進退谷まつたガイヤー號の將校及び乗組員は孔を穿つて自沈を計つた。しかしこの惧れは豫期せらるる所だつたので陸軍當局は衛兵を派してこれを制止した。その結果、自沈計畫は失敗して乗組員一同はわが第一歩兵聯隊の捕虜としてスコップフィールド兵營に監禁された。後にこの一隊は他の敵方同情者と一緒にユタ州ダグラス要塞に移された。

右の大戦時代より引續き二〇年代は、ハワイに於ける軍事施設、特に空軍設備には相當の發展はあつたが、眞にスコップフィールド並びにオアフ島以外の軍事施設が、現代的様式を整へるに至つたのは、一九三一年以來であつた。アメリカの統治になつて三〇年間のハワイ防備は、確實にして保守的擴張を以て着々進行して居た。しかしながら一九三一年日本の支那侵入を期として、ハワイに於ける陸軍の行動とその勢力とはもはや包み隠す所なく、その目指す所と計畫とを大膽に實行に移し始めた。

オアフ島防備陣は一見、難攻不落ではあるが、陸軍當局は決してこれを以て敵軍の上陸は不可能で、オアフを占領することは出来ないとは思つてゐない。いつも最も不利な條件の下に戦はねばならぬといふ想定の下に、陸軍は、市民には測り知ることのできぬ深謀遠大な企畫を以て各般の訓練に當つてゐる。市民は、ハワイに到る所の要所に必ず見られる土語の「カプー」(立入る可からず)制札で、軍事内容を窺ふことを禁ぜられるのである。

例へば、歩兵第十九聯隊の訓練は、恐らく全歩兵聯隊訓練を代表するものであらう。アメリカ陸軍中最も有名な最も輝かしい誇りを有つ聯隊として(一八六一年創設、南北戦争に偉勳を樹て「チカモガの岩」といふ綽名で知られてゐる)この聯隊は、射撃の正確さに於いては群を抜いて

ある。尤も彼等の装備訓練を見れば、さうあるべきことは當然である。聯隊内に於いて各中隊は各々室内射的場の設備を有し、小銃、拳銃、機關銃、或は三七ミリ砲の射撃練習を行つてゐる。更にスコップフィールド兵營の側には數多の練兵場、銃劍術練習所、演習場、小規模演習用地、〇・三〇口径銃砲射的場が設けられてゐる。兵營から少し離れた所には機關銃射撃用牽引標的を備へた射撃練習場その他の訓練場がある。手榴弾練習用地より程遠からぬ溪谷には、旅團用の一千呎射程小銃、機關銃隊實彈射撃場が在る。

これらの諸設備は絶えず使用されてゐるが、その他にワイヤナエ山脈には、全駐屯軍用「定距離」射撃練習場がある。その中の一つは更に偉大な規模を有して居て、射撃線は一哩に及び、射撃猛訓練のために標的坑は絶えず動搖してゐる。この地域にはまた新設機動標的射撃場が丁度完成されたばかりである。それは非常に野心的な企畫で、銃砲射撃訓練のあらゆる條件に適應するために案出されたものである。この射程は約一哩以上に互るうねうねとした地下の軌道より成り不規則な8の字形でその上をガソリン動力の手押車が一時間二十五哩までは任意の速力で走らせ得るやうになつてゐる。地上にはこの車に附けられた標的が表はれて、二百五十から九百碼までの距離に現はれたあらゆる種類の機動乃至機械化部隊を象徴する。最近に完成された今一つの射撃場は歩兵戰團の極點を示すもので、十四の濠より制御、操作されるあらゆる種類の標的が設け

られてゐる。この射撃場の特徴は二十有餘の偽玄関を有つ建物を築き、陰蔽された濠内より操作される二十八種類の標的と共に變化する色々の場合を想像して考案された所に在る。序でに、この全地域は砲兵隊及び高射砲隊の射撃場と相錯するやうに築造されてゐる。

此處から反對の側、即ちコーラウ山脈にもまた小銃射撃場あり、機關銃、三七ミリ砲及び野砲等の晝夜射撃訓練に供せられてゐる。この地域にはまた偵察監視訓練所が設けられ、ここでは各種地勢に應じた對敵行動の訓練が行はれる。砲彈の痕穴、「ノー・マンズ・ランド」、破壊された村落等を造ることによつて練兵場に實戰的感を出してある。

オアフ島の西端、カワイハイには飛行機によつて空中に曳かれる標的射撃場がある。此處では師團管下の各隊が交互に小銃、機關銃、色々の曳痕彈を用ひて空中射撃訓練を行つてゐる。第十九聯隊は他の聯隊と交互に、定距離射撃訓練中は射撃場附近に野營して猛練習に力める。さういふ廣範圍の射撃訓練以外に、聯隊、旅團、師團、或は全駐屯軍を合して、あらゆる場合の防備を豫想した演習が行はれる。全ハワイ駐屯軍は不斷にさういつた演習、訓練に追はれてゐるといふことが判れば、オアフ島に於ける軍隊生活は、熱帯生活の呑氣なものだなどといふ考へは飛んでもない間違ひであることが判るであらう。

オアフ島の防備は、敵軍は上陸を試みる前に、わが軍の長距離砲隊や高射砲隊を沈黙せしめん

と試みるであらうといふ想定で一層複雑化される。この目的を達する最良の策は、遙か洋上の航空母艦より爆撃機を送つてオアフ防備の要所々々を爆撃することであらう。さうすれば、今次歐洲大戦に於いて證明せられてゐる通り、陸上防備軍の優越は、手中に制空権を握つて敵を近寄せぬ間だけであることが判るであらう。

さういふ場合に備へるために、わが陸軍は有効な空軍設備を建設するために力を入れた。その重要性は、一九四〇年三月、マーシャル陸軍参謀總長が親しくハワイを訪れて、空軍と高射砲隊檢閲に特別の注意を拂つたことでも知れる。合衆國陸軍總司令官がオアフ島を訪問したのはこれが初めてであつて、島の防備は大體適當であると聲明しながら（これは他の部分の防備と考へ合せて、總司令官の言としては最大の讚美である）彼は既設の諸隊を更に強化するために、より多くの飛行機と高射砲隊が本土より派遣せらるべき必要を説いてゐる。（それから間もなく新しい聯隊が加州より到着し、ハワイ空軍の攻撃力と人員は甚しく増強され、少くとも五百臺の第一線飛行機、一萬の飛行將校、兵卒がハワイに駐屯することとなるべき由が正式に發表された。）

何れにせよ、オアフ島現在の空軍設備は、それだけでも相當のものである。スコフフィールド兵營に隣接したホイーラー飛行場からは毎日爆撃機、追撃機が舞ひ上つては編隊飛行、機關銃射撃、爆弾投下演習を行つてゐる。半ヶ月で、彼等の延べ飛行時間は百萬哩以上に上るであらう。

しかし、陸軍航空隊が眞に誇りとするのは、ヒツカム飛行場である。それは眞珠灣に沿つて建設中のもので、陸軍はこれを以て「合衆國最大の飛行場、ハワイ群島の誇り」と呼んでゐる。それは二千二百英町歩の面積を有し、國庫より數百萬弗を投じて建設中で、完成の曉はあらゆる點で最も完備した空軍基地となるであらう。その廣い鋪裝された區域には既に巨大な格納庫、兵營、（その一つは今まで建築された兵營中最大のもので三千名を收容することができる）修理工場、倉庫、住宅、娯樂の中心機關等が完成してゐる。美しい計畫と、それが緑や花の叢に助けられて確かに陸軍が誇る外觀の美を具備したものである。

ヒツカム飛行場は、ハワイに於ける陸空軍の司令部であつて、海軍基地防備のために戰術的要衝の地を占めてゐる。新式飛行機、航空兵、地上整備兵は續々到着してはゐるが、その過程は空軍の立場よりすればなほ非常に遅々たるものである。何となれば、航空兵のみならず地上整備兵を養成するには長い時間を要する上、今は特にそれ等の必要が迫つてゐるからである。かりに地上に置かれてゐる。それも出来るだけ少數ではあるが、數十の飛行機を想像して見るが良し。一隻の追撃機が飛び上る前には、七名の整備兵がこれを點檢する。たつた十分間の飛行にも、この點檢は周到に爲されねばならぬ、——機械工は相互に點檢し合ひ、それから工長が部下の調べた結果を點檢し、次には飛行長、格納庫長、最後に隊檢閱官がそれらの結果すべてを點檢する。爆

撃機が飛ぶ毎に少くとも十五名の検査係が點検することは賅してもいい位だ。さういふ精密な豫備注意の結果は、人命と裝備の節約に多大の貢獻をしてゐる。實際、アメリカ陸軍軍用飛行機はその有効使用年月の長さに於いて世界記録の冠たるものである——これはアメリカの納税者にとつては頗る喜ぶべきことで、特に爆撃機は一臺優に十萬弗を要するからである。

序でながら、ハワイにも敵空軍の爆撃を防ぐ最後のものとして地下格納庫を有つ日もさして遠くはないであらう。目立たないやうに、陸軍はハワイの何處かに、この目的に副ふ土地を獲得した。その正確な場所は、今までの所、極秘にされてゐるが、噂によるとそれはある海岸の自然滑走路に續く丘のある場所、比較的容易に地下格納庫を穿つことができるだらうといふ。

陸軍機は殆んど休みなしにオアフ島上空を飛ぶので、周期的に安眠を妨げられて機嫌を悪くした或る市民が航空司令官に、一體航空隊は空中に住まつてゐるのかと尋ねた。答へとしてその將校は朝刊の裏面を指した。そこには、空中射撃練習のために船舶航行危険區域が詳細に示してあつた。その月には空軍第十八中隊が夜晝なしに編隊、射撃、爆撃演習を行つてゐたのであつた。それはハワイ島南海岸六ポイント沖の水上及び曳空標的射撃（危険區域は水面より二萬呎の高度まで）、オアフ島西海岸四ポイント沖、オアフ島北海岸四ポイント沖、オアフ島東海岸四ポイント沖及びオアフ島、ハワイ島の三飛行場附近の沖で行はれた。

一方に陸軍機は激機を粉粹することを日課の様に演習してゐる時、今一つの枝隊は全ハワイ地域を、それ程血腥くはないが極めて高度の武器で飛び廻つてゐる——それは空中撮影隊の活動である。ハワイのやうに爆撃投下演習用地の少い所ではこれは非常に必要とせられる。ハワイの爆撃投下演習は主として水上標的を對照とするので、空中撮影は、爆撃による水煙と標的との距離を撮影することによつて照準の正確さを測定するに缺くべからざるものである。同時に又これは通信隊や工兵隊に、空中撮影による地形圖を供給しそれは非常に見易いので、これ等の隊を利する所大なるものがある。そこで線と等高線に、謎の様な物の名、高度を表はす數字、交錯した諸々の線、時には難かしい高度計算等を加へた從來の地圖は、數千の空中寫眞を總合して非常な苦心を以て作製された「モザイク式地圖」に改められ、これによると地上の詳細が手に取るやうに明瞭に判るのである。これはなかなか難かしい仕事で、一萬呎の高所より撮つた寫眞を、悉く二萬分の一の比例に直し、その微細の點がみな線を以て表はした地圖の總ての線と一致する様に描かれねばならぬ。しかし結果は驚嘆すべきものがあつて、平面的でどたどたした等高線圖は漸次黑白對照を以て明確に海岸線と陸地地形の細微な點をも表はす寫眞に置き換へられて來た。

さういふ寫眞が、もし敵の手に入つたとすれば、これは防備陣を破る魔術的力となるので、陸軍では許可されない人々の手に渡らぬやう、あらゆる警戒を拂つてゐる。ホイーラー飛行場の第

十八空軍基地寫眞實驗室にはモザイク式地圖や他の空中寫眞ネガの數十打が嚴重な監視の下に保存せられてゐる。みな防火容器に納められ、その貯藏室は發火の際は自動的に水が溢れ出るやうに裝置されてゐる。

ハワイ駐屯の陸軍は、命令一下直ちに應戰準備があるといふことは決して誇張ではない。歐洲に於けるナチの進軍につれて、合衆國內では戰爭介入の可能性を説く者が多いが、ハワイ駐屯軍に關する限りは、長年その爲に訓練されて來た通り今や公式に準戰的狀態に置かれてゐる。戰闘準備の跡は、島内居住者にとつては到る所明瞭すぎる位である。タンク、裝甲自動車、自動車歩兵隊が速力試験の爲にホノルル市中を疾走する。サイレンを鳴らした憲兵の先導によつて、各隊はわざと一番通行の混雑してゐる下町の中心を通過して、彼等の本營より海岸の要塞地點に到達する時間を測定するのである。或る時は市中の要所を占領して戰時サポータージュを防ぐ演習をもすることがある。この場合、監視兵が重要な工場や建物に配置される。また、縣政府所屬埠頭は完全に武裝した機關銃隊、歩兵隊によつて警衛される。同時に、殆どオアフ全島に電力を供給する發電所や瓦斯會社、電話會社、水道局管下にある各水揚ポンプ場にも監視兵が派遣される。水揚ポンプ場の防備に關聯して興味あることは、水についてはオアフ島は自然に恵まれてゐると云つていい。といふのは工業用給水とその裝置は破壊されることがあつても、島全體の給水そ

の物を破壊することは殆ど不可能であるからである。これが破壊に成功する爲には、まづ各々獨立の蒸氣機關で動かされてゐる三つの主な水揚ポンプ場を破壊せねばならぬ。次に、二ヶ所のアルトワ式掘抜井戸、その他數ヶ所の給水昇壓ポンプ場に電力を供給する發電所を破壊し、更にホノルル市内數ヶ所に置かれた貯水地の破壊、又トンネルや山の泉から引く給水裝置を破壊するかせねばならぬであらう。これらのことを悉く成功させる爲には、全市と郊外を悉く占領せねばならぬ。それができれば、これらの行動を遂行するにさしたる抵抗はないであらう。しかしわが陸軍はその戰爭準備計畫中に、決してこの問題を看過してゐない。

毎年一回、ハワイに於ける陸軍の諸活動は、駐屯軍と現代戰の要するあらゆる要素を打つて一丸とした大演習によつて最高點に達する——それは歩兵、野戰砲隊、沿岸防備砲兵隊、高射砲隊、航空隊、タンク隊、工兵隊、衛生隊その他特殊部隊を包括するのである。一年中を通じて、小規模の演習、訓練を續けてゐる各隊は、このとき綜合戰術の下に統一され、海軍もこれに参加する。一九四〇年の四月、五月に互り、ハワイ駐屯軍司令部は、從來の歴史に於いて最も廣範圍にして困難な「問題」を想定した。「戰爭」勃發前約一ヶ月、參謀本部は起り得べき數多の「出來事」を想定して、水も漏らさぬ防備策を講じた。この豫備段階は實際的戰闘の開始される前に起る緊張狀態、即ち「神經戰爭」に相當するものと假定されたものである。この一ヶ月間の待機

後、各指揮官は直ちにその部下を指揮して軍行動を開始することができる。

しかしこの演習に先立つて、ハワイ駐屯軍司令官ヘロン少將（現中將）は、興奮しきつてゐる住民を安心せしむる爲に次のやうな聲明を發した。「オアフは決して電撃戦に曝される恐れはない。その理由は、われらは、何れの方向を見ても陸地より二千海里の洋上に在り、それは敵軍にとつては長い航海を要する、その上、彼等は先づ吾が海軍を破らなければならぬからである。

「しかしわれ等は最悪の場合の對策をも講ぜねばならぬ、それはわが海軍は他の作戦に従事してゐたためにわれ等を救ふことが出来なかつたと假定する。

「そこでわが軍は有力な空軍防備を展開する。わが偵察爆撃機隊は、遠く廣く洋上を警戒する。わが空軍基地は一夜にして加州空軍基地より補充が出来る。敵空軍がオアフ島を視界に入れるより遙か前に、敵機が存在を知つてこれを撃破し得る力は、敵がオアフ上陸を企たつる前に先づオアフ島上の制空權を獲得せねばならぬことを意味する。

「かりに制空權を握り得たとしても、敵の運送船は、海上に碇泊せねばならぬし、それはわが沿岸防備砲兵隊にとつてこの上もない標的である。わが軍の高速度機械化部隊は一時間以内にオアフ島の如何なる防禦地點にも到達することが出来る。彼等は驚くべき破壊力をもつてゐるのである。

「太平洋上に於ける國際的緊張感が増すにつれ、神經戦争は益々近くハワイに迫りつつある。従つてわれ等は日頃の警戒を倍にして、われ等を訓練する。われ等は將來の安全が確保される迄、この警戒をゆるめぬであらう。」

一九四〇年度大演習の問題は、ハワイが侵入軍の爲に不意に脅威せられたといふにある。敵艦隊は適當の空軍と十分に訓練された兵員を有してゐる。その上、敵商船は最初の渡洋作戦に必要な極めて大部隊を輸送する能力がある。

この點に關する「戦争の状況」はわが司令部によつて次の如く説明されてゐる。「敵軍は、夜に乗じてひそかにポート及びパラシュートにより多數の武装した兵をオアフ島に上陸せしめた。「敵は、外國人として島内居住者と混合してゐるが、祕密裡に各地に集合して、給水場を破壊したり、或はこれに毒を投じたり、食糧、通信、電力、その他の必需品並びに民主的機關を破壊することによつて、わが軍民双方の生活を脅かし、且つ現在の住民をして漸次、彼等と同人種の支配の下に置かんとする目的を有するもの如し。

「これらの行動は本島に近付きつつある敵上陸軍に對するわが民力と軍力とを滅殺せんとする準備行動なるもの如し。

「全て警察官、國民兵、他の民間諸團體及び全市民は、知事布告に従つて、軍部と密接な共同動

作の下に侵入者を捕へ、わが家族と家庭、その他諸制度を敵の破壊より護るべし。」

合衆國はこの假想敵國との間に戰爭状態が存在する旨を宣言したといふニュースを受理すると共に、わが艦隊は直ちにこの神秘的侵入者を邀撃する爲に出動した。同時に五十六臺の陸軍機も出動して防空演習を開始した。これにはやがて全空軍が参加することとなるのである。その上、着陸地點に於いては爆撃機は、別々に配置されて敵の空爆を受けた際一時に一機以上は破壊されないやうに警戒された。或る爆撃機は汚ない黒色に塗りつぶされ、他の普通ならば輝く銀色の機體も、色々にカモフラージュされた。銃砲手は常に機上に在つて、敵の砲撃に對して彼等の最善を以て應酬する用意をおさおさない有様である。

敵の脅威を撃退せんがために全ハワイ駐屯軍は戰時編成を以て各部署についた。軍隊は、平時には全然支給されない裝備を付け、特に兵站部は防備陣地の築造、防備資料の支給、防備中心地點へ敏活なる物資補給、及び全線に亙る兵站作業の補強等に重點を置かれた。

演習第二期は九日間續き、これは各隊が各々與へられた防備線につき、初めは比較的少數の單位より漸次増大せられ、終には歩兵 砲兵および空軍を包含する重大な行動に發展して行つた。この期には鐵條網の建設とか、必要なものは個人所有・商業用乃至縣公用に拘らず、土地も、垣根も、電線も建築物も、そのほか何でも防備に供するといふ方針が執られた。

演習の第三期、即ち最終の段階は三日間繼續し、敵による企ては空、海、陸ともに完全に撃退されたことを假想したもので、最高潮點はアメリカ國旗の下に行はれた最大のハワイ全土の空襲燈火管制であつた。これには陸海軍全部とハワイ各島住民が悉く参加した。民間の協力を確保する爲には、數週前より事件の意義を了解させる目的を以て、民衆教育運動が行はれた。各種新聞紙、ラジオ放送、ポスター等によつて、一般民衆の百パーセント協力の必要が、津々浦々にいたるまで普及せられてゐた。商業用通信文の中にもピラが折込まれ、また陸軍機によつても撒布せられ、全運動は民衆に空襲管制の要を確認せしめ、又、その状況に慣れさせるやうにと企畫された。「最後の空襲管制を管制せよ」とのスローガンと共に進行して行つた。四ヶ國語の警告——英語 日本語、支那語、ヒリッピン語——「敵機は君の島を攻撃しつつあり」といふ空襲管制警告ピラ十萬枚が全島に配布された。この準備中、陸軍では自動自轉車の前燈を覆ふ工夫をして試験してみたが、それは五千呎の上空から飛行機で認められるといふことが發見された。その結果陸軍はこの事實を正式に發表して、燈管中懐中電燈やマッチを燈すことの危険を一般に知らしめた。

ハワイ始まつて以來の大事件の夜、五月二十三日、午後八時半を少し過ぎた時、意味深き警笛が鳴らされた。サイレンはけたたましく響いた。消防警鐘が亂打される。ラジオ放送者は緊張した聲で「空襲管制、空襲管制、直ぐに燈火をお消しなさい」と叫んだ。而して人々が大急ぎで消

す瞬間前、全燈火は一齊に瞬きました。

ハワイの全島民は急いで行動を開始した。道路より見える屋内燈は悉く消されるか、カーテンをおろして光線の漏れるのを防がれた。ネオン・サインや飾窓の燈も一切消された。自動車を運転してゐた者は路傍に停車して、燈火を消した。數秒間に全ハワイは存在を消されたやうに見えた。ホノルル後方の丘腹からは數千の人々が、恰かも巨大な保護幕が全市を覆ふかのやうに、一面の光の海が消えて行く景色を眺めた。

間もなく、エンジンのうなりが聞えて来た——數十臺の「敵」機が波のやうに市上空を襲つて来た。或は南方より来てダイヤモンド・ヘッドとパーパス・ポイント間の沿岸要塞を沈黙せしめて、その中間に安息するホノルル市を破壊せんとし、他の隊は、西、北、東の海岸より同時に襲來して来た。この演習に當つて、陸軍はあらゆる種類の飛行機を用ひて、オアフ防備の可能性を試さんとしてゐるのである。不意に空は一面偉大な光茫の交錯に生き返つた。空を貫く探照燈は「敵」機を映し出して、明かに吾が高射砲隊の標的とした。

散々に敗北した「敵」機は、間もなく来た時と同じく風の如く去つた。再び燈火は點ぜられた——ハワイは「救」はれたのである。

一九三九年の空襲管制は全面的成功であると公布された。但し一九三九年には、オアフ島だけ

の空襲管制であつたが、一九四〇年にはハワイ全島が「攻撃」せられたもので、參謀本部の意見では全縣下協力に對する努力は、十分に酬ゐられたといふ。しかし小さい事件で軍部と地方人指導者との間に意見の不一致を見た。はじめ、ハワイの空襲管制に關する精細な放送が成される計畫で、それはアメリカの西海岸と東海岸をつなぐ中間放送によつて、アメリカ中の民衆に、敵機に襲撃された地方に住んでゐる者の感じを傳へようとするものであつた。さういふ放送はアメリカ本土の人々に、ハワイは決して平和な休暇地でないといふ印象を與へると云ふので、ツーリスト・ビューローの幹部は、恰かも一九三八年オルソン・ウエルスの放送による火星人侵入事件の時に起つたやうな大衆的ヒステリーの原因となるといふので抗議した。軍部は、放送のテキストは嚴重に檢閲されて居て、布哇の空襲が實際であるなどといふ幻想を起させるやうなものではないことをビューロー側幹部に説明した。しかし後者はこの放送を本土に繼送することには、何れにしても聽取者に正常ならぬハワイ・ニュースを聞かせるといふ理由で極力反對した。にもかかはらず、この放送は豫定通り行はれた。

偶發事件としては、空襲管制が終つて再び燈火が照らされると、共産黨員がこの機會を利用して數千枚の反戦ビラを撒布した事實が明るみへ出た。それは「合衆國共産黨、紐育、東十二番街三十五番地」とした署名入の騰寫版刷りで、ルーズヴェルト大統領が國防費として十億弗の要求

をしたことを攻撃し、且つ讀者に「自由と平和と民主主義の管制を止めよ。戦争商賣人をやつつける。今度はヤンキーは來ないぞ！」等と勸誘してゐた。

ハワイに於ける一九四〇年の空襲管制は、色々の意味で重要であつた。それは單に空軍防備状況を示すことによつて軍事上有益な演習であつたばかりでなく、戦時状態になつた場合、軍民協力の必要密接な關係を象徴したものであつた。未だ曾てこの二者の關係がこれほど劇的に公衆の前に演ぜられたことはなかつた。しかもそれは軍部がハワイに於いて長年月計畫して來た問題、太平洋に戦禍が及んだ際ハワイ生活を軍によつて握ることに關する一つの表示に過ぎなかつた。

それは一旦その不祥事が起れば陸軍は外部よりの敵と同時に、内部の敵に對しても用意せねばならぬ故である。内部の敵とは、ハワイ居住の敵意を含む日本人——それは對日開戦の場合、島内各般の事業を怠業する怖れがある——ばかりでなく、一般民衆の混亂こそ人口稠密な地域に於ける尨大な陸軍作戦を邪魔するものである。さういふ混亂を防ぐ事は、有力な軍の戦闘力を維持するのと同等の防備價值あることを認めた陸軍は、民間との協力については、如何なる微細な點に於ても平常周到の準備を續けてゐる。さういふ案の創始者はヒュー・エー・ドラム少將（現任中將）で、彼は一九三四年ハワイ駐屯軍總司令官當時、總司令部に「サーピス・コムマンド」といふ一課を設けた。軍隊式用語でいへばこれは「すべての團體をして、共通の目的即ちハワイ諸

島防備の目的を完遂せしむる爲の努力に向はしめ、且つ之を統制し、總司令官は地方人の必要とする所を絶えず報告せらるる爲の機關である。それは又、ハワイが攻撃せられた場合、物資の供給と、地方人所有に屬する總ての物力を、最善と思はれる所に配分する爲の設備である。」

ドラム將軍は一九三五年の第一次世界大戦休戦日に、もつと簡潔な詞でこのことを言明した。「今ハワイ防備案中に一隊を加へたが、その特別任務は、市民及び非軍人要素をこの案中に協力せしむるに在る。將來、吾々が包含せらるべき戦争に於いては、戦争開始と同時に、ハワイに於けるすべての男、女、また小兒もこれに包まれてしまふので、島の防備のためには悉くその身命を共にすることとなるのである。」

ドラム將軍はハワイに在る間は地方人有識者達から歓迎されず、彼の率直な話しぶりと絶えず戦争の脅威を繰返すことは寧ろ控へ目にされたがよいと思はれてゐた。それにかかはらず、サーピス・コムマンドの任務は遂行され、その計畫は擴大され、有力な地方人の協力を得て、戦時中の島生活の進むべき途を考究することとなつた。この計畫は、今日非常に發展して、合衆國內においてハワイと同じ位の地域、人口に於いて、非常時に際してハワイぐらゐる準備が整へられ、且つ各人その任務を熟知してゐる所はないといつても過言ではない。

サボタージュの脅威に對して、陸軍は戒嚴令施行前には、合法的行動を取ることが出來ないの

で、民間當局者は彼等の力の及ぶ範囲でこれが取締り方法を作つてゐる。甘蔗耕地會社、公益機關、石油會社、在郷軍人團、F・I・R、その他の團體より千名以上が雇傭人達によつて注意深く選ばれた人々の協力を得て、毎週規則的に集合しては工場を護り、警察官を援助する訓練を受けてゐる。

もしハワイに危機が來た時には、直ちに戒嚴令が布かれ、陸軍は全島を支配するであらう。そして、市民は自働的に動員されて、經濟機構の運轉を行ふであらう。これらの人員は既に選ばれてゐる。彼等の任命はただ署名を待つばかりで、各自その任務と、遂行の方法と、彼を助ける者まで知り盡くしてゐる。或る者は食物を管理し、或は運輸、通信、公益機關、財政を管理するであらう。何もかもちやんと誌してあつて、特殊技能を有つた人々即ち醫者、工學者、請負師等々に至るまで、その機能が列擧せられてゐる。數年の間、陸軍は祕密裡に民間有志に接近して、豫備將校として彼等の参加を要請して居た。そのうへ國民軍は追加組織せられ、新武器庫は建造され兵員も増大されて、今日では地域人口の比例よりすれば全國中いづれの箇所よりも大きい國民軍を設けてゐる。それは歩兵、司令部付中隊、曲射砲隊、サーヴィス部隊、機關銃隊、衛生隊等を備へ、ジョージ・シー・マーシャル參謀總長最近の言によれば、平和的に於いてこれ以上完備した國民軍はないといはれるほど發達した。

一朝事ある際、四十二萬二千人の全人口の生命、財産に責任を有する陸軍は多くの困難な問題を有つてゐるが、中で一番面倒なのは食糧問題である。砂糖と鳳梨の二つを收穫する經濟政策は、平時には極めて繁榮であると同様に、戦時には非常な弱點である。全島を合して食糧の産額は需要の三分の一だけしか満たす力なく、全人口の六〇パーセントが住んでゐるオアフ島は島内に必要な食糧の一五パーセントしか産出しない。陸軍の最樞要地たるオアフ島は敵軍に包圍され、閉鎖されるものと假定せねばならぬので、もしオアフと他との交通が杜絶した場合には、島居住者に食糧を供給することが重大な問題となるのは自明の理である。

ハワイ——とその陸軍は、先年太平洋沿岸海員ストライキの時、食糧問題のもたらす苦しみ的一片鱗を味はされた。一九三六年十月二十八日から翌年二月八日まで、ハワイ各島の港に出入する船舶は、アメリカ東海岸から來る少數の貨物船か、外國船、合衆國政府船及び油送船に過ぎなかつた。この商業制限——太平洋戦争の場合にはこれより遙かに大規模で、より冷酷であらう——は、直ちに價格を騰貴させ、或る種の食糧品はどんな高値を拂つても手に入れることが出来なかつた。オレンヂは一打につき一弗三十五仙で賣られた。これは正に二五〇パーセントの値上げである。葱は二一五パーセント、米は三四パーセント、ポテトは二三パーセント、小麦粉が二〇パーセント、とうもろこし粉が四〇パーセントの値上げであつた。耕地勞務者の間に廣く需要の

ある罐詰ミルクの供給も、他の主要食糧品同様に急激に減少した。元來通常の状態ではオアフ島の貯藏食糧品は二十四日間分だけしか無いのである。若しオアフの家畜類、搾乳場の乳牛、家禽、養豚が全部屠殺されて食料に供せられても、それはただ十四日間を保つに過ぎないといはれる。

右ストライキの終結に當り、ドラム將軍はオアフの食糧品は、日本、濠洲、カナダ及び數隻の陸軍軍用船で米本土から供給されつつあるに拘らず、僅か後十四日間を支へるだけしか残つてゐなかつたと報告した。その報告の終りに將軍は次のやうに附言した。「もしハワイが現在の生産過程に變更を加へず、その海運が何らかの理由で杜絶されたならば、その食糧は數日間に激減し——數週間で非常に缺之を感じ、數ヶ月で飢餓に瀕するであらう」と。

この悲觀的豫言は、一旦事ある場合ハワイが米本土より完全に孤立させられる可能性の多いことを悟りきれぬ大部分の島内居住者には、少しく考へ過ごしのやうに見られてゐる。にもかかはらずこの海員ストライキは、既にハワイにも提唱されてゐた土地産の食糧品獎勵運動に一層の力を與へた。陸軍は防備案の一つとしてこれを支持した。耕地幹部と五大財閥とは勞務者の食餌に變化を増し、能率低下の原因となる疾病を減ずる手段として、政府と縣農業技師は商業的立場から農家に益々機會を與へ、食糧の本土依存から獨立する機會を増大すのみならず、逆に米本土に向つて季節違ひの作物を送ることが出来るといふので、大いにこれを獎勵した。爾來相當の發展を

遂げるし、數年前に比較すると相當廣い面積が小農耕作地化した。この運動は本質的には大した進展を見せてゐない。それには數多の理由が擧げられる。第一に、五大財閥は元來砂糖と鳳梨産業並びに米本土よりハワイへの食糧品供給に莫大の資本を投じてゐるので、ハワイの輸出——輸入——社會經濟組織を、自給自足の満足した經濟生活に單位化することには執拗に反對する。彼等は、若し小農耕作が成功すれば、必然的に甘蔗畑や鳳梨畑の畝間を耕して野菜を植ゑつけるやうになると考へる。その結果、彼等は頑として自由貿易説を固持し、「ハワイは米本土の大資本を基として爲される大規模の機械化食糧品製産と競争して勝つことは出来ない。従つて、ハワイの二大産物たる砂糖と鳳梨耕作から生れる利益を以て外來物資に依存すべきである」と主張するのである。

この態度に直面したハワイの野菜栽培業者は、事業開始前すでに打ち負かされた形となつた。島と島との間の運輸の便は、地方産の野菜を急いで市場に出荷する保證がでない。その結果、生の野菜や果物類は市場不況の時に出荷させられたり、顧客の手に入る時には五六日も古くなつてゐたりするのであつた。オアフ島では、そのうへ借地料が高いので、大規模の野菜栽培は事實上不可能でもある。

しかしながら防備上の必要に對する認識が高まるにつれて、各種團體では少くとも小農制度に

ついで口だけの奨励は続け、或る程度まで陸軍と協力はしてゐる。その結果サーヴィス・コムマンドはハワイ大學農事試験場、合衆國並びに縣農業普及局、布哇甘蔗耕主組合試験場の收穫實驗と密接な關係を保つてゐる。陸軍は、現状の下では新收穫を導き入れることは永年の忍耐を要し或は成功しないかも知れないことは良く知つてゐる。しかし尙あらゆる可能性を試してゐるのである。陸軍は、民間食糧貯藏量より長く続き得る軍用食糧を以て或る期間は支へ得ても、背後に飢餓に苦しむ地方人を持ちながら敵の封鎖戰術に打ち勝ち得ないことは十分知悉する所である。

數年の間、サーヴィス・コムマンドは動員の日に植ゑつけて、大急ぎで收穫の出来る作物について實驗を重ねて來た。その結果、或る作物、殊にポテトは八十日間に成熟することを發見した。そこで、オアフの人命を維持する爲には二萬五千英町を必要とすることを計算し、種子の種類、農具を定めてそれ等の資金を求めた。少くともこの企畫に部分的にも適當な地域は、オアフ砂糖會社耕地でスコツフィールド兵營と眞珠灣の中間に位する豐沃な現甘蔗畑である。いざとなれば陸軍は直ちに此處に手をつける計畫が出来てゐる。數十英町の甘蔗は鋤き返されて、ポテトや他の野菜が植ゑつけられるであらう。實際耕地會社は、既に一九三三年からその實驗を始め、相當の經驗を積んでゐるので、陸軍の援助を得てポテト耕地を三百五十英町に増加した。一九四〇年はこの耕地でハワイのポテト一年消費量に相當するポテトを産出した、そして米本土

西沿岸並びにハワイに在る仲買人や食糧品精製業者に賣つて相當の利を擧げた。この出來事は軍部に對して、戰時には、もし收穫の早い作物が收穫されるまで守り通せば、甘蔗耕地は民衆の食糧問題を解決し得るといふ再確認を與へた。この點に就いては、ハワイの甘蔗耕地機構によつて實例を示されてゐる大規模共同農耕組織とその能率は、決定的有利な條件であらねばならぬ。

戰時中、食料となる野菜類の種子に缺乏してはならぬといふ問題に周到の注意を拂ふ陸軍では數多の種類を貯藏して絶えず新種を注ぎ足して行くことを主張してゐる——或る種子は一年迄は保つといふ。その上陸軍並びに農務長官ヘンリー・ウォーレス氏の後援を得て、合衆國會議は二十三萬二千三百二十弗の補助金を下付して冷房裝置種子貯藏庫の建設と維持を請求されてゐる。しかしながらさういふ中心機關の設立は、未だ解決されてゐない數多の聯關した問題を提出するであらう。大規模の野菜栽培には今迄よりも遙かに多くの耕作器具を必要とする。より多量のトラクター用燃料とか、土壤の準備も必要である。(甘蔗畑の未だ細かい土壤に碎かれたことのない僅かの英町を用意するにも數週間乃至數ヶ月の激しい勞作を必要とする。)

地方産の食糧品を奨励する爲に、陸軍は土人の用ふるクロ諸さへも利用した。之はいつの頃よりか土人の主要食物となつてゐる物である。ねちねちした糊のやうな物に叩き潰して、土人は之をポイと稱して常食として居るので、ハワイ土人に對するポイは、西洋人のパン、東洋人の米と

同じである。タロ製品の味と實用性を試す爲に陸軍ではタロ入りのパン等色々と實驗してみた。そして一時ハワイ駐屯軍ではタロ入りパンばかりを食べさせられた。その結果の公式報告によると「全く實用的で健康にも適するので、自給政策遂行上一大進歩である」とされてゐる。食べた多くの兵隊達も「まづくはない」といつてゐる。戦時には、味の良し悪しなどいつてゐる者にかかはつてゐられないことは論を俟たぬ所である。

陸軍はハワイで得られる代用食品の可能性に就いても決して見逃してはゐない。耕主組合試験場の研究は、ハワイの食糧問題は甘蔗だけでも解決出来ることを示してゐる——甘蔗ならばハワイは餘るほど産出してゐる。試験場の科學者陣は次のやうに説明する——そして彼等の觀察と測定は軍部の權威家が深い注意を以て看取してゐる——即ち砂糖は單にエネルギーの源ではなく、エネルギーの唯一の源であると。生きてゐる緑の植物によつて構成される最初の化學的化合物として、糖分は成長しつづつある植物が蛋白質、澱粉、脂肪等を含む總ての要素を造る該心である。この事實を知悉せる耕主組合試験場の科學者達は砂糖の溶解液で、既知蛋白質源として最も濃化された物質を基として生ずる酵母^{酵母}の産出に實驗を重ねた。いひ換へてみると、酵母植物は肉やビタミンに相當し、事實は之はビーフ・ステーキに凝集されてゐる。ただそれは嘔むことが出来ないものである。この實驗は進んで、今や四十八時間以内にハワイの軍民すべてを養ふに足る酵母を造

り出すことが出来ると宣言してゐる。過去に於てはこれ等の科學者は、疫病の場合の如く誇張を避けてゐたので、自然今度は陸軍當局の深い興味を惹起した。彼等は若し科學が戦時食糧難を救ひ、ハワイ防備の一大弱點を除く事が出来たならば最も熱烈な感謝の祈りを捧げるであらう。

彼等はまた、砂糖が高度爆薬の原料となる事實を無視することも出来ない。(尤も陸軍は現有二千萬弗を支拂つた火薬準備で長期間包圍を蒙つた際にも十分だと聲明はしてゐる)その上砂糖は非常の場合ガソリン代用としてアルコール製造の基礎となるものである。一英町の甘蔗は八百八十九ガロンのモーター用燃料を生産することが出来ると科學者達は確言する。而して英國産アルコールの熱量單位はベトロリウム熱量單位ほど大ではないが、必要な場合には、アルコールはガソリン代用となるのである。砂糖副産物の用法の研究については、サーヴィス・コムマンド即ち參謀部が深甚の注意を拂つてゐるといふことを、此處に附言する必要は殆んどないといつていいであらう。

ハワイ駐屯陸軍は、地方人全體がその存在を十分に知つてくれなければ、起きてゐる間を悉くその防備完成に費して、いざといへば直ちに戦時状態に突入することはできぬ。このやうに大規模の準備には費用を要する——それも驚くべき巨費である。そこで陸軍が平時に、毎年ハワイで支拂ふ金額二千五百萬弗の大部分は、直接間接にハワイ居住民のポケットに這入つて行くのであ

る。砂糖と鳳梨に次ぐ第三の縣重要収入として、陸軍はハワイの或る者には繁榮を、他の數千の者には安樂な生活をもたらしてゐる。

ホノルル下町の商業埠頭に近く建てられた新家屋こそは、ハワイ駐屯軍經理部事務所である。それは質素な平家建ではあるが數丁先にある五大財閥の堂々たる建物がやつてゐると同様な「取引」の行はれる所である。毎月、それは百六十萬弗を軍人、軍屬、商人、請負師その他陸軍と取引する商店に支拂ふのである。その上、スコップフィールド兵營には、今一つ經理部支部があつて毎月六十五萬弗を扱ひ、シャプター要塞の總司令部には同じく經理本部があつて、全駐屯軍の經理狀態を監督してゐる。陸軍の複雑な經理書類を記帳、整備することは決して小さな仕事では無い。それは民間の大會社に雇はれてゐる事務員群と同様に、財政専門家、會計検査官、簿記係、書記等特に訓練された部員を必要とする。

ハワイ駐屯軍は毎年、米本土産乃至米本土精製になる食糧品、約三百萬弗をハワイ商人に注文してゐる。五大財閥はハワイに供給する合衆國の主なる食糧品店の代理權を有するがゆゑに、自然五大財閥系統の商會が陸軍の注文と、それに伴ふ手數料を引受けることとなるのである。その上、陸軍はハワイ産果物、野菜、鶏卵、牛乳、肉等を購入するために約五十萬弗以上を地方商人に支拂つてゐるので、これは間接的にはハワイの食糧品産出獎勵にも役立つてゐる。

それ程長くない以前には、陸軍の食物は耳障りになるほど戲談的とされてゐた、然し今では合衆國は陸軍食の質と量とを非常に改良した上、その平均營養價值にも十分の注意を拂ふ様になつたので、陸軍は多くの普通人より遙かに質量共に良い食事を供せられてゐる。感謝祭の様な祝祭日の陸軍料理は正に第一等の御馳走である。ハワイ駐屯軍では感謝祭の兵食に約二萬五千弗を支給する。七面鳥二千羽、一羽平均十五封度（兵一人につき肉は二封度）で八千弗を要する。其他メニューを一見すれば如何なる大食家でもたちまちとするであらう。餘り食べ過ぎた爲に、後で重炭酸賣達の賣行が急に殖えたといふので如何に御馳走であつたかが判ぜらるるであらう。

勿論さういふ食事は軍隊に於いては特別の場合に限るので、少くとも年二回、感謝祭とクリスマスは間違ひない所で、その他は、多くあればあるほど兵員の心を樂しませる——同時にハワイの農家や商人をも悦ばせる。

他の軍需品、例へば物資保存の爲の補給品購入乃至手入れ、修繕、燃料、燈火、熱、時に建築資材等の爲に、數百萬弗が地方商人の手に渡される、さういふ取引は不況時代には或る種のハワイ商人にとつては、赤字を防ぐ十分の収入となつた。

しかし、地方商人の眼を輝かせるものは何といつても陸軍の俸給袋であらう。その中からハワイの商界に確實で、間違ひのない収入が流れて行く。將校、兵、軍屬等が年々受ける高は千五百

萬弗に上るであらう。或る部分は直ちに銀行へ預金される。或る部分は米本土の親戚等へも送金される。しかしその大部分は——驚くべき多額はホノルル市内に流入する——何處の都市でも求められるやうなありとあらゆる品物と姿を變へて行くのである。

スコップフィールド兵營地その他が、陸軍の「大取引」機能の更に好き例を表はしてゐる。それは一萬五千人以上の都市で、日常生活を圓滑に進ましめるためには相當の經濟的計畫を必要とする。これに當るのは軍經理部の任務である。能率と便宜上、これは數箇の單位に分たれ、その公益課の如きは職務を行ふ手際によさで多くの民間の公益機關を凌駕するものがある。それはあらゆる型の建築物千六百軒、五十哩の上下水道、電燈電力線、製氷工場等の維持を司つてゐる。運輸課の任務も同様に重要で、ハワイ駐屯軍の誇りとする機械化部隊の快速力に遲滞なからしむるのは、この課の責任である。これもあらゆる型の自動車約千二百臺を統轄して全軍に費用、行動資料を提供する爲に詳細な記録を作つてゐる。さういふ資料は議會に於て駐屯軍の維持、擴張、豫算作成の爲に質問を受けたとき直ちに必要である。

次に糧食及び物資補給課がある。これは軍人及びその家族を中心とする社會生活必需品即ち食糧品はいふに及ばず、ピンから重機械の購入まで司つてゐる。これらの任務を遂行するために經理部は、直接地方の會社商會と取引をする。これは後者にとつては驚嘆すべきことであらう、そ

の理由は、普通かかる取引は仲買商の手を経て、一割乃至一割五分の手數料を取られるのが習慣であるのに、經理部は合衆國政府の命により、直接卸商と取引せねばならぬ建前に在り、ハワイには未ださういふ機構のもので、これほど大きな機關がないからである。

陸軍がこのやうに、周到に非常時のあらゆる場合について準備を整へてゐるにも拘らず、尙一つ海軍と一般住民をも同様に困らせる大きな問題が残つてゐる。それは日本人問題である。日本と開戦した場合、彼等がアメリカに對して忠誠であるかどうかは陸軍當局がハワイに到着して以來惱まされてゐる問題である。諜報勤務將校はいふ。ハワイ生れの日本人の大部分は積極的にアメリカに有用である事は豫期せらるる。日本生れの日本人に至つては疑ひもなく彼等の母國に對して忠誠である。しかし、何れにせよ、われ等は日本人は「問題」ではないといふ假定の下に行動するわけにはいかぬ。何となれば日本人側で、積極的反抗でなくても、消極的抵抗が行はるるならば、地方人の共同を必要とするわが軍の戰術遂行に非常な障害となるからである。

豫期し得らるるとほり、この態度を考慮に入れてゐる諜報將校は、島内生活のあらゆる方面に非常な活動をしてゐる。或る者は語學將校として日本に留學した經驗もあつて、自由に日本語の読み書きが出来るので、ハワイ各地で刊行される日本語新聞を讀んで、代表的日本人の意見を知り、また日本人社會の感情や希望を探ることが出来る。ハワイ日本人間に行はるる日本語放送プ

プログラムを注意深く聴取してゐた諜報將校は、或る程度までは非常時にこれをコントロールする具體案を樹ててゐる。それは、そんな場合には日本人放送者を持して諜報將校の命じた代理を入れ、その命に従つて日本人全體に爲すべきことと爲すべからざることとを放送しようといふのである。その上、普通人からなる内報者の巧妙な組織により、諜報將校は一般日本人と同時に、彼等の指導者が何を擁護しつつあるかを知ることが出来るやうになつてゐる。

二〇年代の終りから三〇年代初期にかけて、陸軍は日米開戦の際には、日本生れの日本人を悉く捕へて一ヶ所に集中監禁しようといふ真面目に考へたことがあつた。しかしながらこれには多くの困難が伴ふし、また日系アメリカ市民の賛意を得ることが出来ないであらう。この案に代り、もっと緊密な平和的看視の下に、陸軍當局は日本人社會の指導者達をコントロールすることによつて、一般日本人民衆をもコントロールできるであらうといふ結論に達した。いづれにせよ、それは大して難かしい問題ではあり得ない、戦争となれば必ず軍の統制となるであらうし、集中監禁もよし、必要に応じては銃殺といふ方法もある。

にも拘らず將校の中には、日系市民に銃砲の使用法や、中隊、大隊教練を教へることに明確な疑念を挿んでゐる者もある。さういふ訓練は、陸軍省の命により現役並びに豫備將校によつて、ハワイ大學や他のハイ・スクールに於ける豫備將校訓練隊で行はれてゐる。數年前ハワイ大學の

學生投票で、軍備は安全を保障するや否やが論ぜられた。全票三百三十八の中僅かに十七票が之を肯定した。これは當時、アメリカ中の大學を風靡した思想であつたが、第一學年と第二學年には豫備將校訓練を強制してゐるハワイに於ては、大した影響はなかつた。その上、ハワイ大學では第三學年、第四學年になつて、この訓練が強制でなくなつても志願者が多くなり、設備に困るやうになつた。最近この課の係りとなつた一將校の意見を此處に紹介して、どういふ状態かを知る實例としよう。「彼等はみな善良なアメリカ青年だ。日本人系の青年は特に敏活で良心的だ。そして他人種の青年よりよく準備してクラスにも出席する。だが彼等は他に比べると應用の才に缺けてゐる。もしどの頁にこの材料があるといつて置けば、彼等はちやんと間違ひなくやつてくゝる。しかし自力で答へねばならぬやうな問題を不意打に出して見ると、日本人系の青年は他人種よりずうつと成績が好くない。」

成長しつつある青年級と直接交渉の少い將校達は、豫備將校訓練の終りに色々の賞牌が授與される時、その大部分が、いつでも實はハワイ駐屯軍が防備に苦心してゐる民族の子孫に渡されるのを見ては、餘り良い心地がしないのである。何が故に、軍事訓練を彼等が欲すると否とに拘らず、いつかは逆にアメリカに對して用ふるやうに強ひられぬとも限らぬ民族の子孫に與へるのであらうか。之は豫備將校訓練陸軍兵式を助けて、日系市民學生將校の活潑にして正確な動作を見

て心配する將校達の議論である。

ハワイ大學に入學しない日本人系青年が、ハワイ國民軍に志願しても、それは一般に失望に終らされる。アメリカ市民ではあつても、國民軍は彼等を歓迎しないことは暗々裡に周知の事實である。さういふ差別的待遇は彼等が率直に口にするやうに極度に彼等を憤慨せしむるもので、實際、長い間、さうし續けられてゐる。合衆國が第一次世界戦争に参加した時にも、合衆國民衆と軍隊とは同様に日本人不信の證據があつた。當時彼等は日本人の軍隊服務ぶりを多少とも目前にしたのであつた。初めは志願をした日本人は全部拒絶された。しかしその中に日本人より成る數ヶ中隊が編成され、さして重要でない多くは人の嫌がるやうな勞役を課せられた。彼等の輝かしい服務ぶりは、オアフ山頂にある數ヶ所の水源地守備で、これは峨々たる火山岩より成る濕地にあつて、雨の日、風の日には名狀すべからざる困難を伴ふ勞役であつた。然し、米本土乃至フランスに送られた中隊は一つもなかつた。

ハワイ大學豫備將校訓練隊が陸軍の嚴重な指揮の下に在りとすれば、同様のことがマッキンレー・ハイ・スクールのそれについてもいへる、マッキンレー・ハイ・スクールの全校四千の生徒の過半數が日系市民である爲に、「東京大學」と綽名される學校である。ハワイ駐屯軍付諜報將校が、マッキンレー生徒隊の軍教訓練を參觀しては、訓練の將校や生徒と親しく話してその報告

を作つてゐるが、それは大體において筋外れのことが多い。生徒に問はれる質問は決まつて、日本と開戦した場合はどうするかといふのである。これはハワイの島にアメリカ國旗が翻るやうになつた時以來、日本人に投げつけられる質問である。しかし、アメリカに忠誠を誓ふといふ返辭が如何に眞剣であつても、そして永年の米化運動が進行されつつあるにも拘らず、陸軍からは逆に益々割引して取られてゐる。最近ある將校は「ハイ・スクールの軍教ボスターの意匠係り募集に當つて、何故日本語の書ける者と制限したか。それは、アメリカの軍教と一體何の關係があるか」と質問してゐる。

一九四〇年八月、議會で徴兵令の討論が行はれてゐる時、議會はハワイ日本人に對する陸軍の疑惑を直接に教へられた。人種と皮膚の色と、宗教に就いて無差別の待遇を許さんとするこの修正案に對して、陸軍省當局は、ハワイの防備が、不忠誠な日系市民が軍隊内に混入することによつて、甚だしく弱められるであらうと指摘した。上院陸軍委員の一人、リスタア・ヒル(アラバマ州選出民主黨)は陸軍省の聲明を次の如く引用した、「ハワイ人口は大凡十五萬五千人の日本民族を包含してゐる。このうち、約三分の二はアメリカ領土内に生れた権利によつてアメリカ市民である。その大部分は明かにアメリカに忠誠であらうが、他はさうでないことは周知の事實である。人種に關係なしに徴集したり、或は日系市民を徴集することを要求する法律は、彼等が他

の點に於いては有用な者であつたにせよ、この太平洋危機時代には合衆國軍の力を甚だしく弱めるものである。」

一九三七年、ハワイ立州問題調査の爲に上下兩院共同委員としてハワイを訪れたミラアド・イー・タイディングス（メリーランド洲選出民主黨）は次のやうに聲明して、陸軍當局の立場を擁護した。「議會は數次に互つて、ハワイにも州政を施くことを考慮した。日本人系人口が非常な多數を占むる數字が、ハワイを州に昇格せしめぬ理由として提示された。ハワイ駐屯軍が日米開戦の場合、その忠誠を疑はれるやうな日本人部隊の多數を包含したとすれば、それは由々しき大事である」と。

ハワイに於ける徴兵令は他民族よりも日系市民により多くの影響を受けるであらうといふ陸軍の警戒にも拘らず、上下兩院陸軍委員は問題の修正案を通過せしめた。その結果、ハワイでは約二萬五千の徴兵適齡期にある日系市民に應募への途を拓いた。（ハワイ全體に於ける徴兵適齡者は總數七萬七千五百人である）その中の多數は二重國籍によつてなほ法律的には日本帝國臣民でもあるのである。

この事件が如何なる成果を得たにせよ、とにかくアメリカ全土に向つてハワイ日本人「問題」に關する陸軍當局の立場を明瞭にしたことは確かだ、同時にこれは數週間前議會に於いて、ハワ

イには明白に強力な第五部隊がひそんで居ると確言したと報道された新聞記事に或る權威を與ふるものである。——しかしハワイ住民の書簡によつて、これらの報道を得たといふやうな嫌疑は要するに餘り大ざつばで、結局「ハワイの日本人は、どの程度まで忠誠であるか」といふ古臭いあて推量の遊戯を繰返す以上に何等得る所はないのである。

むすびとして

むすびとして

數年來、ハワイ觀光を思ひ立つてはゐたが、未だその目的を果さないでゐた東部知名の人が、數ヶ月前、一切業務上の勞苦を捨てて完全な休養を要すといふ主治醫の勸告によつて、急にハワイ行を思ひ立つた。「直ぐハワイに行つて仕事のことなんか忘れておしまひなさい。」といふのが醫者の診斷だつた。

彼は即座にこの忠告にしたがつた。空輸奇蹟のお蔭で、三日目には、彼はもうワイキキの砂濱に快く日光を浴びつつ寢そべることができた。

生れつき、物を究める性質だつたので、彼はハワイに来て五、六人種を祖とする島人と、何氣なく交つてゐるうちに、自然と判つて來たハワイ生活のかれこれに、いつの間にか深い興味を覚えてゐるのだつた。で自分でさうと知らぬ間に、ハワイ生活の基調を發見しようと力めてゐた。

彼のために開かれた送別晚餐會で——彼は既に三度も歸郷を延ばしてゐた——主人が彼の方を

向いて靜かに尋ねた。「めつたにお目にかからなかつたね、一體どこにゐたんだい？」

この質問に對して、彼は次のやうに答へた。「僕はね、ハワイのロセッタストーンを探してたんだよ……」

バラドックスのこのハワイに、もし鍵があつたとすれば、それは人里離れたハワイ土人の屍を埋める洞穴に隠されてゐる古人石標に見出されないで——五大財閥、日本人、陸・海軍——の三角勢力、即ち現代ハワイの進路を定めつゝあるこの三勢力の交錯した中に發見されるであらう。

あの安んじきつた愛すべきハワイ土人、祖先より受け繼いだ個人的自由の生活に深い誇りを有するハワイ土人が、この進歩の道程に何らいふべき所がないといふことほど悲惨な事實は無いであらう。民族としてこの一大失敗は、物を保有しやうといふ觀念を先天的に缺いてゐる所によるものである。その結果、彼等より後にハワイに渡來して來た積極的人種と競争して著しく不利な立場に置かれ、遂に今日の如く比較的乏しい生活に甘んぜねばならなくなつた。土人の大部分は魚を漁つたり、僅少の土地を耕して漸く糊口を凌ぐ程度で、實に憐むべき状態である。彼等の手に渡る弗貨は極めて少い。従つてハワイの一人當り購買力は年二百七十五弗で、合衆國內の三、四州を除いては、これより低い所はないといふ原因は、島内各人種中、ハワイ土人に負ふ所が多いためである。

他人種との雜婚によつて、ハワイ土人混血種は殖へて行くが、純ハワイ民族は、初めて外國人の渡來以後年々減じて來た。純粹のハワイ民族は、今日二萬人位しか残つてゐない。彼等の死亡率は、合衆國平均より二倍高く、出生率は遙かに下である。嬰兒死亡率は合衆國平均より八倍も高く、産母死亡率は同じく二倍に昇つてゐる。

同じく合衆國管轄の下に在る他民族——例へば、インディアン族、エスキモー族、サモア族、グアム島のチャモロ族、ヴァーヂン、アイランド島民、ヒリッピン人等は政府經營の醫療並びに病院治療を受ける。がしハワイ土人はこの特典に浴しないのである。多分これは米布合併の當時存在した病院が、土人へ無料で醫療を與へてゐた故であらう。それは一八五八年、エムマ・カレレオナラニ女王とカメハメハ四世によつて建設された病院で、政府補助金、租税、一般寄附によつて經營され、その設立趣旨の中には特に「ハワイ土人の貧困にして無能力者に醫療を施す」ために設立されるといふ條項が含まれてゐた。それから五十年後、一九〇九年、土地の實業家達は右の趣旨を單に「病にして無能力者に醫療を施す」ためと修正した方が時勢に適合すると考へた。そこでこの病院は今日なほ、女王病院として知られ、且つ臣下のため、適當な醫療の機會を與へ得ると考へられたエムマ女王の多大な寄附を仰ぎながら、今では純然たる一營利病院と化してしまつた。その結果、ハワイ人の大部分、殊に純ハワイ土人で必要な醫療費入院費を工面すること

の出来ぬ者は、一切病院の恩恵に預らぬ様になつてしまつた。

王族中いまい一人、ベヤニス・パウアハイ・ピショップ王女も亦、ハワイ民族のために何か寄與したいといふ心から約一千三百万弗に相當する土地財産——殆んどハワイ全島の十分の一に當る土地から成る——をハワイ青年子女教育のために寄附された。そこで、男子部カメハメハ・スクールと女子部カメハメハ・スクールが各一校宛豪華な設備を以て建設され、年百万弗以上に上るピショップ・エステートの収入によつて維持されてゐる。入學許可條項には、ハワイ人の血統といふことがあるが、全校生徒三百四十五名中純ハワイ人は僅か六名しか居ない。その上、ハワイ人そのものが、ごく普通の入學金その他の費用が高過ぎて、學校本來の目的たるハワイ人の入學を阻んでゐると不平をいふ者がある。

有志者の中にはこの學校の價値と、かほど莫大の費用を、卒業と折角の訓練をどう用ひたらいいかさへわからぬやうな少數の、餘り才能も無いハワイ土人に費すことの可否を疑ふ者も相當有るといふことは注目にあたひするであらう。いづれにせよ、學校管理者として選ばれた少數の人々にとつては、この經營は、財政的には正に棚から牡丹餅のやうなものである。その役目は終身で五人の管財人は大した仕事もないのに年一萬弗以上の手数料を支拂はれるのである。一九三九年に、初めてこの財團の經理が裁判所によつて検査された時、一九三八年と一九三九年と二ヶ年

間に、當然右五人が執行すべき義務、少くとも五人で支拂ふべき十二萬弗を、財團會計に支拂はせてゐたといふ事實が報告された。

しかしながら、ハワイ人の大部分は縣政府經營の完備した公立學校に通學してゐる。公立學校には、生徒は主として混血種ではあるが、卒業後は下級書記位に適當な程度の訓練を受ける。特ハワイ土人と支那人との混血種は非常に伶俐で機敏なので相當重要な職を占めてゐる。彼等は全體純ハワイ系の不幸な親戚筋からは強い財政的背景を受け継ぎ、また支那系祖先の抜目の無い性質をも繼承してゐるので、他人種青年と競争しても優位な地位をかち得てゐる。

政府は、ハワイ土人の醫療方面には、何らの施設も行はなかつたが、とにかく家屋敷付の土地（ホームステッド）だけは土人のために保留して置いたので、彼らは其處でタロ諸を作り、豚の一二頭も飼ひ、不足の所は附近の海から魚を漁つて補ひつつ、平和に暮すことは出来る。それにも拘らず、浮世の風は彼らを追つて、この平和郷のホームステッド地位にも侵入して行つた——特にその地位が將來住宅地として見込みのあるやうな場所にその傾向が著しかつた。例へばパバコレア・ホームステッドはホノルル市を見下す二つの丘の中間の鞍部に跨る景勝の地を占めてゐるが、土人の生活状態は、丘の上部に堂々たる邸宅をもつ富豪連には目障りとなるので、もし土人を去らせて、全地域を不動産仲買人の手に移し、分譲乃至貸地にでもしたら莫大な利益になると

考へた者もあつた。しかしこの計畫には強力な反對があつて——過去に於いて他のホームステッドを計畫的に横領された問題に對する反對も蒸し返され——遂に拋棄されることとなつた。

コーカサス系獨裁者團にとつては、ハワイ土人は島の秩序的發展過程を單純化するどころか、却つてその邪魔となる存在であつた。もし彼らが、食べる必要のある時だけ働くといふ傳統的風習を捨て、また毎日一定條件の下に甘蔗畑で働くことは墮落だなどといふ考へを去つて、命ぜらるるままに働いてくれさへすれば、彼らの物質的問題は容易に解決出來たであらう。甘蔗耕地會社は彼らに住宅、野菜園、醫療を無料で供給し、他の必要を満たすに十分なだけの金錢を與へることもできたであらう。さうすれば女王病院使用に關する論争もなく、カメハメハ・スクールに對する惡感も起らず、又ホームステッドの必要もなかつたであらう。

しかし東洋人種が最初に甘蔗畑で勞働し、そこで貯へた僅かの資本を基として、いくらか樂で所得も多い職業に轉じつゝあつた光景も、ハワイ土人にとつてはなんの刺戟にもならなかつた。彼らは行き當りばつたり、慾も得もないので、他の者にとつては不斷の頭痛の種となつてゐる癖に、何れは誰かが面倒見てくれるであらうといふ深い依頼心を有つ問題の兒として残つてゐる。今日一日を樂しんで明日を憂へずといふ彼らの信仰の根は深い。外國人渡來前は王や酋長が彼らを守つてくれた。次には宣教師が彼らを貿易商人から護つてくれた。遂に宣教師は彼らを神の御

手に委ねた（ハワイ土人の多くは極端に信心深く、神が彼らを守り給ふことを示すために好んで長々と聖書の句を引用する）。しかし、近年、神はよそのことに忙しいので、土人はハワイの政治屋が彼らの護り神と教へてくれたワシントンの大親分、フランクリン・デラノ・ルーズヴェルトに頼りすぎることとなつた。

必ずしも意識的にさうあつたわけではないが、土人も亦ハワイ發展に一役を演じ、従つてハワイの廣告に地方的色彩を副ふる者として、必要缺くべからざる要素たることは、どうしても認めざるを得なくなつた。實業家達は、これを利用して利を得る方法を發見した。ハワイが觀光客のメッカとして發展すると共に、土人も亦、この中に入つて行く機會を與へられた。彼らの柔軟な肉體は波乗り、漁り、フラダンス、甲板上より投げ込む銀貨を、飛び込んで拾ひ取る情景など數々の繪となつてハワイへの觀光廣告を飾つた。數百萬語は特作映畫の中に織り込まれて、或は土人細工物を説明し、或は水中に於ける彼等の勇敢な行動を寫し、又はフラ祭、蒸し豚の御馳走等を廣く一般に告げ擴めた。魅惑的なことを求める觀光客誘致案としては、ハワイ土人は何より力であつた——それは又ツーリスト・ビューロー廣告する所の「不可能事が常事である」島のビジネスにとつても主要なものであつた。

かくて、千餘年前、數百海里の大洋を、勇敢にアウトリッカー獨木舟を漕いで、南洋群島より

ハワイに渡つて來た冒險民族の子孫は、嘗て自ら支配したこの國に於いて、このやうな賤しい役割を配せらるるやうになつた。觀光客に甘やかされ、選舉時期になると彼らの投票欲しさの政治屋に誂はれてはゐるが、彼らは彼らなりに白人の甘言の永遠に届かぬ場所を占めてゐる。昨年正月、ホームステッド住ひの若干のハワイ土人が新しい年の初めに新決心を決めやうと集まつた時、つと起つた一人が西洋人の心では全く「進歩」を否定したやうな案を勸告した。「諸君」ど彼は冒頭して「何かうまい考へが頭の一方から入つて來たら、猶豫なく他の一方から出してしまひ給へ、決して頭の中に留まらせて置いてはいけない。そんなことをしたら、そいつは段々大きくなつて、うんとビリキヤ（ろくでもないこと）を作り出すんだよ」と結んだ。

これ以上、簡潔な不介入方針といふものがどこにあつたであらうか？

しかしながら、五大財閥、日本人、陸海軍は、この公式のもたらす贅澤を許すには餘り高い犠牲を拂はねばならぬ。戦争の脅威、經濟狀況の繼續的不安が、明確に現存敵性の何處に在るかを示してゐるので、この三者は互にハワイに於ける優越を争ふためにその争闘を強化した。そこで、結局、三者中その何れが最後の勝者となり得るであらうかといふ不可避の質問が出てくる。

傳統的にハワイ産業を代表する五大財閥が、日本人勢力の傳播を掣肘するであらうか。彼らは陸海軍の宣言に答へて、戦時に對する考慮は、ハワイ平時の政體を決定すべきではないといふ

ことを最終的に確認するであらうか。

物質的並びに精神的に日本帝國の後援を得るハワイ日本人は、常に白人實業家を打ち負かしてハワイ實業界に經濟的突入を逐げるであらうか。

但し又、陸海軍が最後の勝利者となり、ハワイを委任統治に還元し、パナマ運河陸軍地帯より僅かばかり寛大な支配の下に、一切ハワイの民間行事を支配するであらうか。

明白な地理的理由の下に、ハワイ居住の普通人は日本との戦争を、ハワイに起り得べき最悪の出來事と見るのである。さういふ場合、ハワイ住民は神經を惱ます、あらゆる不安の下に戦争の眞ん中に投ぜられるであらう。彼らは日本艦隊に砲撃せられ、その航空母艦を基點とする飛行機に爆撃せられ、米本土との通商を封鎖されて餓死するより外はないやうな破目にならぬとも限らない。又日本陸戦隊が海岸に上陸したり、パラシュートから降下したりするのを見、その上、島の防備を弱めようとする裏切者の在留日本人と、絶望的争闘を続けねばならぬかも知れない。陸海軍はそんなことは不可能だといふ——しかし彼らはさういふ場合を豫想して、着々と防備計畫を進めて居る。多數の者にとつては、戦争の確實性だけでも十分に不快である。戒嚴令の施行と同時に、平和的行政は永久でなくとも、その期間中は消滅するであらう。軍政がすべてを支配し——そしてそれから逃れる途はない。ハワイに對する從來の態度が、國家的といふより市民的で

あつた島民は、軍部が今まで永年擁護して來た通りを正確に守らねばならぬ、また挑戰的にまで個人所有權を主張したのに引き換へて、彼らの個人的利益は國家的利益に役立てねばならぬといふ新しい不満足な考へ方をせねばならなくなる。もしこれが莫大な輸出入によつて維持されて來た經濟機構を破壊するために、莫大な損失を含むとしても、又それは普通市民による自治政府を長期間延期するものとしても——そしてこの二つ共必ず起り得る可能性が多い——市民はその憤りを抑へて、軍部の命のままに従はねばならぬであらう。

この論議は特に時宜に適つてゐる。といふのは、國民一般に戦争がデモクラツシイに及ぼす影響を恐れてゐるからである。少くともデモクラツシイの道具立てをもつてゐるハワイには、多數の人が、太平洋戦争の結果は他の何物よりもハワイの民主的熱望を永遠に潰し去るものだと感じてゐる。

合衆國の他の地方では軍部と市民の間に、これほど平和的利害に矛盾を來してゐる所はない。もし戦争が、軍部によつて永年の間唱へられてゐる點——即ち防備のために數ヶ國語を語る部隊、特に東洋人系のそれを用ふることに伴ふ諸々の困難——を實證したならば、陸軍當局は直ちに議會の協賛を得て、ハワイに永久の軍政を施くであらう。

右のやうな行動に對して、ハワイの反對運動が、どの位有效に行はれ得るかは、相當議論を要

する點である。ワシントン政府の任命により、全然ハワイ以外の地より來る所の三名乃至五名の委任統治者が、天降り式に彼らの上に降りて來たら、ハワイは合衆國中にあらゆる輿論を喚起して、彼らの立場を闡明するであらう。これまで委任統治案を打破する戰術的手段として、何より先にハワイ立州運動を強調した代りに、ハワイは強硬に、現状維持を主張するであらう。過去の經驗が、確かに何かを意味するものとすれば、次の如き議論は十分考慮せらるべきであらう。「忠誠にして進歩的なる自由のアメリカ人は、彼らに賦與せられたる憲法上の權利を拒否せらるべきであらうか、又、彼らは政治的氣まぐれの下に置かれて、彼らを治める政府役員を選ぶことは許されないであらうか。ハワイの民主主義的發展の全過程は、ワシントンの官僚主義によつて挫折せしめられるか、ハワイ根本法に約束せられた平等待遇——それは將來立州への約束を含むものである——はここに於いて拋棄さるのであらうか。要するに、アメリカの傳統的誇り、即ちハワイは異民族の熔鑪爐なりと云ふことは、軍部獨裁官がこれを以て國防の障害也と斷ずるが故に完全なる失敗と見做さるべきであらうか。」

日本との戦争に當つて、ハワイ住民が如何なる行動をとるかがはつきりしないため、その戦争後の影響を考へることは全く無意味である。ただ前記質問は明かに民主主義的機構に挑戰するものである。そんな質問を發することは不必要であるかも知れない。しかし戦争といふ單なる見込

でさへ、ハワイ在住の市民には、遠く離れて戦禍の怖れを感じることに少い米本土市民の考へも及ばない騒動を惹き起すのである。

戦禍がハワイに来ると否とに關せず、軍部は日本の侵略的行動は遅かれ早かれ、兩國間に干戈を交へざるを得ないといふ假定の下にぐんぐん準備を整へてゐる。かくの如き状況の下に於けるハワイ日本人の將來は、決して輝かしいものではない。日本が完全にハワイを占領しなければ——それはただ軍事的奇蹟によつてのみ實現出来るであらう——ハワイ日本人はハワイを支配する二大勢力の間にはさまつて非常な困難に遭遇するであらう。軍部と五大財閥とは、何れもそのもつてゐる利害關係上、ハワイ日本人を信賴せず、ハワイに於ける彼らの行動を支配するために差別的待遇をとるであらう。これは實に明白な非アメリカ的法律で彼らを束縛することであり、今まであれほどの苦心を以て、多年縣の公立學校で教へてきた民主主義に反するものであり、かつ彼らの歸國を兩腕を開いて歓迎する、あの有力な母國に、いやおうなしに追ひこむこととなるであらう。

日本人第二世の變態的立場——彼は堂々たるアメリカ市民である。そして目まぐるしい西洋生活の過中には投ぜられたが、西洋生活の眞の姿は知らぬ——は次に述ぶる三十代の若い日系市民の例が最も雄辯に物語つてゐる。彼は公立學校出身で、今はある白人商會の主任書記、相當の貯

蓄もある立派なアメリカ市民である。同じ日本人の血を承けた綺麗な細君と、行儀よく躰けられた工人の子供、現代式バンガロー、それも自分で建てた家に住み、社會的には公立學校父兄教師會祕書の役を占めてゐる——そして彼のゴルフ・ハンディキャップは五である。彼の雇主である白人は彼を非常に尊敬してゐて次のやうなことを告白した。「彼が日本人であることが實に氣の毒だ、でなかつたら事業全部を委せてもいい男だが。」

この青年に、こつそりと一體自分の將來に就いてどう思ふかと尋ねて見たら、それに答へる前に次のやうに逆襲してきた。「軍部と五大財閥の中間に置かれて、どつちからも邪魔者扱ひされたら、あんた、一體どう思ひますか。戦争になれば一方は僕らを一つ所に監禁しようとしたがつてゐるし、も一つの方は、元來僕らの親達を當地に呼び寄せて置きながら、しよつ中、僕らが仕事をしようとするのを拒みつづけてるんですよ。」

「そりや僕が白人だつたら、今よりうんと良い待遇を受けますよ、もうこれ以上僕の進む途はふさがれてます。かうなれば日本人商會に轉ずるか、獨立の商會を始めるより他ありませんや。」

「だが、僕がいやんなつちまふのは、しよつ中、忠誠問題で何とかかとかいはれることでさあ。僕は、うちの子供を日本語學校へやりますよ、それは第一、年とつた祖父達を悦ばせるし、それに日英兩國語を話せば、將來就職に役立ちますからね。子供だつて僕だつて、れつきとしたア

「メリカ人ですよ。」

同様のことが今一人、ハワイ大學出身の青年についてもいへる。彼の両親はハワイ生れで、未だ日本を訪れたことも無い。他の多くの大學卒業生同様、大學は出たが就職の口は待つてゐなかつた。毎日、新聞廣告の職業欄を探して、やつとタキシード運手募集廣告が目についた。それは彼により適當な仕事と思へる他の廣告と違つて、白人に限るといふ制限がなかつた。ところが申込みをして見ると、廣告主はそつけない次のやうにいつた。「この店には陸海軍の顧客が多い。みんな日本人運手嫌ひでね。氣の毒だが！」

その後、鳳梨罐詰工場に、一時的就職口を得たこの青年は、自分の持場の隣に、氣の好ささうな白人を見出した。この男は、彼や、他の日本人青年と親しくした。晝飯の休みに、一緒にぶらぶらしてゐる時、話はまたもや「日米開戦の時は、君達は一體どうするんだ」といふいつもの質問に落ちて行つた。そしてその白人は進んで「陸海軍が君達に對するやり方はなつちやゐないよだが、君達は一體どうするんだ」と聞いた。

勿論アメリカのために戦ふさ——陸海軍さへやらしてくれれば——といふのが一齊に、義憤をこめた答へであつた。

數週間後、この仕事も終つたので、或る日埠頭近くを歩いてゐたこの日本人青年は、偶然右の

白人に出會した。つひこの間まで、親しい罐詰工場の同業者だつたこの男が、今はそ知らぬ振をして行き過ぎた。彼はアメリカ海軍軍服を着用してゐたのである。

このやうな若い日本人が、こんなアメリカ人をどう思ふかは讀者の想像に委せやう！

都市地域にはこの青年と同様の若者が、數千となくぶらぶらしてゐるが、その大部分は教育程度も低く、考へも定つてゐない。彼らは一つの仕事から次の仕事へと、それも主として日本人社會をさまよつてゐる。雇主である年老つた日本人は彼らの祖國に對する尊敬のうすいこと、不慮な態度は、みな間違つたアメリカ式教育の結果だと批難する。アメリカ人側からいへると、同じ有様を、話にならぬ生意氣だと貶し、大抵、甘蔗耕地へ追ひ返さうとする——それは大多數の日本人青年が、將來の見込がないといつて拒絶するところである。その上、長い間、ハワイに於ける日本人家族制を保存してきた習慣や傳統から彼らが離れ去ることは、急激な年少者犯罪の増加を伴つてゐる——これは初期の日本人間には全然存在しなかつた現象である。日本道德觀念に従へば、これは年老いた親達にとつては堪へられぬ家名の汚れで、その恥を雪がんとために、或は窃盜罪で司直の裁きを受けたやうな場合にはその恥辱を潔めるため、自殺したり或は自殺未遂を來らす事件が少くない。

アメリカ憲法によつて歸化を許されない父母や、祖父母と違つて、これらの少年少女は、ハワ

イにとつては「失はれたる子孫」であり、日米の背景に付いて離れぬ宿命的疑惑に、雙方から責められるのである。彼らの祖先でさへも、彼らに同情していかどうか判らぬやうである。前にホノルルに駐在した日本總領事は、日米開戦に際しては、日系市民の感情を豫言することは出来ない、彼らは決して自分の感情を語らぬとこぼした。或る者はその絶望と無力の代りに途方もない大法螺を吹いては自己を慰めてゐる、それは白人にとつては實に不愉快極まるもので、これを以て、極東に於いて西洋人の頬を撲つてゐる日本の態度の片割れと呼んでゐる。

ハワイに於ける白人家庭の大部分は、この種の挿話に富んでゐる。ある主婦の如きは日本人女中が傲然として、五年以内に日本人がハワイ全土を支配するだらうと答へたといふので、眞赤に怒つて彼女を押し入れに押込んで、直ちに合衆國探偵局を呼んだ。

今一人の婦人は、ドライブしてゐる途中、路傍のスタンドに立ち寄つた所、その日本人ボーイが長々と日本語で立話をしてゐる間待たされたので、たうとうたまりかねて「まあ、日本語が判つたらねえ」と云つた。

「その御心配は入りませんよ」とボーイがいひ返した。「今にあんた方、みな日本語を話すやうになりませうよ」

更に今一つ、或る家に雇はれてゐるハワイ土人の園丁は、例の片言の英語でかういつた。

「をかしいや、島中どこへ行つても日本人が肩を叩いて、今にハワイに白人なんて一人もゐなくなるぜ——みんな日本人になるんだといふんだ。」

さういふ行動は決して輕々には看過されない。軍部や、多くの地方人を心から憤慨させ、一旦日米間に事が起れば、ハワイの日本人は頼みにならぬどころか、何を措いても故國の爲に走るであらう、といふ彼らの疑ひに拍車をかけるのである。その印象は日本人公民協會その他の團體が聲を嚔らして叫ぶ、百パーセント米化運動を以てしても消すことが出来ない。これらの團體は、「日本人子弟は日本人社會の企業へ」といふハワイ全般の社會的希望に添ふやうにと絶えず努力はしてゐるが、その運動は若い日本人を驅つて益々民族的結合に向はせてゐることは否めない。それは一つには失業問題の齎らすデイレムマであるが、確かにそれは、彼等に對してその將來を日本人發展の立場としてのみ考へさせ、ハワイの爲に計らせないやうにすることも確實である。

とまれ、ハワイ日本人と白人との關係が益々緊張し、同時に日本が、その宣傳と誇りの爲に強化されて來た事實に鑑み、これ迄ハワイ日本人に對しては不干渉主義だつた白人も、次第にその意見を變更し始めた。彼らは日本海軍はオアフ島を目的として、ホノルルより百海里の洋上で廣く演習をしてゐると教へられた。又その演習の結果、カワイ島やハワイ島は占領されオアフ島は非常な損害を蒙むらされたことになるとも教へられた。彼らは又、日本から夥しい演説家や、記

者文士がハワイに渡來して、日本の「聖なる使命」について講演して廻るのを見た。又 日本政府の斡旋によつて、日本を訪問するハワイの日本人が益々増加することも知つた。また彼らは、日本人使用人は、園丁、裁縫師等まで、日本の戦争を援助するために寄附を強要され、また或る者は短期訪問の目的で日本を訪れ、そのまま歸布しない者もあることを知つた。

さういふ出來事と、島の若い日本人中の或る者が、得意氣に日本帝國の自慢話をしたり、ハワイの米國旗掲揚式を嘲笑したり、或は日本民族の世界征服説を誇示することと結び合せた時、白人側が日本はハワイを狙ふと疑はざるを得なくなるのは當然であらう。その上、全米に亙る第五部隊狩りの新聞記事を読んだり、合衆國探偵局が、急にホノルルの人員を増加したりするのを見ては、今までの樂園はもはやツーリスト・ビュローの廣告どほりではないと結論するのも無理ではないといへる。

邪推と怨恨がすべてに流れ、しかもそれは現在寄せては返す反日感情の波頭に立つとはいへ、日本人社會は、全體としてハワイ經濟界に益々榮え益々膨脹してゐる。日本人が中産階級層に上つて來たといふ事實は、日本人が今や、大工、石工、請負業、器械工、ペンキ屋、小賣商等々の職業で他人種を凌ぐといふ調査で知られる。専門的職業、オフィス事務等は今なほ限られてゐるが、重要な點として記憶せらるべき點は、日本人は單に數の上に於ても、ハワイの新しい中産階

級として最も大事な要素となつて來た點である。米本土に於てはさういふ階級は問題なく社會の中樞である。當り前の民主主義的過程に於ては、ハワイに於てもさうである。しかし太平洋に於ける事件の趨勢は、アメリカに於て一般的に認められた右の事實を認めさせない。將來、ハワイ日本人の經濟的發展がどう進まうとも、それが潜在的にかたまつた勢力によつてもたらされる限りは、いつも白人社會の澁面と反對なしに得られることはないであらう。それは、日本が何時ハワイを征服するかといふ不安が残り、又ハワイ日本人の發展が、恰かもクリシュナ神の山車が情け容赦なく人々を下敷にして進み行くが如く、日本民族のハワイ征服への幻影と見られる限り、白人の反感を招かずに進むことはできないであらう。

五大財閥と布哇砂糖耕主組合の缺點が何であつたにせよ、彼らは段々増して來るハワイの苦痛を見逃しはしなかつた。止むを得ないので、彼らは益々露骨にハワイ防備に對する島民の熱誠を要求する軍部勢力の侵入を受け容れた。但し、少くとも次の一點に於ては、彼らの熱誠は決して強制されたものではなかつた、それは防備の爲に軍部がハワイに投ずる巨費で、いつも縣收入の上位を占めてゐた。一九四〇年上半期縣下の全ビジネス（二億八十五萬五千七百七十弗）が前年度の同期に比して一〇パーセントの上昇を見せたことは、全くこれによるのであつた。而して聯邦政府のハワイ防備割當豫算が既に使用し始められたので、これは益々増加の一途を辿るばかり

である。その上、艦隊のハワイ碇泊が今より長期間になれば、それによる消費、即ちハワイの収入は莫大な額に上らざるを得ないであらう。しかし、さういふ發展は、ハワイの一般指導者に不安の念をも與へてゐる。それはその代償として、ハワイの地方問題に對する軍部の干渉が、不可避的に多くなることを恐れるからである。

これまで高價な借地料を徴し、どうしても手離されなかつた老大な面積の土地や、海岸に面した高價な土地が頻々と軍用地として收用され、人々を驚かしてゐる。そしてこれはまだいつ果つべしとも思はれない。これは古くからの傳統的土壌所有權問題に對する興味深き侵入であり、新しき意味を加ふるものである。永年に互つて不動産仲買人と、土地を欲しがるとは、ハワイの少數遺產管財團が、私有地の大部分を占むるといふので非難して來た。(縣政府は、全島の三八パーセントを所有するに過ぎない。或る管財團は、その昔、將來を見通して富有なハワイ婦人と結婚し、持參金代りの土地に持前の節約心を織り込んだ白人たちによつて創始せられたもので、その管財人は永年頭として相續地を手離さず、ただ貸地としてのみ提供して來た。これは土地に永久的改善を加へたいと思ふ借地人には甚だ歓迎されなかつた點である。

さういふ人々の恨みの的となつてゐる代表的の財團は、三十五萬英町を有するピシヨップ・エステートで、次がジェームス・シー・キャムベル・エステートである。後者はなかなか拔目のな

いスコットランド人の創設によるもので、十四萬英町を有して、甘蔗や鳳梨耕地、牧牛場、その他小規模の事業個人に貸し付けてある。右貸付によつて四人の受益者は年四十萬弗以上の収入を受けてゐる。

しかし軍部はぐんぐんはひり込んで來て右のやうな財團であらうが誰であらうが遠慮なしに、必要とする土地を收用し始めた。傳統的に土地を支配して來た。従つてハワイの支配者であつた少數の限られた人々にとつては、彼らの手より無理に土地を取られるといふことは非常に亂暴な行爲であつた。その結果、土地を持たぬ民衆を安定せしめ、暗々裡に社會的不滿の主なる原因を除く社會政策を加味した。「土地分讓案」に對する彼らの反對は、他の場合よりも一層頑固なものがあつた。軍部の侵入に對しては抗議すべき位置に居ないので、五大財團とその配下とは、軍事に關係のない方面に於てできるだけの償ひをする方法を求め、それが彼らの言動に對して、何らの批評を許さない經濟的社會的方面の再組織に在ると思つたのは、ハワイにとつて重大な悲劇である。彼らが世評に對して殊更に神經過敏である點は、痛ましくも一九四〇年ハワイ立州運動の絶頂時に表はれた。その時彼らは、通常の状態ならばアメリカ全國民は、ハワイに就いては、ツーリスト・ビューローの描く所を知ればいいと思ふべきであるのに、却つてハワイの眞の生活面を知らせた報道に、より關心を示した。エス・パウマンと、その主宰する『汎パンフィック・

プレス』の影響を受けた新聞雑誌の論説が、型の如く米本土の有力な刊行物に表はれて、ハワイ立州を支持するあらゆる論點を強調した。所が、永い間パウマンの勸誘を受けてゐたフォーチュン誌が、八月號に「ハワイ・糖皮要塞」といふ題でこの問題を論じ、大騒動を惹き起した。フォーチュン誌は決して出鱈目をいつたのではない。十分の調査に基づいて、ハワイの直面せる矛盾と、立州の利害とを公平の立場から併せ論じたのであつた。

その結果、輿論囂々として、ハワイ實業家間に漲つた。この論文は、米本土の讀者にとつては大した害はなかつたに違ひないが、フォーチュン誌はハワイに對してファッショ的態度をとるもの、即ち四十萬住民の自由を犠牲にして、米本土西海岸の安全を守らうとするものだと非難された。それはハワイを「地方的」であつて民主的でないといふと云つたと引用せられ、要するにハワイの「ビジネスメン」は、フォーチュン誌の論文を以て誤謬、虚偽、及び宣傳の集成だと攻撃した。實際、その多くはパウマンの勸告に従つて、フォーチュン誌へは一切廣告を中止しようと思つた。しかし、結局、フォーチュン誌は最高の廣告機關だといふビジネス常識が、すべてを鎮めたのであつた。

立州運動がいよいよ縣内運動となるや、十一月五日の一般投票日直前數週間は、ハワイ中の選舉民に、悉く強制的に立州賛成の投票させようとする危険性が濃厚に表はれてきた。立州提案者

違の高壓的政策に不服の投票者中には、本問題に關しては賛否兩方の立場を明かにすべきであると主張する者が日に増し殖えてきた。眞實の意味に於て、立州問題に就いては賛成派の意見と同様に、反對派の意見も徴すべしといふ民主的熱望は、恰かも本問題賛成派の運動が、正にその望みを達しようとする時期に、相當の障礙となつて表はれてきたのである。

立州運動賛成派の行動に對する不満は様々の形で表はされた。その演說會出席者數は著しく減少した。(或る會合に於て、數百の正式招待狀が發せられたにも拘らず、出席者は僅か六名で、その中にはハワイ縣選出代議士、布哇砂糖耕主組合書記長、同組合のワシントン駐在代表が含まれたる等の事實もあつた)公憤を發した選舉民の中には新聞に投書して「公開演說會」であるべき會に立州反對者の名は含まれてゐないぢやないか」と指摘した者もあつた。傳統的に政戰騒ぎを好むハワイ土人が、立州演說會に出席しても、むつつりと坐り込み、微笑むことも、喝采さへもしようとしなかつた。立州賛成派に投票するやうにと頼まれた多くの土人は、ただぶつぶついつて激しく唾を吐くだけであつた。

立州運動者達は、さういふ不満が増して行くことに氣はついたが、といつてそれを除くやうな建設的努力は少しも試みなかつた。ただ、あれほど外部に向つてハワイ立州の要を説き廻つた後で、最後の投票前の會合に相當の聴衆が集まらなかつたら、全米國民の前に恥を曝すだらうとい

ふ位に過ぎなかつた。この問題に對する面白い反響がホノルル・アドヴァタイザ紙獨特の天氣豫報欄に表はれた。(これは實に愉快な人間味を具へた小句で、いつも小さい漫畫が伴つて居り、「ソル・ブルヴィユス」といふ男が饒舌ることになつてゐる)そこでソル曰く、「まあ立州問題には、よからうと答へとかうぜ。心ちや反對でも、まあ賛成に投票しろといふんだ。だつてどつちにしたつて當りつこないんだから」と。そして漫畫にはでつぶり肥つた政治運動屋が、大業な身振りで首の廻りをレイで一杯飾られた一選舉民を壓倒する様を、口から光りの環が放出するやうに描き、その當惑した選舉民に不承々に「よし、よし」といはせてゐる。

愈々選舉の蓋を開けて見ると、パウマン宣傳機關とハワイの政治運動屋が、八ヶ月に亙る猛運動の結果は、始めの豫想、六十七對卅三を裏切つて、兩々相半ばする事實を表示した。八萬四千名の登録選舉人中、四萬六千名が立州賛成投票をなし、二萬三千は、明かにこれに反對した。一萬五千、即ち選舉民の二〇パーセントは投票しなかつたか、何かの理由で拋棄したのであつた。

立州賛成票が二對一であつたことはホノルル・スタア・プレティン紙にとつては十分の價值ありと見えて、その社説には「ハワイ立州の正しい主義は、之を疑ひ、之を畏れ、或はその眞價を貶し、愚弄した反對者、敵對者の上に見事な勝利を博した」と掲げられた。そこで直ちにこの運動を續行し、適當の時期に米本土全體の認識を求むる爲に、永久的立州委員會を創立すべしとい

ふ案に縣會の支持を要請することになつた。(因みに、本投票結果に關する米本土の輿論を徴する爲に、内務省が全國三百五十の新聞を調べた所、當分の間立州は尙早とする反對論は二對一の割合であつた)

この立州運動の進展と並行して、五大財閥隨一のキャッスル・アンド・クック株式會社の内陣に於て、苦々しい内輪もめが起つて居た。それは、ハワイヤン・パイナップル株式會社(元ドール所有)社長アサトン・リチャーズ氏によつて提出された同社經營方針に對する挑戦を含むのであつた。彼はキャッスル・アンド・クック會社の重役であり株主でもあるので、この事件を詳述することは、ハワイに於ける各種事業の所有權と經營權が、如何に内部的に密接に結ばれてゐるかを知らなければならず、さういふ權限が問題にされると直ちに、内部の矛盾を暴露することを知らしむるのである。

七月中旬、キャッスル・アンド・クック會社の株主は(株主總數百七十名で未拂株九萬六千八百二十を所有してゐる)、リチャーズ氏より長文の覺書を受け取つた。それは次の四つの根本的動機より爲されたと氏は述べてゐる。

- 一、貴下の株主がキャッスル・アンド・クック會社經營上投票權を失ふことを防ぐため。
- 二、キャッスル・アンド・クック會社事業の所有主に、少數グループの隠れたる行動が、彼等

(乃至彼自身)の爲に同社事業の獨占を目的とするものなるが故に、速やかに之が救済策を講ぜざれば株主の損失なることを告げんがため。

三、キャッスル・アンド・クック會社の事業をもとの正當なる所有主に返し、經營者に對して本社を今日の地位に築き上げたと同じ高尚なる指導原理によつて動かすことを確保するため。

四、ハワイヤン・パイナップル會社事業が、同會社の重役會(同會社の直接間接株主より成る大體に於て同會社を代表する人々)によつてのみ經營せられ、キャッスル・アンド・クック會社の重役陣の侵入乃至擧げによらず、或はさういふグループはパイナップル會社事業に特別の優先權を有たぬ様な道を拓くため。

論を進めつつリチャーズ氏はキャッスル・アンド・クック株式會社の三長老役員は、パイナップル會社の株主より同社事業に關する投票權を奪はんとする目的で、變更不可能の代理權制度を確立中であると非難し、該案は主として彼らに株主の意圖とは關係無しに事業を經營し、ハワイヤン・パイナップル會社を、常に右役員の意のままに置かうとするものであると確言してゐる。この行動によつてリチャーズ氏は、キャッスル・アンド・クック株式會社の經營者の眞摯さを疑ふと共に、五大財閥が、その資本を投下してゐる獨立事業を獨占しようとする傳統的思想を疑ふものである。

一九三二年、ハワイヤン・パイナップル會社が財政難に陥つたとき、それは主としてキャッスル・アンド・クックとワイアルア・アグリカルチュラル製糖會社によつて之を救はれ、兩者は共に鳳梨會社の株を増加した。ハワイヤン、パイナップル會社の株主は、五千二百四十六名、その中キャッスル・アンド・クックはその未拂株一八パーセントをもち、ワイアルアは約三六パーセントをもつてゐる。その上、キャッスル・アンド・クックはワイアルアの株二五パーセントをもち、その最大株主として永年ワイアルア重役會を支配してきたのである。さういふ事情であるから、キャッスル・アンド・クックの長老役員連は、ハワイヤン・パイナップル會社の重役會議に於ても當然同會社の政策を支配する權能があると考へて怪しまなかつたのである。それは彼らが(即ちキャッスル・アンド・クックとワイアルア)ハワイヤン・パイナップル會社の株六一パーセントをもつてゐるからである。

とはいへ、ハワイヤン・パイナップル會社の確實な擴張と繁榮をもたらすに非常な努力をしたリチャーズ氏は、會社の獨裁權をキャッスル・アンド・クックが握ることには絶えず反對で、終に公然と次の様な質問を投げたのである。「パイナップル會社の財政的利害が(同會社の總賣上高は、ハワイの年輸出總額の約四分の一に當る)キャッスル・アンド・クック及びその從屬會社の利害と相反した場合には何が起るか」しかし彼の質問は答へられなかつた。また誰も彼の次の

質問「キャッスル・アンド・クックは直接、間接に、ハワイに於て賃銀を得る者の、殆ど凡てに影響をもつであらう」と云ふ問題に答へる要ありと考へなかつた。

キャッスル・アンド・クックの勢力を押しよるとする彼の努力の特別の證據が、一九四〇年五月三十一日に終るハワイヤン・パイナップル會社會計年度總會に、株主に提出した彼の報告書中に表はれてゐる。その日を以て彼はハワイヤン・パイナップル會社とキャッスル・アンド・クック會社（前者の經營上、幾回となく重要な役割を果した）との關係停止を發表した。この動議提出理由は氏の説明によるとハワイヤン・パイナップル會社をして「少くともその直接經營と主要なる事業方針遂行に關する限りは、完全に獨立せしめんとするためである」といふのであつた。また彼は「一九三二年の會社再組織を以て絶頂とする會社財政難の結果として、無理に受諾せしめられ」て以來、次九に面倒になつてきた、鳳梨市場契約をも廢棄するといふヒントを示した。

キャッスル・アンド・クック長老役員の見地よりすれば、リチャーズ氏は明かに望ましからぬ獨立心を表明しつつあつたので、これは單に彼が社長たるハワイヤン・パイナップル會社經營方針に於てばかりでなく、キャッスル・アンド・クックの一重役として同社の管理に參與する時と同様であつた。従つて彼のキャッスル・アンド・クック株主に宛てた覺書に答ふる時、同社の役員は、彼が非難する變更不可能の代理權案は、實はリチャーズ氏自身がハワイヤン・パイナップル

ル會社をもキャッスル・アンド・クック社をも獨占しないやうにと特に考案せられたものであることを高調した。彼は我儘で、共力を拒む、心の平衡と平靜を缺く者といはれた。役員中の一人は、リチャーズ氏の財政的手腕を認めたが、その主張に對して次のやうに彼を窘めた。「私は昔の乗合馬車が斷崖上の狭い途を疾走して行く様を想像する。そして君がその馭者で、馭者臺に坐つて馬車の進行を指揮し、行く手を指してゐる。だが、もしも私が旅客だつたら、もつとしつかりした經驗のある馭者で、そんな所は手綱を控へ、脚はブレーキにかけて、車輪が地についてゐるかどうか十分氣をつける者を望むね。」

恐らく五大財閥の傳統主義を無意識にはあるが正確に表はしたものとして、この説明ぐらゐ正しいものはないであらう。

一體、リチャーズ氏が如何にしてキャッスル・アンド・クックの支配權（彼は同會社の十二株を所有してゐる）を獲得せんと試みたかといふことが公表された時、ゴシップ好きの人達は要するに家庭争議の詳細を表はしたものと悦んだ。一九三八年十二月迄はキャッスル・アンド・クック株式會社株の五八パーセントは二つの遺産管財團によつて保有せられてゐた。この二つの管財團は共に宣教師開拓者及び之を助けた人々によつて創設され、従つてその子孫達が右財團の株主である。その一つジェイ・ビー・アサアトン・エステートはキャッスル・アンド・ク

ツク株三一パーセントを持ち、今一つエス・エヌ・キャッスル・エステートは二七・五パーセントを持つてゐる。然るに一九三八年、重税を節約する爲にキャッスル・エステートは解散され、その財産は、七十五人と少しばかりの株主に分配された。そこで従来、この財團として有つてゐたキャッスル・アンド・クック會社の所有株は個人の有となつたので、同社の株主總會では一團としてではなく、めいめい個人として投票することとなつた。

同じ時に、アサアトン・エステート株主の過半数は同様の行動を執ることに賛成したが、リチャーズ氏は、氏の家族だけで右財團株の二五パーセント（氏自身の持株、三パーセント三分の一に相當する）をもつてゐるので右の清算に反対した。その結果、アサアトン・エステートはキャッスル・アンド・クックの主なる株主として残り、投票権も一團としての力を持ち續けた。

一九四〇年初頭、リチャーズ氏の勸告によりアサアトン・エステートはハワイアン・トラスト會社の持株を増加して、同エステートをしてトラスト會社の最大株主とした。このトラスト會社は、アサアトン・エステート管財人として二四パーセントの同株を持ち、それだけの投票権を保つてゐる。又それはキャッスル・アンド・クックの株も一〇パーセント持つてゐる。その上、代理委任権のもとにキャッスル・アンド・クック社株の一八パーセントの投票権も行使し得るのである。

従つてキャッスル・アンド・クックの長老役員達は、もし將來誰か一人でアサアトン・エステートとトラスト會社を支配する者が出たならば、彼は自然キャッスル・アンド・クックをも支配するであらうと主張するのである。そこでリチャーズ氏にそのやうな独占權を獲得させたり、行使させたりしないやうに、同時に又キャッスル・アンド・クックの株主間の權利を平衡ならしめるために、キャッスル・エステート及びその他の舊株主から五ヶ年間變更不可能の代理人を選ぶ必要を感ずるといふのである。

しかしながら、この争議は全體として、双方の側共に、個人的乃至家族的反目が錯綜してゐるので、その渦中に利害をもつてゐる他人は、リチャーズ氏が正しいか、長老役員達（その中にはリチャーズ氏の伯父もある）が正しいのか、表面に出たところでは判断がつかない位であつた。ハワイアン・バイナップル會社社長の望みが何であつたにせよ、兎も角ハワイに於ける他の實業界の首脳部が、右社長と同様に彼らの事業に對する五大財閥の干渉を嫌ひ、この傳統的壓力に抵抗し得る地位に在つて悦んで抵抗するとしたら、五大財閥の全組織のもつ支配力は崩壊するであらうことは明白となつた。勿論さう云ふことは起りさうにもない。リチャーズ氏のやうに、若き世代ではあるが古い宣教師の家庭に育ち、生來富豪である彼らは反抗するやうな心を有つてゐない。大學乃至學校を出ると眞直に父祖の業に入つて、ずつと下から叩き上げた之等の青年は、

經營上の訓練も事業に對する心構へも殆ど悉く現状維持の得策であることを知り抜いてゐるのである。又、米本土より渡來して、富も家の歴史もなく、ただ實力によつて五大財閥に匹敵する位の成功を捷ち得た少數の者は、五大財閥と協調して行くことが、自分達の富を増す唯一の鍵であることをよく知つてゐた。植物學的にいへば温雅なアサアトン・リチャーズ氏が、自己決意の實驗を試みたことは、恰かも温室内に蒐められた純白のオーキッドの中に、不意に表はれた色彩濃厚な變種のやうなものだとハワイ歴史中に誌されるかも知れない。

かういふ出來事は稀なので、五大財閥首脳部の内部には異常な緊張を起した。彼らの永い經驗の中にはそのやうな出來事を處理する技術を習得したことはなかつた。しかし之はハワイの秩序に對する批評を、無價値なりとして却けるいつもの習慣に據ることを妨げはしなかつた。間もなくリチャーズ氏は恩知らずで正當の根據もないのに、一生なら非難さるべきこともない立派な人々を攻撃したのだといふ印象が世間に擴がつた。リチャーズが正直さと誠實さを攻撃してゐる人（實は彼にとつては伯父）その人の「勸告と懇請によつて」彼は今日キャッスル・アンド・クックの地位も得られたのではない。ホノルルの他の實業家達から、屢々彼の才能と能率とが手痛い非難を蒙つた時、いつでも之を辯護したのは彼が今攻撃してゐる長老達ではなかつたか。色々の諷刺や、あてこすりでリチャーズ氏の缺點は間もなく一般に知れ渡つた。

八月二十九日、ハワイヤン・バイナップル會社株主總會が開催された時、リチャーズ氏は非常な心境の變化を來してをつたといふことが啓示された。總會出席の株主達の前で、かねて用意された聲明書を読んだ彼の伯父によれば、リチャーズ氏は自己の缺點と過去の過失を認め「將來は異つた態度を執る」といふことを約束したといふのであつた。その結果、既に證明済みである彼の手腕を認め、リチャーズ氏を同會社の社長に再選し「將來一層満足な方法で事業を經營するかどうかを例示せしむる」爲に、今一度機會を與へたらどうかといふ提案が伯父なる人によつてなされた。

この提案に對して株主達はみな同意したので、世界最大のバイナップル會社社長たるリチャーズ氏は直ちに再選された。彼は素直にその意志を表して、すくなくとも當分の間は「元の列に戻つた」と云つた——それは恰かも強情な學校生徒がまあまあと背を叩かれて、云ふことを聞いた恰好であつた。

要するにキャッスル・アンド・クック首脳部の權威に對する彼の挑戦は——事實は獨立の事業を築き上げた日本人や、その他の者が日に日に必要を感じつつあることである——移り行く時勢の象徴ではあつたが、未だ一聯の「出來事」として葬られたのであつた。それは風の方向が何れであるかを示してゐるが、未だハワイ經濟界の支配力を分裂させる程の直接脅威とはなる力がな

かつたのである。その理由はかうである。ハワイが合衆國法によつて、年産額百萬噸以上の砂糖を千乃至千五百萬ケースの鳳梨罐詰製造を許可されてゐる以上、ハワイ縣收入の主なる財源は、この二つの收穫より成立する。従つて縣の物質的發展はやはりこの二つによつて繼續せられる。そこで五大財閥と布哇砂糖耕主組合とが「土地と勞働力と給水」の三大組織支配力を奪はれるやうなことはあり得ないのである。ここに於いて、右關係首脳部は、右の事實を深く認識してゐるので、しばしばワシントンに於ける代表をして中央政府に、ハワイの安寧は現状維持を絶對必要とする旨を進言せしめてゐるのである。

それにも拘はらず、合衆國聯邦政府の砂糖産業に對する差別的待遇の脅威が、それが單なる想像であつても、又事實ならば尙のこと、ハワイの關係者に頭痛の種となるのである。ハワイが今日まで順調に來たことについては、彼らは合衆國收穫令を忠實に遵守したこと、及び議會に於いて、直接ハワイを熟知した議員の好意に據る所であることを認めてゐる。議會の好意は決して當にならぬものであるが、事實はこれはハワイの經濟生活の運命を握る極めて重要なものである。布哇砂糖耕主組合はワシントンに事務所を常置し、砂糖産業に關しては最も有能の士をその代表として駐在せしめてゐる。彼の任務は有力な議員と親密な關係を結び、いつでも機會があれば、議會に投票權をもたぬハワイ縣選出代議士の少なからぬ不利な點を補足するにある。といふのは

布哇砂糖耕主組合は民主政體に於ける慣用手段即ち「君が僕の案に投票してくれたら僕も君の案に投票するよ」と云ふ、極めてあり來りの心理の効果を十二分に知り抜いてゐるからである。

ハワイ代議士の議會に於ける變則的立場——例へば産糖割當に關する議會委員會の一員にはなれるが、肝心の割當を決定するなどといふ大問題には投票の權利がない——に憤慨してゐる布哇砂糖耕主組合首脳部は、いつもサムエル・ワイルダー・キング代議士の例を擧げては笑ふのである。數年前ワシントンで議會開會に當り、各委員會を組織する各黨幹部會が開かれた時、キング代議士は八種の委員會に任命方を申込んだ——そんなに多くの委員になるのは議員中彼一人だつた。所で彼の申込は悉く承認された。その理由は或る少數黨の幹部の言に盡きてゐる。

「なあに、どつちしたつて同じこつちやないか」と。

そこで次のやうなことがよく了解されるであらう。即ちワシントンに於て砂糖法案に影響を及ぼすとか、その他ハワイの利害に關する重要法案が提出されようとする場合には、布哇砂糖耕主組合首脳部は屢々ワシントンの現場で、或はホノルルの理事室に集まつて受話機を掴み、五千哩を距てた彼らのワシントン駐在代表と協議するのである。

同様にまた布哇砂糖耕主組合は、ワシントンの上院議員や下院議員は、友人として或はその勢力を利用して、ハワイの問題を解決するために必要缺くべからざる存在であることを熟知してゐる。

る點もよく判るであらう。議員達は議會休暇中にハワイ縣主催で、すべての費用をハワイ負擔としてハワイを訪問し、あらゆる愉快を盡すやうに勸説されるのである。今までの所、提供された色々の歡待ぶりについては、議員の方で何ら不服の聲を聞かない。コックテール・ペーティ、土人風の御馳走、フラ踊り等の合ひ間には、耕主組合役員案内で各甘蔗耕地訪問が行はれる。役員達は周到な用意を以て、ハワイの産糖額は減ぜられ、政府保償金額も他の何處の産糖地域より甚だしく比率を下げられてゐるとか、ハワイの労働賃銀や臨時手當は他の如何なる地域より高いなどといふ事實を説明した。一と通りお祭り騒ぎがすむと訪問客は首の廻りに堆くレイをかけられて船まで送つて貰ひ、そこで萬事愉快な思ひ出を残して出帆するのである。通常これは、ハワイの成果、希望に對する友好的理解を植ゑつける上に大いなる貢獻をなしたが、時に議員の中には米本土に歸つた後、不心得にもハワイの物質的成功を説く代りにその人種問題を強調したりする者もあつた。

議員との友好關係を結ばんとするこの率直な企てを非難する者に對して、その支持者は次のやうに答へる、「州でないために議會に投票權をもたぬ以上、われらの立場を議員の前に提出するのにこれ以上の名案があらうか」恐らくそれはないであらう。事實上その存在理田は、正直に云つて自ら求めてゐることではあるが、將來立州運動を論ずるに當つて、ハワイの指導者達がハワ

イの完全な米化を確證せんとする幾多の愛國的宣言より、遙かに有力にして首肯せしむるに足る論點となるであらう。

ハワイの將來に關する彼らの不安は、ハワイの政治的權利は根本法によつて賦與せられ、それは議會がハワイ住民に諮ることなしに單なる投票數の多寡によつて部分的修正も出來れば、全體としての廢棄もできるといふ事實に基づくものとも考へられる。このやうにして、議會は現在、「テリトリ」である布哇を單なる屬領とすることもできれば、現在の市民よりなる自治政體の代りに、陸海軍人の委任統治にすることもできる。極端にいへば、アメリカの領土から全然拋棄することさへできるのである。

同様に議會は、周到に育て上げられたハワイの經濟及び社會機構を、一夜にして顛倒させるやうな法案を作ることでもできる。たとへば、半球防衛の建前に従つて、合衆國がその本土をできるだけ經濟的に自給自足たらしめねばならぬと假定して見るが良い。色々のことの中で、これは米本土の甘蔗並びに甜菜糖栽培者に、彼らが永年の待望である無制限製糖命令を含むであらう。彼らの産糖量の増加は、恐らく海外産糖地——ハワイを含む——の犠牲においてのみなされるであらう。と云ふのはアメリカ人の砂糖消費量は平均年一人當り、約九十六封度となつてゐるからである。

永年の間、莫大な、キューバ産砂糖（一九四〇年調査、約二百萬噸、ハワイ産糖割當量の二倍餘）輸入許可を支持する論點の一つは、その輸入を杜絶乃至甚だしく減ずる時は、キューバの經濟生活を破滅に陥れ、恐らくまたもや血腥い革命の口火を切ることとなり、その責をアメリカに負はされるであらうといふのである。して見れば、ハワイの砂糖製産が極端に減量されるか、或は抹殺されるかされたら、何が起るかを豫想することは、甚だしく危険である。勿論、陸海軍が嚴存するので革命などの起りやうはない。しかし市民生活の轉位は恐るべきものがあらう。縣收入の半ばは消滅し、勤勞階級の半ば以上は失業する。何でも成長しないものはないといふこの島に暴動が起り、幾多の血が流され、飢餓が襲來するであらう。

同時に、ハワイを今日の現代的競争場裡に押し出す力となつた五大財閥も、布哇砂糖耕主組合も崩壊して、ハワイの企業と勞働にその力を失ふであらう。尨大なエステートも、最早耕地や五大財閥の事業に土地を貸して、確實な収入を計ることができなくなるので、止むなく管財土地を分割せねばならなくなるであらう。要するにハワイの産業は粉々に分散せしめられ、無数の個人による小事業が現出するであらう。それは決して從來高度に合理化された砂糖産業が保證した確實な収入をハワイ全土にもたらすことはできない。さうすると、軍部要地としてアメリカの大計畫中に演ずるハワイの主なる意義に關する論争も消滅してしまふであらう。

さういふ暗い豫想は夢のやうに見える。しかしそれはハワイの産業指導者達が、砂糖はハワイ經濟に重要な役割を果しつつありと吹聴しつつある裏にひそむ、漠然としてまだ表明されない疑懼の念の論理的表現に過ぎない。彼らは、議會がわが國で最も重要な海外産業の源であるハワイを亡ぼすやうな眞似はしないであらうことは信じてゐるが、最も重大な社會的不安が、ハワイ防備を弱める場合には仕方がないとは思つてゐる。大體に於て、議會は砂糖産業に就いては、最近五大財閥幹部がハワイに於ける集會を前にして云つた次のことと同様の風に考へてゐる。「ハワイの砂糖産業はハワイ市民のすべての生活と運命を支配する漠然たる何物かであるといふことは確かによく聞くところである。

「これは部分的には正しい、何則、砂糖産業の失敗は、その成功がハワイの經濟生活に有利であると同様に有害であるからである。

「しかし如何なる惡意の動機がひそんでゐるにせよ、この産業の指導者はこの社會と切つても切れぬ關係に在るので、縣の一般的安寧に對しては深い關心をもつてゐる。それは恐らくそのことを熟知しない者が想像し得る所より、遙かに深甚、眞剣、且つ非個人的なものであらう。」

それにも拘はらず議會が、そのうちに、産業上の責任に就いては、同情的にこの概念に近い處置を執つてくれるであらうといふやうなかない信頼は、ハワイの指導者達にとつては決して十

分とは考へられない。彼らは議會の多數派がいつも變り易いことを熟知してゐるし、又ハワイの代表的問題——それを起す社會的温情主義的秩序は彼らの多くが築き上げたものである——に對してはどうして良いか途方に暮れてゐるのである、そこで一旦州となり、從來誰にも犯されないと思つて來たハワイの支配權に反するやうな法案には、議會で堂々と反對し得る權利をもつといふことは、憂鬱になるほど頼りないこの世に於て、何より力強いことだと考へるのは無理もない所である。

大約三十年も前、アメリカン、マガジン誌がレイ・スタンナード・ペーカーを派遣してハワイの調査を命じた時、彼の報告によれば「ハワイの生活は不自然な緊張と、過重な評價のために奇異な感じを與へる——多くの立派な、眞實な人々が殆ど如何ともすべからざる困難と闘つてゐる」と述べてゐる。彼の報告は殆ど昨日ででき上つたと見て良い位、現在のハワイに適用することができる。しかし振り返つて見ると、第一次世界大戦前のハワイは今日と比較して何と物事が簡單であつたらう。當時は軍隊の駐屯などは、黙つて大目に見られてゐる恰好であつたし、日本人など、多少は問題であつたが決して大したものではなかつた。そして豊富な社會生活は、島中でできるだけ多くの砂糖を産出するために向けられてゐたのであつた。問題が起れば、そんなものは直ぐに解決され——或る場合には即座に抑壓された。

それは最早不可能だし、それに對抗する諸々の力は、非常に強力且つ根本的に反感を持つてゐるので、ハワイの支配權に對する空しき争ひはこの後も續いて行くであらう。そしてそのテンポは世界情勢の壓力によつて決せられるのである。

この繼續的現象に對してハワイの古い傳説を熟知してゐる島の人々は興味深い説明をもつてゐる。彼らは人間の性格と氣質とは、部分的には地球物理學的要素の反映であるとなす説を信じ、ハワイの起源が噴火による點に大いに意味ありとなすのである。あの美しい丘と溪谷の地下深くどろどろと熔岩が流れ、絶えず何處かに流出口を求めてゐる。永い間、それは著しい量となつて出て來ないかも知れないが、急にあるかなきかの地響きと地震を警告として、恐ろしい噴火を起し、蒸氣と猛火の雲柱が立ち昇るのである。同様に、彼らのいふ所によれば、ハワイの生活が進むにつれて、人間同志の衝突や緊張が増大して、つひには言葉や行爲の上の大衝突となつて表はれ、周期的にハワイの熱帶的靜寂を破るのであると。

この説は恐らく科學的検討には堪へられないかも知れない——しかし、それは今なほ守られてゐるハワイ土人の古い習慣も同様である。土人は何物かを欲する時は、火の女神ペレの棲むといふハレマウマウ火口まで行列を作つて出かけて行く。そこで彼らは女神に向つて禱宜事を捧げ、豚や鶏やパイヤその他なんでも女神の賞で給ふものを火口に投じて、彼らを苦しめてゐる事情

を訴へては神助を乞ふのである。

太平洋の樂園に於けるハワイ土人の繼承者達に就いていへば、彼らは既に彼らの偶像と一緒に携へて來てゐる。

譯者のあとがき

一九二一年、アルバート・タブリウ・アママー著“*The Humn Side of Hawaii*”と、それより二十年後、一九四〇年ジエームス・パーカー・ジュニア著“*Hawaii—Restless Panigait*”（現實のハワイ）までの大部分をハワイで送つた私は、前者をもつて代表されるキリスト教的理想主義、人道主義、ロマンティシズムが、金力と武力を基調とする生々しい現實主義にむざんにふみにじられて行く過程を、まざまざと見せつけられた。

「現實のハワイ」は、アメリカ人によつて試みられた後者の記録である。私は、パーカー氏が、現實のハワイを知るためには、ハワイ開拓者で同時に現在その經濟的支配者である五大財閥と、最近太平洋の浪騒がしくなるにつれて急にクローズアップされて來たハワイ駐屯のアメリカ陸海軍と、その間にはさまれた日本人問題を正視しなければならぬといふ觀點には、全く同

感である。敢へて拙譯を世に問ふ所以である。
 譯上の助力をして下さつた兒島君、淺井嬢、大島嬢、水島嬢、出版を可能な
 らしめて下さつた育生社に深くお禮を申し上げます。

昭和十六年十一月

譯者

新日本叢書
 ハワイの實現

網本



昭和十六年十二月一日印刷
 昭和十六年十二月十日發行

定價 二圓

譯者 國友忠夫

發行者 服部英雄

發行所 育生社弘道閣

東京市神田區錦町三丁目二〇番地
 電話神田(25)〇六七二番
 振替東京一一二二二番
 會員番號一〇二五〇六番
 東京市牛込區川吹町一九八
 印刷者 山本 貞 男
 製本者 河手 一 郎
 東京市神田區淡路町三ノ九
 配給元 日本出版配給株式会社

新日本國叢書

(第一期 二十卷)

1	ハ ワ イ の 現 實	ジョセフ・バアカア	國友忠夫
2	ス マ ト ラ の 苦 力	マデロン・ルロフス	佐藤新一
3	オ セ ア ニ ア の 家	フイリツボ・サツキ	三浦逸雄
4	蒙 古 平 原 を 横 ぎ る	ロイ・アンドリニウス	内山賢次
5	東 方 へ の 空 の 旅	アン・リンドバーク	村上啓夫
6	マ ラ ツ カ の 女	フランシス・ド・クロワツセ	永田逸郎
7	蘭 印 ま た 佛 印	マリオ・アツペリユウス	岩崎純孝
8	東 シ ベ リ ヤ の 土 地 と 民	ベエ・アルセニョフ	土方定一
9	颱 風 と ア ジ ア	ジャン・ドゥレール	姫田嘉男

10	イ ラ ン へ の 道	ハーバート・テイシイ	村上啓夫
11	白 日 の 印 度	ケイ・シエルヴァンカ	江口芳郎
12	メ キ シ コ の 朝	デイ・エイチ・ローレンス	伊藤整
13	最 後 の 飛 行	アメリカ・イヤハート	隅田久尾
14	蒙 古 人 の 天 幕	ヘニング・ハスランド	三浦逸雄
15	北 氷 洋 S O S	ジョセフ・フエルテル	藤枝高士
16	緑 の 石	ハインツ・グリク	川端勇男
17	王 の 道	アンドレ・マアロオ	小松清
18	極 北 の 視 角	エドワード・エルスベリ	古館清太郎
19	南 十 字 星 と 濠 洲	ハアバート・ウイルキンス	宮田峯一
20	支 那 邊 疆 を 探 る	オウエン・ラテイモア	土方定一

919
ハ
110

16, 12, 16

終